COBALT-SERIES

華焔

―義経の妻―

倉本由布



集英社

治承五年（一一八一）の晩夏、河越重頼の娘・葵は、不思議な少年と出会った。
「鎌倉の源九郎義経どのを訪ねて行くんだ」
鬼王丸と名のった少年に、そういわれた時〝げんくろうよしつね〟の名は、なぜか葵の胸に居心地よくおさまってしまった……。
源平合戦から、平泉の藤原氏の滅亡までの激動の時代を、義経の妻として生きた少女の恋と愛にゆれる半生記……。

恋気分いっぱいの夢♥小説誌！



1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売
隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。
集英社



COBALT-SERIES

華　焔～義経の妻～

倉本由布

集英社

目次

華焔 ～義経の妻～

第一章 治承五（一一八一）年・鎌倉《英雄前夜》……5

第二章 元暦二（一一八五）年・京都《花影の人》……69

第三章 文治元（一一八五）年・京都《星、堕ちゆく》……129

第四章 文治五（一一八九）年・平泉《時のきざはし》……199

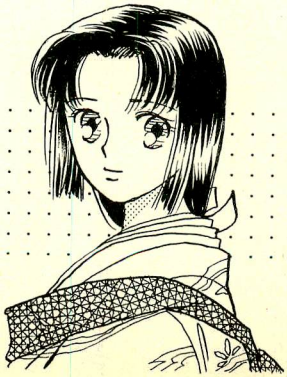
あとがき……277

イラスト／湯口聖子

第一章

治承五（一一八一）年・鎌倉

《英雄前夜》



夢幻の夏

武蔵大路の真ん中で、葵は、少年をひとり拾った。

治承五（一一八一）年の晩夏。真夏よりも肌に重い名残の暑気が、あたりを鬱陶しく満たしているころのこと。

生まれ育った武蔵国河越庄（埼玉県川越市）から鎌倉を目指す、はじめての旅の途中である。

（私のこと、見ている……？）

ふと、そんな気がして、通り過ぎた景色を振り向いたのだ。

そこに、彼がいた。

女の子みたいに、やさしげな顔をした少年。道端にうずくまり、ぼんやりと自由な瞳を宙に遊ばせている。

あの子の視線だと思った。彼の前を通り過ぎたとき、確かに感じた。すくい上げるように葵を見つめる、ひそやかな、あたたかな、気配……。

ところが、振り向いてみると、少年は、こちらになど知らんぷりの様子なのだ。
（気のせい……？）
葵は、そっと首をかしげたが、
「姫さま、どうなさいましたの？」
供の小夏に促され、ふたたび歩き出した。
すると、また感じる。誰かが葵を見つめている。
あの少年に違いない――。
それは、根拠のない確信だった。でも、絶対の自信があった。
もう一度、勢いよく少年を振り向いてみると――、
（ほら……！）
やっぱり見ている。うつむいた視線が、確かにこちらを向いている。
葵は、た……っと走り出す。
「姫さま!?」
供の者たちが慌てて叫ぶのもおかまいなしに、葵は少年の前に立った。
「あんた、私を見てなかった？」
十四歳の葵より、すこし幼く見える少年である。
彼は、まぶしげに葵を見上げ、けれどもすぐ、ふいとその目をそらしてしまう。

「べつに、あんたなんか見てないよ」
ぼそりと言った。
「そう――？」
「見てない」
「……そうかあ」
葵は、小首を傾げたあと、
「なあんだ、やっぱり思い過ごしだったのか」
にこっと笑った。真夏の太陽の残り火が、ちかりと光るような笑顔だった。
脇へそらした少年の瞳が、また、まぶしげに細まり、
「……だけど」
と、うめいた。
「あんたのことは見てないけど、あんたたちのことなら見てた」
「――？」
「あんたたち、鎌倉へ行くのかなあと思って、それで……」
ちらりと葵を見上げる。
「そうよ、私、お父さまに会いに鎌倉へ行くのよ。お父さまったら、ここのところ、鎌倉の館に行ったきりで、ちっとも帰ってきてくださらないんだもの。――あんたもそうなの？　鎌倉

へ行くの？」
「うん」
「だったら、どうして、こんなとこに座ってるの？」
「暑くて、腹がへって、動けない」
そんな情けないことが、理由らしい。
「すぐに食べられるものっていうと――あ、梅干しがあるけど」
葵は、少年に目の高さを合わせて、しゃがみこんだ。
「食べる？」
訊ねると、少年はうつむきがちな目線のまま、それでも素直に頷いた。
そのとき、彼の頬が、わずかに緩んだように見えた気がする。
（笑った……！）
葵は、すっかり嬉しくなり、
「ねえねえ、小夏、千鳥！　梅干し、あるよね!?」
はりきって供の者たちを振り向いたのだけれど。
乳姉妹の小夏と千鳥、そして家人たちも皆、うさんくさそうに眉をひそめ、こちらを見ているのだ。
「ねえ――！」

手招きをすると、小夏が、仕方なさそうに駆けて来た。
「小夏、梅干し……」
葵が言いかけると、
「ありません」
硬く冷たい声が、すぐに返ってきた。
「でも……」
「ないんです、もう。さ、姫さま、参りましょう」
葵の袖を引っ張って、立ち上がらせた。
「でも……」
「こういう変なのとは、関わり合いにならないほうがいいんです」
葵の耳元に、小夏は、こそこそと、そんなことを囁いてくる。
「こんなところに座り込んだりして、何者だかわかったもんじゃありませんよ。野盗の一味だったりしたら、どうするんです!?」
「……でも」
葵は、肩ごしに少年を振り向いた。
少年も、こちらを見ていた。
が、彼の瞳が映しているのは、小夏の姿である。小夏もそれに気づいて、彼のほうへ視線を

落とし、そして――。

思わず、ひるんだ

小夏を見つめる少年の目。それは、不思議な目だったのだ。

女の子のような顔だちには、そぐわないほど、肝がすわっているというのか、ふてぶてしいというのか――瞳の底に、そんな鈍い光がある。

「俺、〝変なの〟なんかじゃないよ。平泉から鎌倉へ、知り合いを訪ねて行くところだもん」

彼はきっぱりと抗議した。

それまでの頼りなげな様子は、ひらりと衣を脱ぎ捨てたように消えている。

どうやら小夏のひそひそ声が聞こえてしまい、自尊心をいたく傷つけられたものらしい。

小夏は、ばつの悪い思いで黙り込んだ。

「……知り合い？」

訊ねたのは、葵だ。小夏の手を振り払い、また、彼の前にしゃがみ込んだ。

「うん。源九郎義経どのを訪ねて行くんだ」

彼は、誇らしげにその名前を口にした。

けれど、葵の目は、きょとんと丸くなる。

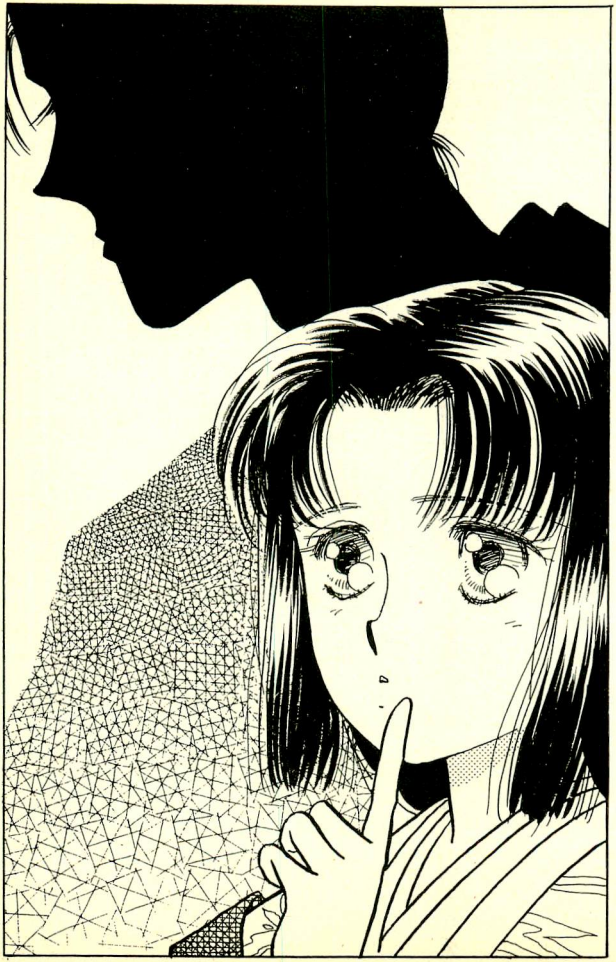
「誰、それ？」

「知らないの？」

少年の目も、同じように、きょとんと止まった。
「鎌倉の御所さま（源頼朝）の末の異母弟ぎみの、九郎どのだよ？」
「知らない」
「……ちぇっ。しまらねぇな、九郎も」
少年は、がっかりした顔で呟いている。

☆

源九郎義経――。
彼が、一の谷、そして屋島から壇の浦へ――と、その天才的な戦術家ぶりを発揮するのは、まだまだ先の話である。
葵が少年と出会ったこのとき、治承五年、旧暦の七月。源頼朝が打倒平家の旗揚げをして、やっと一年を迎えようとしているころのこと。
このときの義経は、前年の十月、わずかの手兵を連れて頼朝の陣に馳せ参じたばかりの身。なんの戦功をたてたわけでもない。
鎌倉においてさえ、まだ、それほど重要な存在と思われていない義経の名を、武蔵国の田舎に住む少女の葵が知らなかったのも、無理ない話だろう。
が、どういうわけか、少年から教えられたその名は、葵の胸に、居心地よくおさまってしま



った。

少年と道づれになり、鎌倉を目指して旅を続ける途中、ふとした拍子に〝げんくろうよしつね〟という呟きが口の中に浮かび、

（いったい、どういうわけなのかしら？）

と、何度も首をかしげたものだ。

のちに、義経との出会いが葵にもたらす運命は、このときからもうすでに、回りはじめていたのかも知れない。

☆

だから、鎌倉の河越館に落ちついてすぐ、葵が父に訊ねたのは、

「お父さまは、源九郎義経という人に会ったことがある？」

と、そのことだった。

葵の父の名は、河越重頼という。武蔵国河越庄を支配する豪族である。その妻――つまり葵の母が、頼朝の乳母の娘だということもあり、頼朝の信用は厚い。

さて、重頼は。

「九郎どのに？」

と、頬の半分に笑いを、残りの半分に訝しげな色を浮かべ、

「もちろん会ったことはあるが――」

戸惑ったように首をかしげている。

家庭での重頼は、実直で朴訥、そして無口な男である。葵は、幼いころから、母親よりもこの父になついていて、ころころと犬のようにつきまとい、離れようとしなかった。

その葵が、久しぶりに会ってみると、父に抱きつくより先に男の名前を口にしたのだ。重頼は面食らい、かしげたままの首を、そっと葵の目からそらす。

ところが、

「九郎どのというのは、御所さまの異母弟ぎみなんですってねえ」

と続けられた葵の呟きには、どこか、上の空の様子があった。

実は葵は、〝義経〟という名前の向こうに、あの少年の面影を浮かべていたのだ。

会ったこともないのに頭を離れない義経の名の不思議さより、今は、あの子のことが気にかかる。

「あんた、名前はなんというの？」

訊ねたら、

「鬼王だよ。鬼王丸」

と、勇ましげな名前を教えてくれたっけ。

彼とは、鎌倉に入ってすぐ別れた。九郎義経の館の所在を確かめ、なんの未練もない顔で、

その門をくぐっていってしまった。

「なんだか情の薄い子ねえ」

小夏は眉をひそめていたし、葵も、どこか物足りない思いがしたものだったけれど……。

「葵、明日は時間を作ったから、鎌倉を案内してやろう。今ちょっと、八幡宮の造営のことで、ごたごたしてはいるんだが……」

やがて、重頼は気を取り直し、鎌倉見物に葵を誘った。

ところが、

（あのコに、また会えるかな⁉）

胸の中でそんなことを考えて、ひとり、わくわくしている葵は、父の言葉など聞き流している様子なのだった。

のんき屋御曹司

源九郎義経というのは、なんとも呑気な男である。

どんな状況の中でも、慌てるとか、焦るとか、恐れるとかいった感情に振り回されることが、ほとんどない。

「まあ、なんとかなるさ」

で、生まれてから二十三年になる今日までを生きてきた。

彼は、平治元（一一五九）年――父・源義朝が、今にいう平治の乱で平清盛に敗れた、その年に生まれている。

父は翌年の正月三日に殺され、母の再婚相手・藤原長成にしばらく養われたあと、十一歳で鞍馬寺に入った。僧になることを条件に、平家は九郎を生かしてくれていたからだ。

が、彼には、僧になる気など、まったくなかったといっていい。辛気くさいことは大嫌い、経も覚えず、山の中を暴れまわるだけの毎日を過ごしていたのだから。

結局、十六歳のとき、寺を飛び出し、ついでに京都からも飛び出した。

その旅では、かなりの苦労もしたようなのだが、それすらも、
「まあ、なんとかなるさ」
で、乗り越えてしまったのだ。
そんな彼だから、突然、現れたあの少年――鬼王丸を迎えたときの言葉も、ふるっている。
「なんだ、遅かったな？」
驚きもせず、彼はそう言った。
「おまえのことだから、すぐに追いかけてくるだろうと思って待ってたのに、結局、一年近くも顔を見せないんだからなあ」
「……なんだよ、その〝おまえのことだから〟っていうのは？」
「だっておまえ、俺がそばにいないだけでビービー泣いたり、うるさいって言うのに俺の後をついてまわって離れなかったり、とんでもない甘えんぼなんだもんな」
九郎は、にやにやと笑った。
奥州（東北地方）の平泉から来たのだ――と、葵と出会った時、鬼王は、そう言っている。〝なんとかなるさ〟の旅の果てに九郎が辿り着いたのが、その奥州・平泉だったのだ。
平泉で、ふたりは出会った。鬼王が八歳のときだった。
そして、しばらく一緒に暮らした。九郎が、頼朝の挙兵を聞きつけ、ふたたび平泉を飛び出すまで――。

「おまえ、俺がいなくなって寂しかったんだろう？　だから来たんだろう？」
「なにバカなこと言ってんだよ。俺をいくつだと思ってるんだ？　もうガキじゃないぞ？　十四だぞ？」
「見えねぇなあ。せいぜい十二だな？」
「……悪かったなっ」
鬼王は、ぷくっとふくれながら視線を横に落とした。
でも、九郎の言うことは当たっている。
九郎のいなくなった平泉は、つまらなくて、退屈で、居心地が悪くて――。
だから、鎌倉へ来たのだ。
（まあ、それだけじゃあないけどな）
鬼王は心の中で呟き、けれど、口にも顔にもその言葉を表さなかった。

☆

九郎には、二十三歳になった今でも、正式な妻がいない。
鞍馬の寺にいたころはともかく、平泉に住むようになってからは、世話になっていた奥州の王者・藤原秀衡から勧められた女が幾人かいたのだが、皆、断ってしまった。
もちろん、

「これ、という妻を、自分で見つけ出したいんだ、俺」
というのが理由である通り、あちらこちらへ通ってはいたのだけれど。
まだ、見つけられずにいる。
鎌倉でも、すぐに通う女を作った。ある御家人の娘である。
その日、館の主が留守をすると聞いて、九郎は、早い時間に忍んでいった。
ところが、いつも取り次ぎをしてくれる侍女が出てきて、
「姫さまは、お故郷へお帰りになられました」
と言う。
「でも、約束をしていたんだよ？」
侍女は、困ったように首をかたむけ、けれども強い調子で、
「とにかく、姫さまは、おられませんし、いつお戻りになるとも、わたくしたちにはわかりかねますので」
そう言うと、さっさと引っ込んでしまった。
「……どうなってるんだよ？」
呆然と呟くほか、ない。
「ふられたかなあ？」
でも、この日ならば父は故郷へ帰っていて留守だから——と言ってきたのは、姫のほうだっ

たはずだ。

仕方がないので帰ろうとは思ったのだが、腑に落ちないのと未練とが、九郎の足を止めさせた。そのまま、板塀を背にずるずると座り込む。

季節は初秋を迎えていた。

昼と夜のめぐりも変わり、ついさっき真昼を越えたばかりだと思っていたのに、透き通った暮色が、もう、じわりじわり、風の隙間から生まれはじめている。

（供を連れてこなくてよかったな）

とりあえず、そのことに胸を撫で下ろした。

九郎とその従者たちとの関係は、主従というより仲間の意識が強い。それだけに皆、九郎に対しても辛辣で、こんな情けないところを見られたら、きっと大笑いされるに決まっている。

（このまま館に帰るとして、さて、なんと言い訳をしようか？）

からりと晴れた風の中で、そのことを考えた。

すると、向こうから、少女がひとり歩いて来るのが見える。

見るともなしに彼女の姿を追っていると、あちらもそれに気づいたのか、真っすぐ九郎のところへやって来て、

「何してるの？」

物おじしない目で問いかけてきた。

「こちらの姫に用事があって来たんだが、留守のようだったから」
正直に答えてやると、
「あら、私もよ。私も、こちらのお姫さまに、この間お借りした草紙を返しにきたの」
「でも、留守のようだよ？」
「いいわ。返すだけ返してくる」
少女は、ぱたぱたと門のほうへ駆けていった。
その背中を見送りながら、
（あの子が戻ってくるのを待ってみようか）
ふと、そんな気持ちになった。
もしかしたら、留守だというのは、九郎を追い返すための嘘かもしれない。あの子が、長い間、館の中にとどまっているようであれば——。
が、ほどなく少女は戻ってきた。
「まだいたの？」
九郎のそばで足を止める。
「うん。やっぱり留守だった？」
「ええ、お留守だった。あのね、私、どうしてお留守なのか訊いてみたの。そうしたら、こちらのお姫さまには通ってくる男の人がいたんだけど、お父さまがそのお相手を気に入らなくな

ってしまったものだから、姫をお故郷へ強制送還してしまったんですって」
「……なんだって？」
九郎は、ぱちくりと瞬きした。
九郎が姫のもとへ通っていることに、館の主人は前々から気づいていたはずだ。それでも何も言わないのは、黙認してくれているからだと思っていたのに。
（鎌倉御所の弟が通ってきているというのに、いったい何が気に入らないというんだ？）
自尊心を、ひどく傷つけられた思いがする。
「こちらのお姫さまのところに通っている男の人って――もしかして、あなた？」
少女は小首をかしげ、おずおずと、けれども好奇心いっぱいなのを隠しきれないといった顔で、九郎をのぞき込んできた。
「そうだよ」
いくらでも嘘はつけたはずなのに、どういうわけか素直な気持ちになってしまい、九郎は頷いた。
「そうかあ――」
少女は気の毒そうに唸り、九郎をなぐさめてくれるつもりなのか、
「でも、こちらのお姫さまは、やめておいて正解よ？」
そんなことを言う。

「どうして？」

「私、お父さまのご縁で、あの方に仲よくしていただいていたんだけど。でもね、おしゃべりをしていても手応えがないかんじだし、ちっとも楽しくないの。どうも面白味がないのよねえ。……あら、ごめんなさい、悪口なんか言っちゃって。あなたの恋人なのにね」

「いや――」

九郎は苦笑しつつ、

「いいよ。わたしも、あまり楽しみのない姫だなあとは思っていたもの」

それでも、関東に育った武家の姫にしては、おっとりと優雅なかんじが気に入ってはいたのだが……。

この少女の言葉を聞いていると、今まで姫の美点だと思っていたものが、はらはらと色褪せて見えてくる。

（面白い子だな）

と思った。

どこの姫か、と訊ねると、

「私、河越重頼の娘です」

という。

河越重頼の娘――もちろん、葵だ。

「河越どのの娘御か。わたしは源九郎義経」
おごそかに、九郎が名乗った、その途端。
彼女は頬をピクリとふるわせ、
「――嘘っ!?」

☆

九郎の館には、不思議な気配がある。
葵の知っている、いわゆる〝武家の館〟とは、どうも様子が違っているのだ。
僧兵くずれのような大男が、我が物顔でのし歩いていたり。かと思うと、武士にしては頼りなさすぎるような痩せぎすの男が、卑屈に笑っていたり。
誰も彼も、もともと家来というものを持っていなかった九郎が、旅の途中で拾い上げてきた者らしい。
（なんだか、野盗の隠れ家にでも来ちゃったみたい）
まさに、そんな感じである。
葵は、おっかなびっくり、九郎のあとについて行った。
「なんだ九郎、今日は例の姫のところじゃなかったのか？」
郎党のひとりらしい男が、けれども郎党のようではない口をきいた。

「そのつもりだったんだが、途中でこの子を拾ったから、予定を変えて帰ってきた」
「――？」
じろりと葵を見つめた目は、この館にふさわしく、武士というより盗賊のように鋭い。
びくっと肩をふるわせつつも、葵は、九郎の言葉にかすかな笑いをもらした。
（ふられたくせに、かっこつけちゃって）
結局、例の姫をあきらめる気になったらしい九郎は、葵を連れて館に帰ってきたのだ。
葵が鬼王の知り合いだと知ると、
「そりゃいいや。遊びにおいで」
などと調子よく誘ってくれたのだが、どうもそれは、ふられたことを隠すための小細工だったようだ。
「なんだ、このガキは」
盗賊のような目の男が言った。
九郎は、ちょっと笑い、
「葵だよ。鬼王の女」
「鬼王の？」
「違います！」
葵は、あわてて叫んだ。

「ちょっと知ってるだけです。鎌倉へ来る旅の途中、道づれになっただけで……」
「わかってるよ」
九郎が、さもおかしそうに笑う。
「あのチビに、女なんかいてたまるか」
盗賊の目の男も、上を向いて笑った。
（こういうことで、からかわないでよね。私、慣れてないんだから）
葵は、くちびるを尖らせて黙り込んだ。
この、盗賊のような目をした男は、平泉を目指す途中の九郎と知り合って以来、
「俺は九郎の、一の郎党だ」
と自称している男で、伊勢三郎義盛という。
その伊勢三郎が、
「鬼王なら、市を見物に行くと言って出かけてしまったぞ？」
そう言った。
葵が、がっかりした顔になると、
「それなら、帰ってくるまで遊んでいればいい」
わらわらと集まってきた男たちが、葵の相手をしてくれた。
葵の知らない、諸国のことを教えてくれる。

葵はそれを、目を輝かせて聞く。
見かけによらず人の好いのばかりらしい、ここの男たちに、葵はすぐ馴染んでしまった。
知らない間に、鬼王のことを忘れていた。
だから、とてもびっくりした。ふと目を上げ、そこに鬼王の顔を見つけたときには。
「……なにしてるんだ？」
荒くれ男たちの真ん中にいて、平気な顔で笑っている葵のことを、鬼王が、まんまるに見開かれた目で見ていた。

☆

「びっくりした。なんでウチに女の子がいるのかな——って、一瞬、慌てた」
鬼王は、夜の中に身を沈めるようにして歩いている。
彼に送ってもらいながら、河越館へ帰る途中だ。
あたりは、とっぷりと夜に染まり、寒いくらいの風が肌の上を這ってゆく。
やっぱり陽が短くなったな——鬼王は、ぽつんと呟き、そのまま黙り込んだ。
といっても、不機嫌になったわけでも気まずい思いをしているわけでもなく、ただ、なにを話したらいいのかわからなくて戸惑っているだけらしい。
だから葵は、答えの返らないことなど気にせず、楽しくおしゃべりをはじめた。

鬼王は、横顔で聞いていてくれる。
九郎の館にいた連中のこと、九郎と会ったときのこと、そして、九郎が例の姫にふられたらしいことを話すと、
「……ほんとに？」
鬼王の横顔が、ぴくりとこちらを向いた。
「ほんとよ。あそこのお館さまのお気に召さなくなっちゃったからなんですって」
「ふうん……」
唸ったあと、なにか考えはじめたらしい目をして、また黙り込んだ。
今度は、葵も黙った。
河越館までは、もうすぐだ。

☆

ところで、河越館では、ちょっと――と言って出かけて行った葵が、夜になっても戻らないので、大騒ぎになっていたようだ。
葵が呑気に館の門をくぐって行くと、小夏の妹の千鳥が、真っ青な顔に涙まで浮かべて飛んできた。
「ああ、もう、どこにいらっしゃってたんです!?　みんなで捜し回っていたんですよ!?」

「え……？　そうなの？」
「当たり前です！　こんな遅くまで……！」
叫んだ千鳥の声は、悲鳴のようだ。
「でも私、いつも、このくらいの時間まで外で遊んでいるじゃないの」
「ここは鎌倉です、河越庄じゃないんです！　道にでも迷われたんじゃないか、どこかで危ないめにでも遇ってらっしゃるんじゃないかって、もう不安で不安で……」
千鳥は、くすんと涙をすすった。
姉の小夏が、勝気で、からりと晴れた性格をしているのとは正反対に、千鳥は、泣き虫で弱虫で――でも、とてもやさしい女の子だ。
「心配かけて、ごめんね」
千鳥の涙に謝ったあと、葵は父のところへ行った。
「……帰ったか」
葵の顔を見るなり、父は、ため息まじりに唸った。
「どこへ行っていたんだ？」
「源九郎義経どのの館へ」
「九郎どのの……？」
「ええ。お友達になったの」

「……そうか」
父は、なんだか歯切れの悪い頷き方をした。
（なにか、あるのかしら……？）
葵が、そっとうかがうと、さらりとそれをかわし、
「鎌倉は、河越庄とは違って、にぎやかな町だ。人が多ければ、それだけ物騒になる。遅くまで出歩かないこと、ひとり歩きはやめること。――それが出来ないのなら、明日にでも河越庄へ帰りなさい」
父は、滅多に怒らない。
怒るより、おだやかな声で、短い言葉で、葵のなにが悪かったのか、これからどうしなければならないのかを教えてくれる。
だから葵は、素直に頭を下げた。
「わかりました。ごめんなさい」
父は無言のまま、小さく頷く。

落陽

その後も葵は、九郎の館へ遊びに行った。
葵が、ひょこっと顔を見せると、
「鬼王なら、いないぞ？」
九郎が必ず、鬼王の名前を出してからかう。
隣で、伊勢三郎も、にやにやと笑っている。
「べつに私、あの子に会いに来たわけじゃないもん！」
本当に、そんなつもりで来るわけではないので、ツンッと澄まして言ってみるのだが、誰を相手に遊んでいても、何の話をして笑っていても、どうも面白くない。
「……帰ろっと」
すごろくの賽を放り出し、葵は、いきなり立ち上がった。
「もう帰るのか？」
「うん。遅くなると、お父さまに叱られるから」

「ふーん？　でもまだしばらくは明るいから、海へ寄って行ったらどうだ？　今ごろの海は、いいぞ？　夕焼けの色が、ちょっと違ってキレイだから」
「海……？」
「そ。海」
九郎は、葵の髪をやさしく押して、
「気をつけて帰れよ？」
と笑った。
（海かあ……）
いいかもしれない。

☆

波の穂が、夜に向かって手招きする。
冬の陽は、もう真っ赤に熟れて、今にも落ちてしまいそうなところで、ようよう雲に引っかかっている。
そんな日暮れの海を背に、商人風の男がひとり、こちらに向かって歩いてきた。
すれ違うとき、ちらりと葵を見下げたけれど、すぐに目を伏せ、うしろ姿になった。
「姫さま、もう帰りましょうよう」

供に連れてきた藤太が、寒そうに背中を丸め、泣きごとを言った。
ところが、葵は聞いていないのだ。藤太をその場に残し、いきなり走り出す。
波打ち際にぽつんと座る、少年の影を見つけたからだった。
「姫さまぁ！」
叫んだ藤太の声に、少年がこちらを振り返った。
鬼王だ。
「こんなところで何してるの!?」
はあはあと息を切らしながら、葵は、鬼王の隣に腰を落とした。
（九郎が海へ行けって言ったのは、鬼王がここに来てることを知っていたからだな？　おせっかいなんだものなあ、もう！）
でも、やっぱり心がはずんでいる。
「海を見てる」
鬼王は、そっけなく呟いたけれど、
「もうすぐ夜になるよ？　あぶないよ？　帰ったほうがいいよ？」
葵が真剣に言うと、
「俺は男だもん、平気だよ」
くく……っと肩から笑いをもらす。

「いいなあ。私なんか、ちょっとひとりで外出しても、ちょっと遅くまで遊んでいても、お父さまに怒られちゃうのに」
「いかにも可愛がられて育ったってかんじだもんな、葵は」
「……そお？」
上目づかいに鬼王を見た。
「うん」
鬼王は、やわらかな瞳をそれに合わせた。
ふと、時間がやさしく流れる……。
そのあたたかな不思議さに、最初に戸惑いを感じたのは、鬼王のほうだった。
慌てて視線をそらし、
「今日の供は、あいつひとりだけ？」
鬼王は、藤太の立っているあたりを、ちらりと見た。
藤太は、その目をうさんくさそうに受け止め、けれども黙ったまま、そこにいる。
「そうよ」
葵は、さっきまでのあたたかさの余韻を抱きしめたまま、頷く。
「あの子たちは一緒じゃないの？　ほら、乳姉妹の……」
「小夏たち？」

「そうそう」
「それがねえ、千鳥はね、九郎の館の連中のことを話したら、怖いって言って泣き出しちゃったの。だから誘えないし、小夏はほら、鬼王のことを気に入らないみたいでしょ？」
「……ははは！」
「鬼王だって、小夏がいたら、わずらわしいでしょ？」
「そうだな。うるさいもん、あの女は」
頷きつつも鬼王は笑い、やがて、ぽつっと言った。
「まあ、ああいうのも、けっこう悪くないけどな」
「え……？」
「ああやって人にガミガミ言われるのも、そんなに悪くないってことだよ」
「そう……？」
葵は、なんとなく首をかしげた。
（そんなふうに思っちゃうほど、鬼王と小夏って、親しげにしてた？）
ふたりが顔を合わせたのは、出会ったあの旅のときだけだったはずだ。その間、小夏はほとんど鬼王を見もしなかったし、だいたい、鎌倉まで道づれになったといっても、ほんの短い間だけだったのだから。
（小夏の意地悪が、よっぽど印象的だったってことかしら？）

なんとなく面白くない。
でも、葵は、すぐにその気持ちを忘れた。
「俺、ほんとは、人から関心もたれるのって苦手なんだけどさ。――親なしで育ったし」
鬼王が、そんなことを言ったからだ。
「鬼王、お父さまもお母さまもいないの？」
「父親ならいるよ。でも、いないのと同じだ。俺のことなんか無視してるもん」
「お父さまは、意地悪なの？」
「そうじゃなくて、意気地なしなんだよ。俺はワケありの子だから、俺の顔を見るのが怖いのさ」
「ワケあり……？」
「そう、側室の子――って言っていいのかな？　それも、ただの側室じゃなくて、なんか事情があるらしい。よく知らないけど」
「鬼王は、お母さまのこと、知らないの？」
「知らない。俺、物心ついたときから、ひとりだった。誰も俺の相手なんかしてくれなかった」
鬼王は、寂しげにうつむいた。
砂の上に、ぽそぽそとした呟きが散らばっている。それを見て我に返ったのか、慌てたよう

に、

「つまんない話だよなあ！」

と、自分の言葉を笑い飛ばした。

でも、葵は笑わなかった。

鬼王の笑いは、やがてしおれて、風の中にだらりと落ちた。

「九郎がはじめてだよ、俺の目を見て話しかけてくれたの」

「九郎を追いかけて鎌倉に来たんでしょ？」

「ああ。九郎がいないと、俺はまた、ひとりぼっちに戻らなきゃいけないもの」

「……そっか」

葵は、深く膝を抱えた。

熟れすぎた柿の色に染まっていた太陽は、いつの間にか、海に姿を消している。

風の冷たさも、夜のものに変わっている。

「――だから俺、九郎のためだったら、なんでもする。なんでも……」

鬼王は、ふと遠いものを見つめる目になり、呟いた。

☆

「おい――！」

館に戻った鬼王を、九郎が、にやにや笑いながら呼び止めた。
「葵が行っただろ？」
「なんで知ってるの？」
「俺が行けって言ったんだもん」
「ふーん……」
「俺って気がきくよなあ」
「……なにバカ言ってんだよ」
「あの子、おまえに会いに来てるんだぞ？」
「まさか。ヒマだから来るだけだろ？」
「違う違う。おまえ全然わかってないなあ」
九郎が、知った顔で話しはじめようとするのを、
「そんなことより――」
と、鬼王は遮った。
「藤原秀衡に、頼朝追討の命令が出されていたんだってな？」
藤原秀衡――九郎の世話をしてくれていた、奥州の王者だ。
九郎は、きょろりと瞳をまわし、
「そういえば、そうだったな」

さして興味もないといった顔で頷いた。
「もうずいぶん前から、平泉が平家に味方するっていう噂が流れてたって話じゃないか。俺、今日はじめて聞いて、びっくりした」
「へえ？　誰に聞いたんだ？」
「誰だっていいだろ。それより、こんな大切なこと、どうして教えてくれなかったんだよ!?」
「……おまえ、なに怒ってんだ？」
九郎は、あくまでも呑気な様子だ。
鬼王は、イライラと眉根を寄せた。
（わかってない……！）
秀衡は、九郎の保護者だ。それは、鎌倉の誰もが知っている。
その秀衡が平家に味方するとなると、鎌倉での九郎の立場は、微妙なものになってくるのではないか――？
鬼王は、そのことを心配しているのだ。
「でもなあ、秀衡が平家になど味方するわけ、ないだろ？」
「わかるもんか。あれほど食えないジジイも、いないからな」
「俺が鎌倉にいるのに？　それがわかってて兄上を攻めるというのか？」
まさか――と、九郎は笑った。

秀衡はどんなことになっても自分の味方、それはつまり、頼朝の味方でもあるということ——そう固く信じている。

「実際、秀衡が起ったという話は、聞こえてこないじゃないか」

「それは、そうだけど……」

「大丈夫、大丈夫。おまえは心配しすぎだよ」

相変わらずの呑気をふりまくように、九郎は、てのひらをヒラヒラと振ってみせるのだが。

☆

「九郎どのは、なにか思い違いをしている」

と、河越重頼は、娘の葵に言って聞かせた。

九郎どのは思い上がっている——そんな囁きが、御家人たちの間で交わされはじめているという。

九郎に対する彼らの不信感に火をつけたのは、実は、ある事件がきっかけだった。

それは、葵や鬼王が鎌倉にやって来て間もないころ——。

かねてより造営中だった鶴岡八幡宮の、上棟式でのことだ。

造営に関わった大工たちに、褒美として馬を与える儀式があった。

その馬を曳いて出る役を、頼朝は、幾人かの御家人たちに命じたのだが、その中に、九郎の

名が混じっていたのだ。

そのとき九郎は、まず、きょとんと瞬きをした。それから、けろりと言ってのけたものだ。

「なぜ、わたしが、そんなことをしなければならないのですか？　鎌倉御所の弟である、このわたしが」

御家人たちとは違う、特別な身分であるはずの自分が、なぜ彼らと同列に扱われなければならない――？

断るのが当然、という顔だった。もちろん九郎は、断った。

けれども頼朝が、怒ったのだ。

怒りに怒り、九郎のそれを〝思い上がり〟と責めたてて、ついに馬を曳かせてしまった……。

「どうして――？」

と、葵は父に訊ねる。

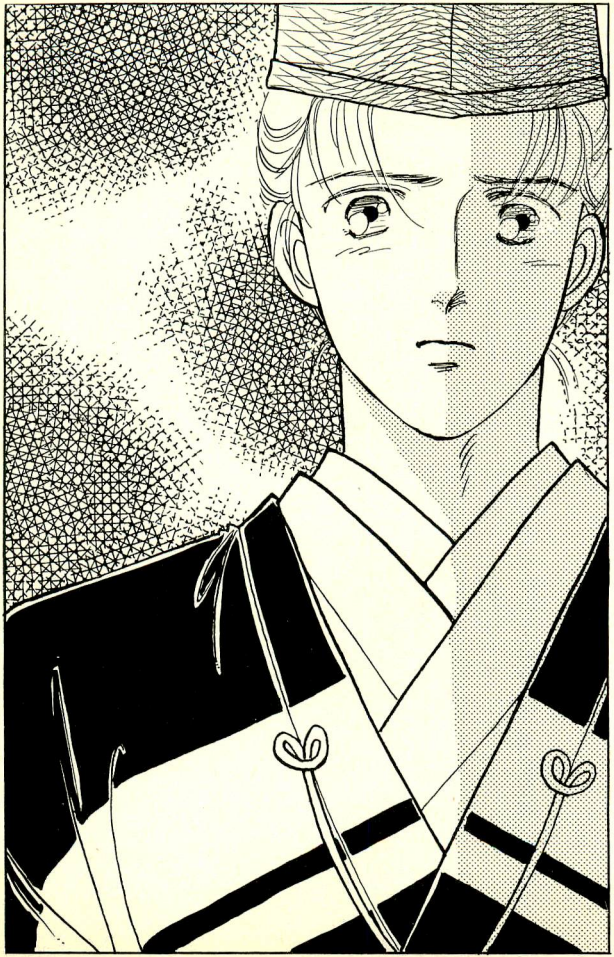
葵にとっても、腑に落ちない話だった。なぜ、兄が弟に、そんなひどいことを――？

すると父は、困りきったように眉のあたりを歪ませて、

「これは、我々、鎌倉に集まった東国武士たちの願いなんだが――」

頼朝は、彼らが頂に抱く、御大将である。

が、その親族たちが頼朝と同じ身分のつもりになって、御家人たちの上に立とうとするのは困る――というのだ。



「どうして？」
平家の例を見てみるがいい。
平清盛と、その一族だけが栄を抱え込み、ひとり占めした結果、多くの人々の恨みを買い、今、反乱の波に攻めたてられている。
「鎌倉を、そんなふうに終わらせたくはない」
「そのために、みんなで九郎のこと、ばかにするの？」
「ばかにしているわけじゃないよ」
「でも、そう見えるわ」
「そうじゃなくて――」
「九郎には、そんなつもり、ないのに。思い上がっちゃって、人の恨みを買って鎌倉を滅ぼすような災いを呼んで――そんなふうになっちゃうつもりなんて、ないのに。あるわけないのに。――そういう人よ、九郎は。やさしくて……ちょっとおせっかいだけど、でも、とってもいい人なの」
「わかっているよ、それは。九郎どのの人柄は、ちゃんとわかっている。でも……」
問題なのは、九郎の態度に、例の事件ののちにも、そういう自分の立場を理解していないらしい様子があることだ。
「それに」

今は、それだけでなく、鎌倉の敵になるかもしれない相手――奥州平泉と通じる者、という意味合いも、九郎の存在には付け加えられてしまったのだ。

「あの方を同志として心から迎え入れられないものがあるのも、仕方ないことなんだよ」

だから、九郎どのの館に出入りするのは、なるべく控えたほうがいいかもしれないな――と、父は続けた。

「御所さまが、あの方をこれからどう扱うおつもりでいらっしゃるのか――様子を見たほうがいい」

「でも」

「葵の気持ちはわかるし、お父さまも、あの方のことは好きだよ。でも――な？　今は、〝いい人〟ならばそれで済まされるような、そんな平和な時代じゃないんだよ。みんな必死なんだ。生き残るために、必死なんだよ」

「――？」

「つまり――この先、御所さまが九郎どのをどう扱うかによって、九郎どのと関わっていた者の運命も変わる」

「それって……？」

「御所さまが、九郎どのをおそばから退けられるようなことでもあれば――。へたに縁など結んでしまっていた者は、とばっちりを受けて一緒に失脚せざるをえないことになるかもしれ

ん」

父の言うことはよくわかる。それでも葵は、

「でも――」

と、涙まじりに呟いた。

「私が九郎のとこに遊びに行くのは、べつに、そういうんじゃないもの。九郎のこと好きだとか、そうじゃなくて――、ううん、好きだけど、でも、そういう意味で好きっていうんじゃなくて……だって……」

最後まで言えなくなって、くちびるを噛んだ。

父は、何も言わなかった。困ったような顔をして葵を見つめていたけれど、やがて、立ち上がる。

（だって、それじゃあ、鬼王に会えなくなっちゃう……）

葵の胸に、ぽつ……っと寂しい雫が降った。

☆

さて。

鬼王ももちろん〈大工の馬事件〉を知っている。そして、河越重頼が葵に話して聞かせたような御家人たちの反応も知っている。

だから、
「九郎が例の姫にふられたのも、そのせいだよな」
ひどく大人びた目をして考え込みつつ、そんなふうに唸った。
「例の姫――？」
「ああ。誰だったかの御家人のとこの」
九郎と葵が出会うきっかけになった、あの、九郎の元恋人の姫である。
九郎が彼女にふられた理由は、河越重頼が葵に語った、まさにその通りだろう。
（だったらこの先、九郎はどうなる？　ヘタをすると、この鎌倉で、孤立してしまうことにもなりかねない）
鬼王には、不安でキリリと胸が痛むほど、そのことがよくわかるのに、当の九郎ときたら、
「そりゃ困ったよなあ。俺は、これからどうすりゃいいんだ？」
心配しているのは、女のことだけらしい。
「だから、それだけじゃないんだってば！」
「――？」
「……バカッ」
鬼王は、思わず唸ってしまった。
（もう知らねぇよっ！）

さっさと九郎に背を向ける。
その先にいた伊勢三郎が、
「おまえって、ガキのくせに目端がききすぎるんだよなあ。でも九郎は、そういうとこ、底抜けに抜けてるし、あんまり真剣になっても疲れるだけだぞ？　――ま、そのうち、なるようになることさ」
げらげら笑いながら、そう言った。
けれども鬼王は、三郎の笑いからそっと視線をはずし、無言のまま、その場を離れた。

☆

その夜――。
鬼王の部屋の蔀戸を、ほとほとと叩く音がする。
「……弥太郎か？」
ひそやかに訊ねても、返事はない。
が、蔀を細く押し上げると、そこに見知った顔がある。
「……入れ」
鬼王の言葉に、弥太郎と呼ばれた男は、音もなく遣戸のほうへ回り込んでいった。
この男――平泉と京都を行き来する、商人である。

「九郎どのとのお話し合いは、おすみになられましたか？」
「話し合いっていうか……一応は、すんだけど。ありゃだめだな」
鬼王は、乾いた笑いを少しだけ落とした。
すぐに消えたその笑いの余韻から、闇いろの静けさが、ふ……っと広がる。
明かりは消したままだった。館の誰もが、もう寝入っているだろう時間だった。
やがて、蔀の外で、ばらばらばら……っと夜を叩くような音がした。
鬼王も弥太郎も、ちらりとだけ視線を動かし、
「……雨？」
「降ってまいったようですな」
けれどもすぐ、雨音のことなど忘れた顔で、鬼王は呟いた。
「俺で役に立つのかな？」
「もちろんですよ。お館さまも、お喜びになられましょう」
弥太郎は、声を出さずに笑った。
お館さま——と弥太郎が呼ぶ、あの男。
あの男と最後に会ったのは、平泉を出ると決めたその夜のことだった。
「行くのか？」
めずらしく鬼王を呼び出し、短く訊ねたあの声が、今も耳に残っている。

「行く」
鬼王も、短く答えた。
「行くのならば、頼みがある」
「なんだよ？」
「文をよこせ」
「……文？」
「鎌倉の様子を教えて欲しい」
「それが何になるの？」
「何にもならない。ただ知りたいだけだ」
「ほかのヤツに頼めば？　なにも俺じゃなくたっていいだろ？」
「おまえが一番、怪しまれない」
「怪しまれるようなことまで調べなきゃならないの？　よけいに、やだね」
「金商人の弥太郎に、都から帰る途中、鎌倉のおまえのところに立ち寄るよう、言づけてある。返事は弥太郎に言え」
言いたいだけ言うと、立ち上がり、行ってしまった。
頼まれてやる気などなかった。
鬼王は、あの男が嫌いなのだ。

誰も彼もに無視される中、あの男だけは、鬼王の存在をその瞳に映していた。といって近づいてくるわけでもなく、ただ、乾いた視線を、じっと鬼王に注ぎ続けてきた男――。

鬱陶しかった。声をかけてくれないのなら、無視されたほうがよほどいい。

（おまえなんか大ッ嫌いなんだよッ、くそジジイ！）

あの視線を感じるたび、鬼王は、ぷいと背を向け、心の中で罵声を飛ばしたものだった。

だからあの夜も、

「そんなこと、知るもんか！」

消えかけた背中に、そう叫んだのだが――。

「今日、おまえの話を聞いて、考えが変わった」

鬼王は、にやりと笑ってみせた。

「どんな小さなことでも、嗅ぎつけて流してやる。鎌倉が、これからどう動くのか、何をしようとしているのか――、なにもかも」

無言で頷く弥太郎の微笑が、それに応えた。

夜を叩く雨音は、さらに勢いを増していたようだ。

その中に、弥太郎の足音がひっそりと溶け込み、やがて消えた。

海が哭く

「葵、そろそろ河越庄に帰ったらどうだ？」

河越重頼が、何かのついでのような顔をしてそう言ったのは、十一月も間近に迫ったある日のことだった。

「毎日毎日、館に閉じこもってばかりで、退屈しているだろう？」

葵は、黙ったままうつむいた。

確かに彼女は、

（つまんない……）

と、毎日、ため息をついてばかりいる。

九郎の館へ顔を出さなくなって、もう幾日になるだろう。

黙って出かけようとしたことは、ある。ところが、そういうときに限って、父の目と鉢合わせしてしまうのだ。黙ったまま、静かに深く、葵を見つめる父の目と……。

すると、いたずらを見つかった子供のような気持ちになって、すごすごと自分の部屋へ引き

揚げる他なくなってしまう、葵だった。
（……どうしてかなあ？）
どうしてこんなに、鬼王に会いたいと思うんだろう？
こんな気持ちは、知らない。
せつなくて、むなしくて、もどかしくて、でも、とてもあたたかくて……。
こんな気持ちは、はじめて知った。
（……会いたいなあ）

☆

「小夏！　千鳥！　どこ!?」
ばたばたと縁を走りながら、ふたりの名前を呼ぶと、すぐそばの部屋から、千鳥が、ひょっこり、顔を出した。
「お呼びですか？」
「小夏は？」
「出かけてますわ」
「どこへ？」
「さあ……？　最近、よく出ているようなんですけど……。今日も、べつにどこへ行くとも言

わずに……」

千鳥は、ゆっくりと首をかしげた。

「ふうん……？」

唸りつつ、葵は、でもどうでもいいや、という顔で、

「出かけるわよ」

言い捨てると、すたすたと歩き出す。

「姫さま？　どこへ行かれますの？」

慌てる千鳥に、

「九郎の館へ」

葵はゆっくりと笑ってみせる。

「お父さまには、ないしょよ。途中で見つかっても、今日は上手にとぼけてみせるのよ」

「……でも」

しり込みする千鳥を、

「いいから、行くのよ」

と一喝し、葵は館を飛び出した。

とにかく鬼王に会いに行こう。このまま河越庄へ帰ったら、絶対に後悔する——そんな気がする。

☆

鬼王は、海へ行ったという。
九郎が館にいて、教えてくれた。
「じゃあ、行ってみるね」
すぐに踵を返そうとすると、
「おいおい」
九郎に呼び止められた。
また、からかわれるんだろうか？
身構えつつ、葵は振り返る。
けれども九郎は、じ……っと葵の目を受け止めて、
「おまえ最近、全然、遊びに来なかったじゃないか」
拗ねている。
「うん、ちょっと忙しくて」
葵は、曖昧に笑った。
「ふうん……？」
探るように葵をうかがい、そのあと、

「ま、いいけど。また来いよ？　おまえが来ないと、退屈でいかん」
九郎の笑顔が、ぱっと開いた。
葵は、なんだか嬉しくなり、
「また来るね！」
そんな約束を残してきた。
ところが、その海に鬼王の姿はない。
（行き違いになっちゃったのかしら？）
枯れた砂の上を、あてなく歩いてみた。
あたりを満たすものは、空に向かって唸りを上げる海の声だけだ。雄々しく、厳しく、寂しく……。
葵は、ぽつんと立ち止まった。
しばらくの間、海の唸りを聞いていた。
意気込んでいた気持ちが、しゅわしゅわと、海の泡のような頼りなさで消えてゆく。
それでも葵は、千鳥を振り返り、
「帰ろうか」
頬に、笑いを浮かべてみせた。
ところが、そこに、するりと入り込んできた声がある。

「うるさいなあ！　なんで、こんなとこまでついて来るんだよ！」
葵は、ぴくりと瞬きした。
あれは？　あの声は――？
ゆっくりと振り返る。
会いたかった人が、そこにいた。
「鬼王――!?」
嬉しくて声を上げ、それから――。
葵は、鬼王の隣にある顔に、ふと目を止めた。
「……小夏？」
どうして小夏が鬼王と……？
と、驚く間もなく、
「まあ、姫さま！」
小夏は大袈裟に叫ぶと、鬼王の腕を取り、それを引きずるようにしてこちらへやって来る。
そして、ぺらぺらと話しはじめた。
「聞いてくださいまし、姫さま。どうしようもないんですよ、この子は。放っておいたら、何日でも何も口にしませんの。それどころか、眠りもしないらしいんですのよ」
「俺は昔からそうなんだよ。だから、これでいいんだよ」

「いいかげんにしなさい。早死にするわよ」
「いいよ、べつに。どうせ、いつかは死ぬんだから。俺がいつ死んだって、おまえには関係ないだろ？」
「そういう問題じゃないの。私は、あんたのこと、心配してやってるのよ？」
「おせっかい」
「……んまあ！」
姫さまも何か言ってやってくださいまし――と、小夏は葵を振り返る。
葵は、小さく呟いた。
「どうして？」
「――え？」
「どうして、小夏が鬼王と？」
小夏は、かすかに首をかしげたあと、
「姫さまにはお話ししてありませんでした？」
「聞いてないわ」
「あら、そうでした？　ええと――、最初は市で会ったんですの。それからも幾度か、なんとなく行き合って……」
「聞いてない」

「そうでした？」
「小夏、鬼王のこと、嫌いだったんじゃないの？」
「嫌い……？　嫌だわ、私、そんなこと言った覚え、ありませんよ？」
小夏は、けろりと笑った。
「だって……」
葵は視線を落とし、くちびるを噛む。
その様子で、小夏は、葵の気持ちに気づいたようだった。にやりと笑い、
「嫌いどころか、可愛いわ。なんだか、ほっとけない感じ。言うこと、全然、聞いてくれないけど。でも可愛い」
「……ひとのこと、猫みたいに言うなよ」
「ふふふ」
「――私！」
気がつくと、葵は叫んでいた。
「私、帰る！」
鬼王が、ぽかんとこちらを見た。
追ってきて欲しい、呼び止めて欲しい――そう思いながら背を向ける。走り出す。
でも。

追いかけてきてくれたのは、小夏だった。
「姫さま――！」
呼ばれ、それでも、すぐ振り向くにはためらいがある。
「姫さま、姫さま！」
何度か呼ばれたあと、葵は、やっと足を止めた。
走ってくる小夏、それを追ってくる千鳥、そして、立ちつくしたままの鬼王……。
「どうして逃げるんです？」
真っすぐな小夏の目を、葵は、伏目がちに受け止めた。
「だって……」
「私が鬼王と親しいことが、お気に召さないんですの？」
「――――」
「べつに私たち、どうこう……ってわけじゃありませんよ？　あの子が、あんまりどうしようもない生活をしているものだから、気になっているだけです。あの子の言う通り、おせっかいなんです、私の」
「でも、すごく仲よさそうに見えた」
「それはちょっと、姫さまをからかっただけ。だって姫さま、あの子のこと――」
小夏は、そこで言葉を切り、ちらりと笑う。

小夏が、何を言おうとしているのか、すぐにわかった。でも言われたくなかった。こんなふうに意地悪い目でこの気持ちを見透かされるのは、いやだ。

「だけど！」

小夏の言葉がつなげられる前に、葵は、夢中で叫んだ。

「だけど、小夏のおせっかいは、ちょっと行き過ぎてるみたいだわ。だって鬼王の過去を思えば、あの子がそういうふうになっちゃったの、よくわかるでしょ？　そっとしておいてあげるのが一番なんじゃないかしら？」

「あの子の過去……？」

母の顔を知らないという過去、父に疎まれて育ったという過去、九郎と出会うまで人のあたたかさを知らなかったという過去。

そのせいで、まともな育ち方をしなかった——というようなことを、前に鬼王は、自分で言っていたから。

「そうでしょう？」

葵は、まっすぐ、小夏を見つめた。

けれども小夏は、

「……ふーん？」

斜めに歪めたくちびるに、軽い笑いを含ませる。

「ずいぶん、もっともらしいご意見ですけど。姫さまも、私にそんなことをおっしゃるのは、立ち入り過ぎってものじゃありませんか？」

「――？」

「だって姫さまは、あの子の何だというんです？　特別、親しいというわけじゃあないんでしょう？　私、あの子から、そんな話を聞いたことなんてありませんもの」

「それは……」

葵は、思わず目を伏せた。

（私が、鬼王の何なのか――？）

問われても、

（何でもない）

そう答えるしかない。言葉にできるつながりなんてない。

「姫さま？　さあ、どうなんです？」

小夏の言葉は、伏せた目の下にまで、しつこく追いかけてくる。

（なんだか私、みじめだ）

鼻の奥に、涙の苦さを感じた。

鬼王は、葵のことなど見ていない。女の子としての葵の存在になど、気づいていない。会いたいと思うのも、小夏に嫉妬するのも、何もかも、葵のひとり相撲なのだ。これほど、

みじめなことはない。
（河越庄へ帰ろう。帰って、何もかも忘れよう。そうしてもう二度と、鎌倉へなんか来ないんだ）
葵は、つ、と顔を上げ、その瞳に鬼王を映した。
彼は、こちらの様子を心配げにうかがっていた。
（今だけ見つめたら、もう、忘れる……）
葵は、鬼王を映した瞳を悲しく細めた。
そのまま、小夏を振り返り、
「明日、河越庄に帰ります。おまえも帰るのよ。あの子に、さよならを言ってくるといいわ」
気丈に笑ってみせる。
遠くで、ざん……っと海鳴りが跳ねた。

☆

「なに？　どうしたの？　葵は何を怒ってたの？」
のろのろと浜へ戻った小夏を迎えたのは、鬼王の、そんな呑気な言葉だった。
小夏は、ちらりと彼へ目をやり、呟いた。
「ちょっと、いじめすぎたかしら？」

「え？　なに？」
「なんでもないわ。それより――」
鬼王の目を、はたと見据え、
「あんた、なんだか過去に事情を持っているんだそうね？」
「――？」
「だから、こんなとんでもない子供になっちゃったんですって？　さっき、姫さまがそう言ってあんたを庇ってたわよ？」
「……ああ、葵には話したんだっけ」
「私、聞いてないけど？」
小夏は、ちらりと瞳を動かした。
すると、鬼王の眉が、むっとしたように歪んだ。
「当たり前だろ？　あんなみっともない話、そう簡単に、人に話せるかよ」
「――」
小夏は、無言のまま、鬼王に視線を注ぎ続けた。
やがて、耐えきれなくなった鬼王が、
「……なんなんだよ？」
と、乱暴に目を逸らすころになって、

「でも、姫さまには話したのよねえ？」
たっぷりと粘りを含んだ声で、小夏は言った。
「それが、なんなんだよ？」
「つまり、あんたにとって、うちの姫さまは、特別な女の子だってことなんだ？」
「――特別っ!?」
と、鬼王の口から飛んだのは、慌てたような叫び声だ。
「違うよ、そんなんじゃない！」
「ふうん？」
「九郎みたいなこと、言うなよなっ」
「じゃあ訊くけど、私たちが初めて会ったあの日――、武蔵大路の真ん中で、あんたが姫さまを見てたのは、どうして？」
「見てない」
「あら、そお？　あんた、伏せた目の下から、姫さまのこと、じいっと見てたような気がしたんだけどなあ？」
「見てやしない」
「へええ？」
鬼王を見る小夏の目に、からかうような色が滲んだ。

「なんだよっ」
「べつに？」
小夏は、気取った声で言ったあと、
「じゃ、私の思い違いか。あんたにとって姫さまは、やっぱり特別でも何でもなかったのか」
「当たり前だ」
「なるほどね。でもまあ、どうせ姫さまはもう河越庄へ帰ってしまうし、関係ないわね」
鬼王の反応を、ちらりと確かめた。
鬼王は、ゆっくりとした瞬きを、ひとつ叩いた。
「河越庄へ帰る……？」
「そ。もともと、こんな長居をする予定じゃなかったのよ。それが何を気に入ったのか、冬になるまでずるずると……。でも、明日にはもう帰るんですって」
「……そっか。帰るのか」
「そうよ。寂しい？」
「……いや」
でも、そう言った横顔が、次第に寂しく翳ってゆく。
それを見るうち、小夏は、ひどくやさしい気持ちになって、
「正直に言っちゃいなさいよ？」

鬼王の耳に囁いた。
「初めて会ったとき、姫さまのことを見てたのは、なぜ？」
「あれは――」
「あれは？」
「葵が妙に眩しく見える子だったから気になって、見てたら目が離せなくなっちゃって……」
「じゃあ、姫さまに昔のことを話したのは？　なぜ？」
「べつに、なんとなく。するっと口から出ちゃってた」
「――なるほどね」
小夏は、くすくすくす……っと、あたたかな笑いを砂の上に落とした。
「ばかねえ、あんた。そういうのを〝特別〟って言うのよ」
大勢の中のただひとりが眩しく見えたのも、ふだんなら簡単に話せないようなことを警戒心なしに話してしまえたのも、みんなみんな〝特別〟のしるし……。
鬼王は、初めてそれに気づいたようだ。
そのあたたかさを噛みしめるように黙り込み、海の蒼さに目を移した。
けれど、
「今すぐ河越館へいらっしゃい。あんたの気持ち、姫さまに言ってあげて。姫さまは、あんたに好かれてないと思い込んで、悲しくて、それで河越庄へ帰るなんて言い出したんだから。

ね？」

と、腕を取った小夏の手を、やんわりと払いのける。

「行かない」

鬼王は、きっぱりと言った。

「……どうして？」

「俺は葵を好きにならない」

「だって、あんた……」

「たとえ〝特別〟でも、好きにならないんだ、俺」

そんな呟きを残し、鬼王は歩き出した。

それは、かたくなにも寂しげにも聞き取れる、不思議な呟きだった。

小夏は何も言えなくなって、ただ、鬼王の背中を見送った。

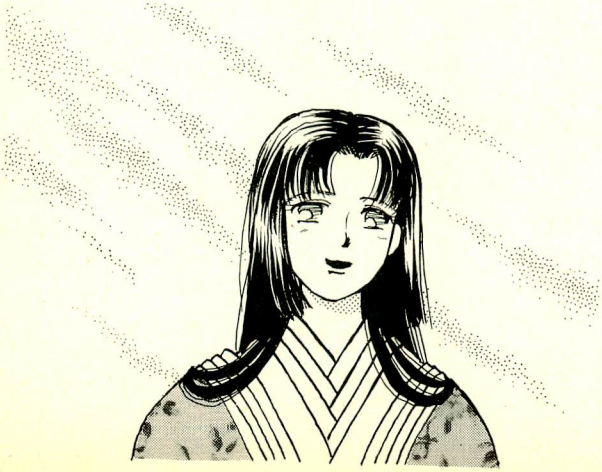
風が強くなってきたようだ。

そろそろ、夕陽の色が空に溶け出す時間だろうか。

第二章

元暦二（一一八五）年・京都

《花影の人》



京へ

花嫁の一行が到着したのは、すでにもう夜も更けたのち——闇を舐める寒風の声が、耳に寂しい時刻であった。

「本当に来たのか？」

知らせを受けた二十六歳の花婿——源九郎義経は、大きく見開いた目を、思わず、苦笑の形に歪めてしまった。

「兄上の冗談かと思っていたのに」

鎌倉にいる異母兄・源頼朝から、

「おまえには、まだ正妻がいなかったな？　わたしの選んだ娘を送ってやるから待っていろ」

そんな文が届いたのは、もう幾月も前のこと。

が、そののち何の音沙汰もなかったので、

（なんだ、本気の言葉じゃなかったんだな）

戯れに思いついただけのことか——と、すっかり忘れてしまっていた。

それが今夜、本当に花嫁が届いたのだという。
鎌倉からの知らせは、まったくなかった。最近、ちょっとした問題が起こり、兄との間に親しいやりとりが絶えてしまってはいるのだが、それにしても、一方的に送りつけてくるとは――。
「面倒だが、会わねばなるまいな」
九郎は、苦い顔のまま立ち上がった。
「すぐに戻ってくる」
と見下ろすのは、このところ傍らに置いている愛妾・静である。
「いってらっしゃいませ。お戻りにならなくても恨みはしませんから、お心置きなく」
静は、にやりと笑う。これは、そういう女だった。
九郎は上を向いて、ははは――と笑い、
（これほど面白い女はいない）
と思う。どれほどの花嫁が待っていようとも、きっとすぐに戻りたくなるだろう。
「行ってくる」
九郎は、笑いをおさめた目で、やわらかく静を見つめた。

☆

花嫁は、対屋に通してあるという。

気の重いまま出向いて行った九郎だが、彼女の顔を見て驚いた。いつも呑気なこの男にしては珍しいほどに、驚いた。

しばらく言葉をなくしていたが、やがて気を取り直し、花嫁の顔をのぞき込むようにして、

「おまえ、葵か？」

花嫁は神妙な顔で、こくりと頷く。

河越重頼の娘・葵――。頼朝が選んでよこした花嫁が、よりによって、あの葵だったとは。

九郎は、ふたたび、継ぐ言葉もない。腕を組み、大きく息を吐いたあと、仕方がないので歳を訊いた。

「いくつになる？　確か鬼王と同じだったから……」

「十七になります」

答えた声は、微妙な震えを含んでいた。さすがに緊張しているらしい。

「……そうか」

頷いたあとは、また続かない。

（なんでまた、この子は、俺のところになんか来る気になったんだろう？）

不思議でならない。

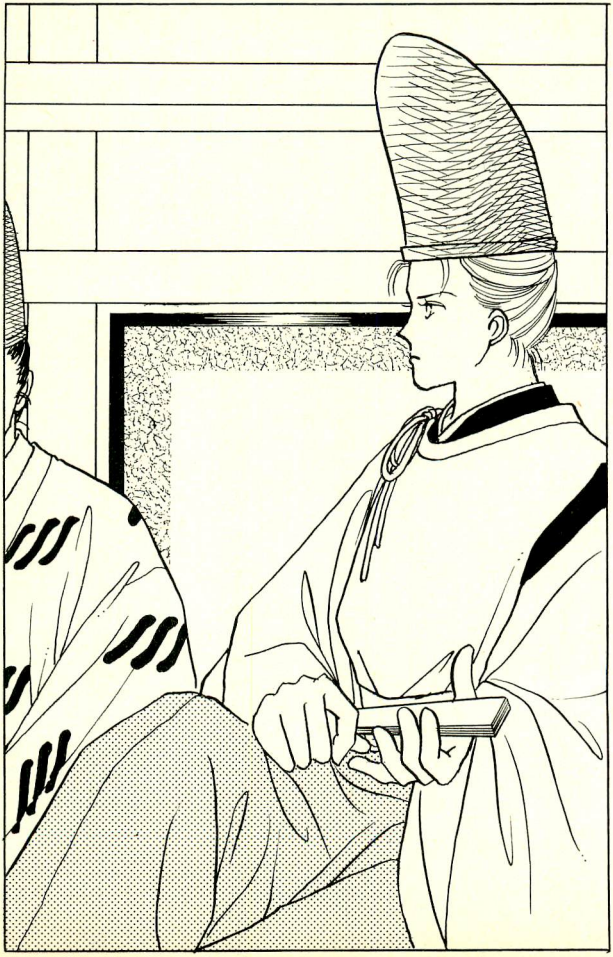
九郎は、この子の初恋を知っているのだ。九郎の弟分・鬼王丸を、一途に想っていた――そ

の姿のいじらしさは、思い出すたび胸が微笑むほどである。
が、その恋の行方を九郎は知らない。どうにもならないまま、葵は故郷の河越庄へ帰ってしまい、そののち二度と会うことはなかった。
「また遊びに来ると約束したのに」
最後に会った日を思い出し、九郎は笑った。
その笑いに、葵も少し緊張をほぐしたようだが、
「ごめんなさい、あれから鎌倉へ行くことはなかったものだから」
答えた言葉には、まだ震えが残っている。
九郎は、妹にするようなやさしさで、葵の髪を撫でてやった。
「長旅で疲れたろう？　今夜は、ゆっくり寝むといい」
「――ひとりで？」
「そう、ひとりで」
「……そう」
頷いた声に、やっと安堵の色が滲む。
そんな彼女を可愛いとは思いつつ、
（やれやれ、困ったな）
九郎は内心、頭を抱えた。

元暦元（一一八四）年晩秋、京都。
源平合戦は続いている。

☆

「兄上は、なぜ俺に出陣命令を下してこないのだ？」
ぽつりと落ちたそれは、九郎のひとり言である。
が、律儀にも耳に止め、
「なにかおっしゃられましたかな、九郎どの？」
言いたいことがあるのなら、もう一度、繰り返すように——と促してきたのは、梶原平三景時という、頼朝お気に入りの御家人だ。
彼の視線を、九郎はまず、黙ったまま受け止め、それから吐き捨てるような調子で、
「兄上は、なぜ俺に出陣命令を下してこないのかと言っただけだ」
すると景時は、神経質そうに眉根を寄せて不快げな様子を示し、
「今は戦のことを話し合っているのではありません」
確かに、そうだった。
この、いわば鎌倉軍京都駐屯部隊とでもいう面々が、今、目の前に抱えている問題は、京都



近隣に起こった所領争いをいかにしておさめるか、である。

頼朝の挙兵から五年――。

平家一門は木曾義仲によって西国へと追い払われ、けれどその義仲も、鎌倉軍に追われて敗死した。

鎌倉は、ついに京都を制するに至ったのだ。

合戦の舞台は、西国へと移った。

その西国で、今、九郎の異母兄・蒲冠者範頼が、近ごろ勢いを盛り返してきた平家を相手に、苦戦を強いられている。

が、九郎は京都にとどめられたままである。

頼朝の代官として、京都とその周辺の警備に当たるのが、彼がおおせつかった役目。他事に心をわずらわせるな――と、景時は言う。

それは、九郎としても、よくわかっているのだ。わかっているつもりなのだ。

「だが、ここにこうしていなければならないのは、じれったくてかなわん」

不満げなため息を、乱暴に吐き出して、

「こんな戦、俺が出陣すれば、すぐ終わらせてみせるのに」

戦には、自信がある。

後世の者がこぞって賞賛するように、九郎は天才的な戦術家だった。

彼の初陣は遅く、木曾義仲追討のときがそれである。そして、八カ月ほど前の一の谷の合戦が二度め。ところが、そのわずか二度めの出陣で、九郎はあの有名な、

「鵯越の逆落とし」

という戦法を編み出している。

獣しか通れないような険しい道を馬で抜け、平家軍を背後から衝いた奇襲作戦――。

思ってもみなかった攻撃に、平家は慌てふためき、結果、鎌倉軍の圧倒的勝利が導き出されることとなったのだから、あの勝ち戦の功績は、ほとんど九郎ひとりにあるといっていい。

ところが、その大活躍にもかかわらず、京都にとどめられたままいる彼なのだ。

範頼が苦戦を続けているというのに。早急に援軍を送らなければならないというのに。とすれば、その大将たる器の者は九郎以外にはいないはずなのに。それなのに頼朝は、九郎に出陣命令を下してこない――。

理由は、わかっていた。〝あのこと〟のせいだ。

「あんなことぐらいで、なんでそんなに怒るのかなあ、兄上は。俺が兄上なら、とっくに許して出陣命令を出しておるわ」

九郎は、いまいましげに眉を寄せ、胸の中の苛立ちを吐き出した。

するとその途端、梶原景時の顔色が、怒りで真っ赤に茹であがり、

「自分勝手な言い分も、たいがいになされよ！　御所さまのお怒りのほどが、まだおわかりに

ならんとは――！」

九郎は、思わず閉口した。

（こいつ、すぐに熱くなりやがる。まったく、うるさくてかなわん）

まあまあ抑えろ――というように、手をひらひらと振ってみせ、

「わかった、わかった。兄上のお怒りが解けるのを、ここでおとなしく待っていればいいんだろ？」

言いながら立ち上がった。

そのまま、大事なはずの評議の場から、けろりと抜けていってしまう。

☆

葵がいる。

胸の奥からむかむかと生まれてくる不満をそのまま足音に変えながら、自分の居間へ向かう途中、九郎は、坪庭に葵の姿を見つけた。

すぐに足を止め、声をかけてやろうと思ったが、やめた。

後ろ姿の葵の肩が、妙に寂しげに見えたから。けれど、彼女の求めるやさしさは――彼女が求めて求めて求めて、でも手に入らなくてつらくて、だから寂しくなってしまった――そのやさしさは、九郎の手の中にあるものではないと知っているから。

（鬼王のことを、想っている）

それがわかったから、九郎は、そっとしておいてやることに決めた。

それでも、そのままひとり残しておくのは、なんだか心配で、泣き出すのではないかと心配で、その場を離れられなくなっている。

やがて。

――ちりりん……っ。

と、かすかな鈴の音が、真冬の景色の片隅に、そっと揺れた。

仔猫なのだ。

首につけられた鈴を、ちりちりと揺らしながら、葵の足元に、すり寄ってくる。

どこからか迷い込んできたのだろうか？

葵の肩に滲んだ寂しさが、わずかに薄れた。

「おまえ、どこの子？」

やさしい声と手とが差し伸べられ、仔猫のからだをくるんと包み込んでやろうとした――けれども、ちょうどその時。

近くの茂みをかき分けて、女がひとり、現れた。寝殿のほうの女房のようだ。

仔猫の頭をぐりぐりと撫でてやりつつ、

「この子を――」

と口を開いた葵は、続けて、
「連れに来たの？」
そう訊ねようとしたのだろう。ところがその女房が、いきなり仔猫を鷲摑みにしたのだ。
葵の口の中で小さな悲鳴がはじけるのが見えた。そのまま、彼女は仔猫から手を引いた。
仔猫も、
――びみゃあ……っ！
と抗議の声を上げているが、女房は、おかまいなしに懐へ抱き込んだ。そして去り際に、葵をキッと睨んでゆく。
ひとり残されてしまった葵が、てのひらを頬にそっと当てたのは、まだ消え残る仔猫のあたたかさに、心を慰めているのか……。
京都・六条堀河にあるこの屋敷に葵がやって来て、そろそろ、ひと月。
彼女は屋敷の者たちから嫌われているようなのだが、その理由も〝あのこと〟。
〝あのこと〟のせいで頼朝が九郎に冷たいというので、それが気に入らない屋敷の者たちは、頼朝ご推薦の花嫁・葵に意地悪することで、うさ晴らしをしているらしい。
鬼王を想う寂しさに、意地悪をされた悲しさが加わって、ついに葵の瞳も耐えきれなくなったのか、ぽつんとひと粒、涙をこぼしそうになった――その瞬間へ。
「そこで何をしている!?」

九郎は、声をかけてやった。
「花を見ています」
振り返った葵の瞳が乾いているのは、きっと咄嗟に涙のしずくを隠したからだろう。
でも九郎は、まるで知らないふりで、
「花……？　こんな真冬に咲く花があるのか？」
「ありますよ。今は菫が咲いています」
と、葵は、目の前にちょうど咲いていた菫を、指さしてみせた。紫いろの小さな花が、わずかの風に揺れている。
九郎は首をかたむけて花の色をのぞいたが、さして興味も示さず、
「ふうん……？」
唸りながら、ひょいと庭に下りた。
裸足のままである。九郎の行動には、野性児だった少年のころが今もそのまま残っているようだ。
「平三と喧嘩した」
突然、苦い顔になり、九郎は言った。
「平三――というと、梶原さまですか？」
「そうだ。あいつは、どうしてああ怒りっぽいのかな？　俺は、早く出陣したいと言っただけ

なのに――」

「なのに？」

「頭から湯気だしてキレやがった。蛸みたいな顔だったぞ」

その顔を思い出し、鼻を、ふんっと笑わせた。

梶原平三景時と九郎とは、とにかく仲が悪い。それは有名な話で、葵でも知っている。

景時は、頼朝が九郎に付けてやった、お目付役なのだ。

が、野性児の九郎に対して、景時は真面目一方の堅物人間――どう見ても気など合いそうにないふたりである。

おまけに、例の〝あのこと〟が起こって以来、景時の九郎に対する嫌悪は以前にも増して募ってしまっているようでもあるし……。

「平三にしても兄上にしても、あんなことぐらいで、なんでそんなに怒るんだよ？」

九郎は空を見上げ、情けないため息を吐いた。

それに答えようと葵が口を開きかけたとき、

「――九郎どの!?」

気持ちがいいほど背筋の伸びた、女の声が、ふたりの間に矢を射るように飛んできた。

ふたり、同時に振り向くと。

静である。

「こんなところにいたの？　皆が捜していたわよ？　まだ評議は終わってないのに九郎どのがいなくなっちゃった――って」
「――ふん」
九郎は苦く眉を歪め、くちびるを尖らせているけれど、それは、おとなに怒られた駄々っ子そのものの顔なのだ。
「おまえこそ、こんなとこに何しに来たんだよ？」
静は葵へ視線を向け、ちょっと気取った様子で、
「わたくしは、御方さま（葵）のご機嫌伺いに参りましたの」
「私のところに――？」
「そうですわ。九郎どのったら、いつまでたってもわたくしを御方さまに紹介してくださらないんですもの。わたくし、御方さまがいらしたらぜひ、仲よくさせていただきたいと思って、楽しみにしていましたのよ」
「仲よく――私と？」
葵は、ぱちくりと瞬きした。
屋敷の者たちから嫌われている自分と、仲よく――？　それも、九郎の愛妾といわれるこの女が？　彼女こそ、葵を一番に嫌っている人だろうと思われるのに。
ところが静は、やさしく葵に微笑みかけてくるのだ。

その笑顔のまま、けれども言葉だけは厳しく九郎に向けて、
「とにかく、早く戻ってさしあげてくださいな？　困ってるようでしたから」
「――わかったよ」
不満げに舌打ちをしてみせてはいるが、九郎は戻る気になったようだ。裸足で土の上に下りた素足のまま、ひょいと縁に飛び上がる。
途端に、静が眉をひそめたが、九郎は気にせず、
「おまえのとこの侍女に意地悪されて泣いていたようだから、なぐさめてやってくれ」
静の耳に囁いた。
「――わかりました」
心得顔で頷きつつ、静は、ちらりと葵の頬に視線を流した。
九郎も同じものを見つめた先で、一瞬、冬の陽ざしに光って消えたのは、涙のあと……。
（それにしても――）
と、九郎は思う。
（それにしても、なぜこの子は、俺のところになど来るつもりになったんだろう？）
まったくもってなぞである。

花の人・静

そんな状況ではあったが、やがて、九郎の元にも、頼朝から出陣の命令が届いた。
範頼の軍が、どうにも進退きわまってしまったため、さすがの頼朝も九郎に頼らざるを得なくなったのだ。
九郎は郎党たちを引き連れ、はりきって京都を出ていった。
年が明け、元暦二（一一八五）年二月のことである。

☆

静は、ふと人の気配を感じ、縁に出た。
が、誰もいない。あたたまり始めた風に、緑がやわらかく揺れているばかりである。
それでも静は、その頬に、ふっと微笑を浮かべ、
「どうして隠れたりなさるの？　出ていらっしゃい？」
風が吹くばかりの景色へ呼びかけた。

すると、わずかに花を残す椿の陰から、のっそりと現れた姿がある。
少年だった。
「久しぶりねえ？　また鎌倉に行っていたの？」
訊ねても、
「ああ」
短く答えるだけの無愛想な少年を、それでも静は、うきうきと浮かれた顔で、部屋の中にまで引っぱり上げた。
少年――鬼王丸である。
彼は静と同じ歳である（つまり、葵と静も同じ歳になる）から、今年、十八歳になっているはずだ。
女の子のような見かけはまだそのままだが、さすがに頬のあたりが引き締まり、もう少ししたら少年とは呼べなくなってしまいそうな頃であった。
「残念ね、九郎はいないのよ」
「知ってる。西海へ出陣してるんだろ？」
「ああ――、そうね、あなたは何でも知っているのよね」
そこで、会話は途切れた。
静が話しかけなければ、自分からは口を開いてくれない彼である。

それでも、こうして同じ春風に吹かれているだけで、静は、妙に幸せな気分になってしまうのだ。

九郎より先に、この鬼王丸と、静は出会った。

誰だったか、公卿の屋敷で催された宴に、白拍子・静御前として招ばれ、出向いていったときのこと。

鬼王は、今のように、庭の茂みの中にひっそりと姿を埋めていた。

それは、見事な潜み方だったから、きっと誰にも気づかれずにいたのだろう。

ところが、どういうわけか、静はその気配に気づいてしまった。

取り次ぎの者に案内されて行く途中だったが、思わず立ち止まったのだ。

（あんなところで、あんな女の子があんな格好で、いったい何をしているのかしら？）

静には、そのときの鬼王が、男のなりをした女の子に見えたのである。

彼のほうも、すぐ、静に見つかったことに気づいたらしい。が、慌てた素ぶりを滲ませもせず、それどころか、にやりと笑ってみせたのだ。

（あ、あれは男の子……）

そのとき、静は自分の思い違いを知った。

女の子は、あんなふうには笑わない。あんな、ふてぶてしい色を瞳の底に沈ませた笑いなど、みせやしない。

それでもなお、静は少年に目を止めたまま立ち止まっていたのだが、その瞳に、
（早く行け）
そんな言葉の浮かぶのが見えた。
そうだ、静が変に立ち止まっていたら、彼の姿が見つけられてしまう。案の定、前を行く男が振り返り、
「どうかしたのか？」
「いいえ、なんでもありません」
そう答えつつ、静は慌てて歩き出した。
それが、一度め。
二度めは、市の人込みの中だった。新しい扇を見に行ったときのこと。
扇くらい、静ほどの白拍子ともなれば、誰からでも、どんな高価なものでも、もらえそうなものだが、彼女は、気に入るものを自分で探さなければ気がすまない性格だった。
幸い、いいものが見つかり、あとは母に何かおいしいものでも買っていこうかと歩き出したとき、ふと目が合ったのが鬼王だった。
「あんた……！」
静は、あまりの偶然に思わず指までさして叫んでしまったが、鬼王のほうは、うっそりと眉を寄せるだけなのだ。

（なんだか愛想のない子ねえ）

静は、少なからずがっかりしたものだが、目が合ったということは、彼のほうも静を覚えてくれてはいたのだろう。

そんな縁である。

だから、静が九郎と知り合ったのは、鬼王を通してだった。彼が、今評判の英雄・源義経の弟分であると知り、その屋敷へ遊びに行くようになり、そうするうちに、なんとなくこういうことになってしまったのだ。

が、静は今でも時々、思う。

（何か、時の歯車がひとつでも違う回り方をしていたら、私は九郎どのではなく、この子を好きになっていたわ）

そうならなかったのは、九郎から鬼王の初恋の話を聞いたから。鎌倉で、ほんのりとした想いを交わし合った女の子がいること――。

聞いた途端、気分が妙に重くなった。

そのことで鬼王をつついてみると、面白いほど彼は動揺し、それを隠そうというつもりなのか、

「九郎だな？　あいつが、そんなバカなことをおまえに吹き込んだんだろう？　あいつ、昔からそう言っちゃあ俺のことからかって、うるさいんだよ」

早口にそんなことを喚き散らし、逃げて行ってしまった。
（ふうん？）
と思った。
（こりゃあ本物だわ）
と寂しくなった。
そんな気持ちを、ぽつぽつと九郎に訴えるうち、九郎のバカみたいに子供じみたところを放っておけなくなり、気がつくと彼の側室の座におさまってしまっていたというわけだが、とりあえず、そのあたりは今ここでは関係ない。
ものがたりの時を戻し――。
九郎のいぬ間に久しぶりに鬼王に会った、静である。
黙り込んだまま何も話してくれない彼のことが、そのうち、さすがに不満になってきて、
「葵さまがいらしてから、屋敷に顔を見せるのは初めてね」
静は、とっておきの話題を取り出した。
案の定、鬼王の瞳がチラリと動いて静を捉えた。
が、やっぱり何も言わない。すぐにまた、そらされてしまった。
そのままの視線を、さっきまで自分がひそんでいた椿のあたりにさまよわせ、
「そんなことより――」

と、鬼王は言う。
「九郎の様子は、どうだ？」
「九郎の様子――って、だから、あの人、今、いないんだってば」
「出てったときの様子だよ」
「……？　べつに、いつもと変わりなかったけど？　――あ、なんか妙に喜んでたかな。兄上もやっと許してくださったようだ――とかなんとか」
「……やっと許してくださった、か」
鬼王は、鼻先で、ふん……っと笑いを揺らした。
「許しちゃいないよ、頼朝は。激怒したまんまさ。だけど、九郎なしでこの戦を乗り切ろうとしたら、時間がかかりすぎる。それじゃ困るから、あいつを使うことにしただけだ」
「九郎を、戦の道具みたいに利用しただけってこと？」
「ま、そういうことになるかな？」
「やな奴ねえ、頼朝って」
静は、かたちよく整えられた眉をキュッとひそめ、
「嫌いだわ、そういう陰険な男って」
すると鬼王が、
「頼朝が陰険なのか、気づかない九郎がバカなのか……」

ぽつりと呟く。
ひそめられていた静の眉が、ふと解けた。
「――なんですって？」
鬼王は、薄笑いを浮かべた目でこちらを振り向き、
「なんでもないよ」
「なんでもなくは、ないかんじ」
「なんでもないよ、ほんとに」
「あんた、変だわ」
「何が？」
問われても、静にはわからない。
わからないけれど、何か変だ。胸の奥で、何かが、ざわざわとざわめいている。
静は、鬼王を真っすぐに見つめた。
「ねえ――？」
「なに？」
「私、そもそもよくわからないのよね」
「何が？」
「どうして〝あのこと〟が、頼朝をそんなに怒らせてしまったの？　たかだか、あれっぽっち

のことが」

「あれっぽっち？」

鬼王の目も、負けないくらいに真っすぐ伸びて静を見つめ、

「この屋敷の者たちは、みんな同じことを言う。静も、三郎たちも、下働きの女たちも、こともあろうか九郎まで、みんなみんな」

嘲笑うのだ。

静の胸が、どきりと跳ねた。

こんな顔をする彼を、はじめて見た——。

けれども一瞬あとには、鬼王は、瞳からも頬からも、見慣れぬ嘲笑をすっきりと落としてしまい、

「そんな言葉ですむような問題じゃないんだよ、〝あのこと〟は」

〝あのこと〟——世に言う〈義経の無断任官事件〉である。

経過は簡単だ。

九郎が、時の権力者・後白河法皇から届けられた〈左衛門少尉〉という官位を、頼朝に黙って頂戴してしまった——それだけの話。

「それの、何がいけないの？　だいたい、どうも変な話よ。あの無能な範頼って人が三河守に任命されてるっていうのに、英雄としてみんなに認められている九郎が無官だなんて」

「いや、頼朝はちゃんと、九郎の任官も朝廷に願い出ていたよ」
「あら、ほんと？」
「ほんとだよ。九郎は知らなかったかもしれないけど」
「あらじゃあ、自分が九郎に官位をもらってやるつもりだったのに、法皇さまに先を越されたっていうんで、拗ねてるのかしら？　頼朝も案外、可愛いところがあるじゃない？」
「じゃなくて」
「――ん？」
「〝頼朝に無断だった〟ってとこが、問題なんだよ」
「――？」
「鎌倉の、決まりごとだ。鎌倉の武士たちが任官するときは、必ず頼朝の許しを得ること――って」
「あらでも、それはあくまでも鎌倉の御家人たちを統制するための決まりごとでしょう？　九郎は頼朝の弟なのよ？　源家の御曹司よ？　その辺の武士たちとは違うわよ。それに何より、法皇さまから直々に官位をいただけるなんてね、そうある名誉じゃあないわよ。それを怒る頼朝ってのは、だめね。たいしたことないわね。鎌倉も長くはないわよ、きっと」
静は、得意気に鬼王を見やった。
けれども彼は、ぷっと吹き出したかと思うと、そのままクスクスと笑い続けるのだ。

「……なによっ!?」

途端に振り上がった静の右手を、鬼王は器用によけながら、

「そんなだから、都の奴らはもう古いって言われるんだよ」

「なにそれ!?　誰が言うのよ!?」

「鎌倉の奴ら」

「んまあ！」

なんて失礼なことを言うんだろう!?

静は、京都生まれの京都育ちだ。彼女が何よりも愛している、その故郷を、鎌倉の田舎者たちなんかにバカにされるなんて！

「やっぱり嫌いだわ、やな奴らだわ！」

ひとしきり、静が鎌倉をバカにし返すのを、鬼王は黙ったまま聞いていたが、

「もう気はすんだ？」

やがて、にっと笑った。

そう問われて、すぐにウンと頷けるような、静はそんな素直な娘ではないし、けれどももう悪口は底をついている。仕方がないので、ふんっと彼から顔をそむけた。

そのまま黙っていると、

「鎌倉の奴らは、静や九郎や、都の奴らのようには、法皇や朝廷のことをありがたがったり恐

れたり敬ったりしてないよ」

おだやかに、鬼王は言うのだ。

「あいつらは、朝廷に支配されるつもりなど、もうないらしい」

「支配されるつもりはない……？」

どういうことなのか、静にはよくわからなかった。しばらく考えてみたけれど、やっぱりわからなかったので、鬼王を振り返り、

「どういうこと？」

「つまり、武士たちのために、鎌倉にもうひとつの朝廷を作ろうとしてるのさ」

朝廷が貴族のための政権ならば、鎌倉に整えられつつあるものは、武士のための政権――。

「ふたつの政権が、同時に存在するってこと？」

そんなことが、あり得るの？

静には、やっぱりよくわからない。

この体制は、のちに室町幕府へ、江戸幕府へと引き継がれてゆくものだから、現代を生きる私たちには馴染みだが、それまではとにかく、貴族だけが日本を支配し続けてきたのだ。そんな世の中しか知らない静には、わかろうはずもない話である。

いつまでも、きょとんと首をかしげたままでいる静に気づき、鬼王は、

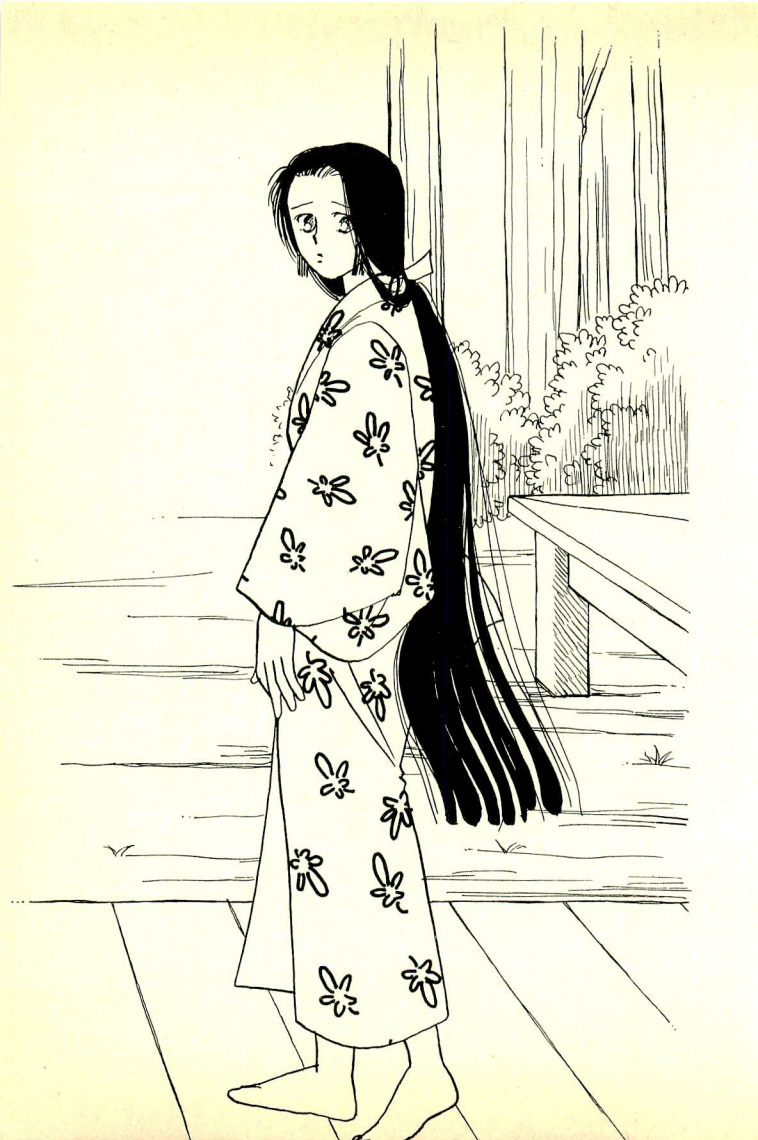
「……わかんないか？」

親切にも、彼女の顔をのぞき込むようにして訊ねてくれた。
「うん、わかんない」
静は、問われるままに頷いた。
「……そっかあ。ま、いいんだけどな。とにかく、そういう事情だから、きっちり朝廷から独立してるって態度を取っていたい鎌倉としては、法皇から官位をもらって喜んでる九郎の姿は、まったく困りもんだし、なんか、朝廷に尻尾ふってる犬みたいにも見えてるし――ってこと」
「やっぱり、やな奴、頼朝って」
結局、静の理解のほどは、そこに戻ってしまっただけだったのだが、鬼王は、べつに気にしていないようだった。
「邪魔したな」
短い言葉を残し、行ってしまうつもりのようだ。
けれどもその腕を、
「ちょっと待って」
と、静は抱き止め、
「屋敷には、しばらくいるの？」
「いや、また、ちょっと……」

「じゃあ、その前に葵さまに会って行ったら？」
「――は？」
鬼王の目が、まんまるに広がった。
いきなり葵の名前を出されて、面食らったようだ。
「会って行きなさいよ。きっと葵さまも、あんたに会えるのを楽しみにしてるわ」
静は、いそいそと立ち上がり、みずから縁に駆け出して、
「待ってて？　呼んできてあげるから」
と、鬼王を振り返った――つもりだったのに。
そこに、彼の姿はなかった。
ただ、春の風が、からっぽの空間にむなしい渦をまいているばかり。
「……行っちゃったの？」
静は、気が抜けたように呟きつつ肩を落とした。

☆

静は、鬼王が大好きだ。
それは、今では艶めかしい気持ちでなく、弟を思うようなやさしい感情である。
だから、葵に会わせてあげたいと思った。



どういうわけでふたりの初恋がうまくいかなくなってしまったのかは知らないが、鬼王を見るかぎり、その想いは終わっていないようだ。

とりあえず会ってみれば、どんな方向へ向けてにしろ、滞っていた恋もふたたび流れはじめるのではないかと思ったのだ。

（……それなのに）

静は、怒っている。

（どうせ、あの子のことだもの、てれ隠しに意地を張っているだけに決まってるわ）

夜である。静も、そろそろ寝もうと思っているところだったが、昼間のことが口惜しくて、どうも眠くならない。

ひとり、ぷりぷり怒っていると、突然、蔀戸が、

――コンコンッ！

と鳴った。

かと思うと、その戸が上がり、向こうに見えたのは、

「――鬼王!?」

そう、彼の顔である。

静は走ってそちらへ近づき、

「あんた、どうして逃げたのよ!?」

いきなり食ってかかると、鬼王は苦笑した。
「だって、いまさら葵なんかに会って、どうするんだよ？」
「そういう言い方をするってことは、やっぱり今でも好きなのね？」
鬼王は何も言わない。すっと視線をそらせてしまう。
静は、それを答えと受け取り、
「だから私、気をきかせたのに」
そう言うと、鬼王のくちびるから皮肉な笑いが落ちた。
「ばかばかしい。葵は九郎の正室だぜ？　いまさら……！」
「あのふたり、夫婦じゃないわよ？」
静は、ゆっくりと言った。
そらされたままだった鬼王の視線が、ぴくんと跳ね上がった。
「どういう意味だ？」
「そういうことよ」
つまり、九郎と葵の間には、いわゆる夫婦の関係がいまだにない——と、そういうことを静は言っているのだ。
それは、当のふたりと静だけが知っている秘密だった。
「……嘘だろ？　あの九郎が……」

女にだらしないあの九郎が、いまだに手を出さずにいられるなんて——と言いたいらしい。

静は笑って、

「鎌倉から送られてきたのが他の女の子だったら、こんなことにはならなかったでしょうよ。でも、あの葵さまだったんだもの。あの子は、あんたのものなんだもの」

鬼王の恋人とわかっている少女を妻にする気には、さすがになれない。だから九郎は、今も、葵を名ばかりの妻のまま置いているというのである。

「安心した？」

静は、鬼王の目を、いたずらっぽい仕草でのぞき込んだ。

ところが彼は、冷たい笑いを鼻先で揺らすばかりだ。

「べつに、そんなの俺には関係ないよ」

「……なんですって？」

「俺、葵のことなんて好きでもなんでもないもの」

「嘘。好きなくせに」

「好きじゃないよ。好きにはなれない」

「どういうこと——？」

「別に意味なんてないさ。その気がないから、好きになれないだけだよ」

「嘘」

「嘘じゃない」
「嘘だわ」
静は、きっぱりと言いきった。
だって、それなら、この瞳の色はなんだろう？　鼻先の笑いとは裏腹に、寂しい夜の色を集めて滲ませたような、この瞳は。
「あんた、何か事情を抱えているんじゃない？」
ふと、そんな気がした。
鬼王は、静にちらっと視線を当てたが、
「なに勘繰ってんだよ。別に、なんにもないよ」
「だいたい、あんたって、どういう子なの？　見たとこ武家の子のようだけど、それならなぜ、十八にもなるのに元服しないの？」
静は、ここぞとばかり、たたみかけるように訊ねた。実は、ずっと不思議に思っていたことばかりなのだ。
平泉の生まれで、九郎が可愛がっている弟分だということ以外、静は鬼王について何も知らない。
どうやら、それについては鬼王自身、人に話す気がないようなので、ただ仲よくしているだけならそれで充分だと思い、あえて訊かずに過ごしてきた。

でも、鬼王が、こんな見え透いた嘘をついてまで葵を避けるのは、そのあたりに理由があるような気がする。

「あんたは、どこの誰なの？　この屋敷には時々しか顔を見せないようだけど、ふだんはどこに住んでるの？　足しげく鎌倉へ行っているのは何のため？　初めて会ったとき公家邸に潜んでいたのは何のため？　答えて」

鬼王は答えない。答えの代わりに、ふ……っとやさしく笑ってみせたあと、いきなり蔀を閉じてしまった。

静が慌ててそれを上げてみても、そこには、春の闇がとろとろと流れているばかり。もう、鬼王の気配もない――。

その向こうへ、静は虚しく呟いた。

「あんたはいったい、なんなのよ……」

なみだむらさき

平家が壇の浦に滅んだのは、それから間もなく――三月の二十四日。
九郎が自分で言っていた通り、彼が出陣して行った途端の、呆気ない終わりであった。
そして、ひと月後、九郎は京都に無事、凱旋したのだが。
妙な噂が静の耳に届いたのは、その直後のこと。
「九郎の殿さまが、北の方をお迎えになる」
というのだ。
彼女は初め、思わず首をひねってしまったものだ。
（北の方――というと、葵さまのことよねえ？　でも、お迎えになるもならないも、葵さまがこちらにいらしてから、もう半年以上、経っているはずだけど……）
それでもとりあえず、侍女をひとり、探りに出してみた。
すると、それがすぐに戻ってきて、言うことには。
九郎が、平時忠の娘を正室としてもらい受ける予定だという――！

☆

「なんてことをなさるんです!?」

京都に帰って以来、壇の浦の戦後処理に忙しくしている九郎を、静は早速、捕まえて、厳しく問い詰めてやった。

が、九郎には、静の怒りが何を指しているのか、わからないらしい。きょとんと瞳を回し、

「俺は、なにかおまえを怒らせるようなことをしたか？」

「怒らせたのは私じゃないわ、御方さまです！」

「……葵？」

「そうよ。なぜ、御方さま以外の方を正室に迎えようなどとなさるんです!?」

「ああ、そのことか」

九郎は、それが何だといった軽い調子で、

「正室はひとりでなければならん、ということもあるまい」

確かにこの時代はまだ、一夫一婦制が整いつつある過程で、正室と側室の立場が確実に分けられてはいない。正室が同時にふたり存在するという不思議なことも、あるにはあったようである。

平時忠というのは、清盛の妻・時子の実弟で、権大納言の地位にあった者、その娘を娶ると

なると、正室の地位を与えないわけにはいかない——九郎は言い張る。
「でも——」
と言いつつ、立ったままだった静は、小袖の裾を整えて腰を下ろした。
同時に自分の前の座を示し、九郎も座らせた。
「でも、そうまでしてその姫ぎみを娶らなくちゃならない必要が、どこにあるわけ？」
「それは——」
九郎は、詰まった。
どうやら、そうしなければならない絶対的な必要というのは、ないらしい。
実は、平時忠は壇の浦で生き残ったところを捕らえられたのだが、京都へ護送されてくる途中、九郎のさわやかな人柄にすっかり惚れ込んでしまったという顔で、
「実は、わたしには二十三になる娘がいるのですが……」
と言いだした。
平家の権勢が華やかだったころなら、女御に——とも望めたが、今はそれもかなわない。あの娘が不憫でならない。
「九郎どののような方にもらっていただけたなら、どんなにか安心なんだが……」
ちらり、九郎に横目をくれた。
九郎はまず、神妙な顔で黙り込んでみせた。

京都の屋敷には、葵がいる。静もいる。

でも、

（確かに可哀相な身の上の女だよなあ）

内心では、ほろりときている彼なのだ。

早い話、これは俺が面倒をみてやらねばなるまい——と、その女に興味がわいただけなのだった。

そのあたりのことを、静は、九郎の沈黙から素早く見抜いたらしい。

むっとした顔になり、

「御方さまが、お可哀相です！」

その思うのは葵に対してだけでなく、自分にとってももちろん、悲しいやら口惜しいやらの話なのだが、世話好きで正義感の強い彼女としては、ついつい、そちらを先に訴えてしまうのである。

静は、じりっと膝を進め、

「あの方は、ただでさえ、この屋敷では不安定な存在でいらっしゃるのよ？　新しい御正室さまが現れたら、皆、今まで以上に御方さまをないがしろにしようとするに決まってます。もっと気を配ってあげてよ」

「だったら、そこのところは静がうまくやってくれればいい。おまえは、屋敷の女どもには人

望があるようだから」
「そういう問題じゃないでしょう？」
「じゃあ、どうすればいい!?」
九郎は、うんざりした顔で怒鳴った。この話を続けるのが、どうも面倒になってきたらしい。
「まったく、こういういいかげんな人を夫に持ってしまったことが、私や御方さまの不幸の始まりなんだわ」
静はぶつぶつ言ったが、九郎はちらりと彼女を見下ろし、
「俺は、葵の夫になったつもりはない」
その視線を、静はゆっくりと受け止める。
「確かに、それはそうだけど。でも、形の上だけでも、あなたは葵さまの夫なんですからね。葵さまが頼れるのは、あなたしかいないんだもの。あの方を泣かせないであげてくださいな？」
「――そうかな？」
「そうですよ」
「……そうかなあ？」
九郎は、神妙な顔で黙り込んでしまった。

なんだか、様子が妙だ。
静は、するすると膝を寄せて彼に近づき、真下からその顔を見上げるようにして、
「なんなの？」
「いや――」
九郎は、静の髪をぽんぽんと撫でたあと、
「あの子は、俺を頼りにしてるかな？」
「――？」
「俺がもうひとり正室を娶るらしいと聞いたら、おまえは飛んできて怒っただろ？」
「当たり前よ。こんな怒れる話、ないわ」
「まあ、ふつうだったら泣き叫んで嫉妬したりするんだろうから、おまえの反応ってのもなんか変だなとは思うけどさ」
「……なんか関係あるの、そのことが？」
「いや、関係ないけど」
「だったら黙っといてちょうだい」
「まあまあ――」
と、九郎はまた、なだめるように静の髪を撫でてやり、
「それにしても、葵だって、何か反応があってもいいだろう？　何か言ってくるとか、泣いて

くるとか怒ってくるとか――」
「それは――そうですねえ」
「でも、何も言ってこない」
「……うーん」
「何を考えてるんだろうな、あれは。あれがこっちへ来てから、なるべく気にかけるようにはしてるつもりだし、おまえも仲よくしてやってくれてるみたいだし、最善のことをしてやってるつもりなんだが、どうも――気を許してくれん。鎌倉にいたころのほうが、俺、あの子と仲よしだったような気がする」
「そりゃあなた、鎌倉のころは、あの子にとって、あなたは大好きなお兄ちゃんだったわけだし、でも今は、わけわかんないけど事実はそうじゃないけど夫になっちゃったわけだし、葵さまが戸惑っちゃうのも当然なんじゃないの？」
「それだけじゃなくて――」
「じゃあ意外なとこで、名ばかりの妻のまま置かれているのが気に入らなくて拗ねてらっしゃる――とか？」
「それはないだろう？　あの子は鬼王が好きなんだから」
「うーん……、でもねえ」
「ん？」

「鬼王も、変なのよねえ。あなたがいない間に一度、帰ってきたんだけど――」
「ほんとか!?　あいつ最近、俺のとこには姿を見せないぞ？」
「鎌倉に行ってるみたいよ？」
「ふーん……？　情報収集かな？」
「そんなとこだと思うけど。やけに鎌倉の情報に詳しかったし。――まあ、それはいいとして、なんか、葵さまに会いたがらないの。会っていったらって勧めたんだけど、逃げるの」
「俺に気兼ねしてるんじゃないか？」
「それが、ほんとのとこを教えてあげて、九郎のことなんか気にしなくてもいいのよって言ったのに、それでもだめなの。会ってあげないの」
「……ふーん？」
「なんでかしら」
「案外、俺たちの思い違いだったかな？」
「思い違い？」
「あいつ、葵のことなんて、なんとも思ってないのかもしれないな、実のところは」
「……そうかなあ？」
ふたり、考え込んでしまった。
けれど、当の本人たちを目の前に並べて語らせてみないことには、ここで九郎と静がどんな

に気を揉んでも、真実は、わかろうはずのないことである。
「それにしても」
と、静が話題を戻し、
「葵さま、あなたのところに言ってこれないだけで、もしかしたら、ひとりで泣いていらっしゃるのかもしれないわ」
「泣いて――いるかな？」

☆

ところが、葵は泣いていなかった。
泣くというより、奇妙なほどの空白に心を支配され、とても不思議な気分を味わっていた。
これは、なんだろう？　悲しみではない。口惜しさでもない。でも、たまらなく頼りない場所へ落ちてゆくような――。
（私、なんのために都まで来たんだったかしら？）
九郎の妻になるため？
（いいえ、鬼王に会うため――）
そもそも、葵が九郎の花嫁に選ばれたのは、彼女が源家の乳母一族の娘だからだ。
葵の祖母は頼朝の乳母。葵の母は頼朝の嫡男・万寿の乳母。

それほど自分と密着した関係にある一族の娘と娶わせて、鎌倉における九郎の頼りない地位に少し箔をつけてやりたい——頼朝の言葉を、葵も直々に聞かされている。

もちろん、はじめは戸惑った。

鎌倉で、九郎が仲よくしてくれたことは、葵の大切な思い出だ。会わなくなってからも、兄のように思う気持ちは変わらずにいた。その九郎と夫婦になるなんて……。

けれども結局、葵は決めたのだ。

（だって、九郎のところへ行けば、鬼王に会えるかもしれないと思ったんだもの）

でも、鬼王はいない。ここへ来てから、一度も会っていない。姿を見かけたこともない。

（会えたら、伝えようと思っていたのに）

なんとも思われていなくていい、もしかしたら忘れられてしまっているかもしれないけれど

それでもいい、十四の冬の日、飲み込んでしまった想いを伝えたい。

（あなたが好きよ——って）

もちろん、伝えられてもその時の自分は、九郎の妻になってしまっているだろう。伝えられたからって、どうなるものでもないだろう。

何も期待できない恋だけれど。

それでも、あの十四の冬を、葵はずっと後悔してきたのだ。鬼王は葵のことなんてなんとも思っていないみたいだから、だから、伝えずにいよう——そんなふうに逃げてしまった自分の

ことを、後悔し続けてきたのだ。

だから、伝えたかった。

答えは、はじめからわかっていたし。鬼王は、葵のことなんてなんとも思ってくれていないわけだし。ちょっとくらい——昔の気持ちを伝えることくらいなら、九郎にも迷惑をかけはしないだろうし。

伝えたら、そのあとは、一生、九郎の妻として生きていこう——そう決めていた。

あの初恋以上に好きになれる人なんて、この先、出てきやしないだろう。だったら、嫁ぐ先は、九郎がいい。九郎で嬉しい。あの人のことは、好きだから。お兄ちゃんみたいに好きだから——。

でも、今、葵は彼の妻じゃない。

これは、どういうことなんだろう？

鬼王には会えず、気持ちを伝えられず、九郎の妻にもなれず——。

（どうしてなのかは、わかるんだけれどね）

九郎のことだ、葵がいまだに鬼王を想っていることに気づいて、こうしてくれている——それを、葵はちゃんとわかっている。

でも、これはどういうことなんだろう？

こんな中途半端な状態のまま、ふらりとひとり置かれたまま、九郎は、自分以外の女を正室

として娶るのだという。

（私、なんのためにここへ来たんだろう？）

行く先に見えるものは、何もない。頼るべき人は、どこにもいない。葵はひとり、ひとりぼっち……。

たまらなく寂しくて、そして、たまらなく不安で——。

でも、涙が出ない。心が乾いて涙も出ない。

自分が、ひどくつまらない人間に思えた。なんの価値もない人間に思えた。今、ここで死んでしまっても、誰も悲しまないんじゃないかしら——と。

でも、死んでやろうにも、身体が動かない。心が重くて、想いが重くて、動かないのだ。

そして、早暁。

冷たい空気を吸おうと寝所を抜け出し、ふと見ると、縁の端に紫陽花の一枝が置かれている。

まだ染まりかけの、紫が涙のように滲んだ紫陽花だった。

誰かが、わざわざここに置いてくれたのだろうか？　もしや、葵をなぐさめるために？

（誰が……？）

夜明けの青の中、紫陽花を胸に抱きしめると、初めて、ぽろりと涙がこぼれた。

反逆

葵は、その後もこのことに心をわずらわされる日々を送ることになるのだが、九郎のほうは、実は、それどころではない事態に陥っていたのである。

今、九郎は、鎌倉の入り口――腰越にいる。

壇の浦で生き残った平宗盛父子を鎌倉まで護送するべく、あれからすぐ京都を発ったのだ。

壇の浦でも、あれだけの活躍をしたのちのこと。意気揚々と鎌倉入りしようとした彼だったが、鎌倉まであと一歩というところまで来たとき、

「お待ちください、判官どの。この先へ通ることはまかりならん――とお伝えするよう、御所さまより申しつかっておりますので」

頼朝の名代が出てきて足を止められてしまったのだ。

宗盛父子のことは、その名代が引き取り、

「御所さまのお許しが出るまで、こちらでお待ちくださいますように」

そんな事務的な言葉だけを残し、去ってしまった……。

☆

妙に暑い一日だった。

温められた潮の香が重くよどむ、宿の一室に、九郎はごろりと転がり、考えている。

（なぜ俺が、こんなめにあわされなければならない？）

わからない。

（兄上は、俺を許してくださっていたんじゃないのか？　実は、まだ怒っていらっしゃったのか？　それとも――俺はまた、兄上を怒らせるようなことをしてしまったというのか？）

仰向けに転がったまま、虚空を睨む九郎の目は、じっと止まったままである。

（平三のせいか……？）

やがて思い浮かんだのは、あの、梶原平三景時の顔だった。

九郎の身に覚えのないことで頼朝が怒っているのだとしたら、あの男のせいに違いない。

（あいつ、兄上に、あることないこと吹き込みやがったに違いない！）

歯噛みしつつ、九郎は、がばりと起き上がった。

胸には、屋島（香川県高松市）の合戦の時のことが思い浮かんでいる。

☆

頼朝の命令で京都に足止めされていた九郎が、やっと出陣を許された、例の合戦である。
九郎軍は、摂津国（兵庫県）渡辺津から四国へ渡り、屋島の平家軍を攻撃することになっていた。
が、折からの暴風雨で、とても船を出せそうにない。
「嵐がおさまるのを待ちましょう」
当然のこととしてそう言ったのは、梶原景時だった。
軍議の場である。
九郎を上座に、一同は、天の巡り合わせの悪さを呪いつつ、けれども梶原の言う通り、嵐のやむのを待つしかない、というつもりでいる。
ところが、九郎はにやりと笑い、
「待つ必要など、あるものか」
景時が、神経質そうな眉をぴくりと上げた。
「待つ必要がない――？」
「嵐の中へ、船を出す。阿波（徳島県）へ回り込んで、背後から屋島を衝く」
「なんと――！」

景時をはじめ、一同、唖然となった。

奇襲作戦をとろう——と九郎は言うのだ。

平家軍は、正面から攻められるものと信じて疑わずにいるだろう。加えてこの暴風雨、こんな時に船を出すバカもいまいと安心しきっているに違いない。その意表を衝いて背後から忍び寄り、一気に叩く——。

が、九郎のこの作戦は、皆から総すかんを食ってしまった。

「なんと卑怯な！」

というのである。

中でも景時の怒りようは大変なもので、

「また奇襲作戦ですか!? 鵯越の時といい、あなたはどうして、そんな卑怯な真似ばかり思いつかれるのです!?」

「そんなことを言ってる場合か!?」

海戦に長けた平家軍を、それに弱い鎌倉軍が打ち破るには、奇襲作戦の他に何があろう？

「俺は、ひとりでもやるぞ！」

九郎は言い張った。

「どうぞ、ご勝手に。我々は、ここで嵐のおさまるのを待ちましょう」

景時は、生真面目な顔のまま、九郎に絶縁宣言を言い渡した。



そして、九郎は結局、嵐の中を、自分の郎党だけを集めたたった五艘で船出し、見事に勝利する。

嵐を待った景時たちが屋島に到着した時には、もう合戦は終わってしまった後だったのだ。

☆

（平三は、あの時のことで俺を恨んでいる）

だから頼朝に、あることないこと言いつけて、自分と兄との仲を違えようとしているのだ——と、九郎は思う。

実際、あの後も景時と九郎は行動を共にしてきたのだが、九郎のすることにはいちいち文句をつけて、うるさくてかなわなかった。

（平三のせいだ。違いない）

九郎は、起き上がった勢いのまま立ち上がった。

今すぐ、景時に文句を言ってやりたい。が、景時は京都に置いてきてしまっているので、どうしようもない。

うろうろと部屋の中を歩き回った結果、九郎はあることを思いついた。

頼朝に、詫び状を送ろうというのだ。

世に言う〈腰越状〉である。

「左衛門少尉源義経、恐れながら申し上げ候」
に始まり、自分は頼朝に対して少しの異心も持ってはいないことを涙ながらに訴える書状であった。
（これで兄上も、俺の気持ちをわかってくれるだろう）
九郎は意気揚々と、それを、頼朝の側近・中原広元に宛てて送りつけた。
そして、待った。頼朝から、
「よくわかった、平三などの言葉に踊らされたりして、俺が悪かった。すぐに鎌倉へ入るがいい。おまえの輝かしい戦功の話でも、聞かせてくれないか」
そんな言葉が返るのを、ただひたすらに待ち続けた。
が、返事はなかった。

☆

九郎は、兄・頼朝が好きだ。
初めて会ったとき、頼朝は、あたたかな涙を九郎にくれた。
「会えて嬉しいぞ、駆けつけてくれて嬉しいぞ」
と、幾すじものやさしい涙をこぼした頼朝。
あの涙を、九郎はずっと信じてきた。

今も信じている。

けれど。

「鎌倉どのに不満のある者は、俺についてこい！」

頼朝の返事を待ちくたびれて腰越を去る時、九郎は思わず叫んでいたのだ。

（兄上が、そんなに俺を信じられないというのなら、言う通りのことをしてやる！　兄上に反旗をひるがえしてやる！）

頼朝のあの涙を、いまだ信じた、そのままの心で――。

鎌倉・頼朝

頼朝は、今。
側近・中原広元を背に置き、九郎からの書状を広げている。
「九郎は、行ったか」
黒々とした墨の色に目を落としたまま、ぼそりと呟いた。広元が、例の九郎の暴言を伝えると、苦笑を洩らし、
「鎌倉どのに不満のある者――か。いたのか、そういう者は？」
「ひとりも、おりませんでしたようで」
「……そうか。ここまでやってみせても、まだわからんようだな、九郎は」
頼朝の苦笑は、さらに苦いものとなって落ちた。
九郎がどう受け止めているかは知らないが、頼朝は、これでも精いっぱい、彼を守ってやってきたつもりである。
例の大工の馬事件などは、

「あまり思い上がっているとマズイぞ？」

と、それとない忠告のつもりでやったことだったし、葵を花嫁として送ってやったことも、そう。

が、九郎はまるで気づいていないらしい。

せめて、この書状に、殊勝な詫びの言葉のひとつでもあったなら——と、期待する気持ちはあったのだが、それもない。

「あれは、もうだめかな？　使いものにはならんか？」

頼朝は苦笑のまま、広元を見やった。

それはまだ、あくまでも異母弟を見る異母兄としての苦笑のようである。

「そうですなあ、鎌倉のために働いていただこうというのは、もう無理のようですな」

「殺すか？」

頼朝の目から苦笑が消えた。

一瞬にして、九郎の異母兄から鎌倉に集う武士たちの首長へと、気持ちを切り換えてしまっている。

今度は広元が笑って、

「いえいえ、殺すにはまだ惜しい」

「だが、鎌倉に反旗をひるがえすつもりだぞ、あれは」

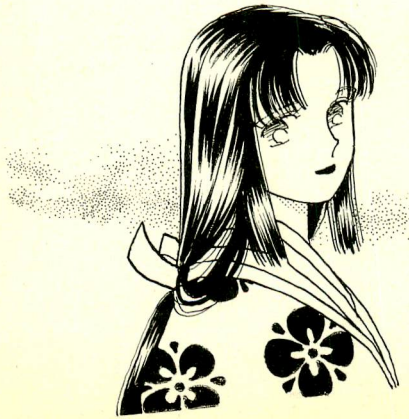
「といっても、人が集まらぬのでは、それも叶いますまい」
「それは、そうだな」
「それよりも、九郎どのを生かして逃がして、狩る――」
「狩る？」
「はい。あの方の背後に奥州があるかぎり、あの方は使えます」
広元が声にしたのは、少なすぎるほどの言葉だった。が、その裏にあるものを頼朝はすぐに見抜き、深いため息をついている。
「……奥州か」
東国に本拠を置き、さらには平家を滅ぼすことで西国を、四国を、九州をもその勢力下におさめた鎌倉の武家政府だ。が、奥州だけは依然、藤原一族の手に握られたままである。
「奥州か」
頼朝は、ふたたび呟いた。
その手から、九郎の書状が、はらりと落ちた、そのとき。
「……誰だ!?」
頼朝の声が、鋭く飛んだ。
人の気配がある。
誰をも遠ざけておいたはずなのに、遣戸の向こうに人の気配がある。

頼朝は素早い動作で立ち上がり、戸を開いた。
にやりと笑った顔がある。
見覚えがあるような、ないような——笑ったその瞳に、ゆっくりと視線を合わせながら。
頼朝は。
思い出している。
これは誰なのか——。
記憶の底から、ある少年の名が滲み出てくるのを、ゆっくりと目を細めつつ、待っている。

第三章

文治元（一一八五）年・京都

《星、堕ちゆく》



前夜の闇

「いや、申し訳ないね。ここのところ、ずっとこんな具合でね。今も、ようよう床を抜け出してきたんだよ」

源九郎義経は、すっかり弱りきっていて力も出ないのだ——といった様子で、ぐったりと脇息にもたれ、熱く重い息を吐いた。

彼のため息の行方を硬い視線で追いかけるのは、梶原景季——九郎の天敵・梶原景時の、息子である。

九郎の様子を見てこい——頼朝にそう言いつけられた景季は、彼の邸を訪ねてみたのだが。

昨日、来たときには、病気で寝込んでいる、と、会わせてもらえなかった。明日にはなんとか起きられるようにもなるだろう——そう言われ、今、あらためて出向いてみたところが、この様子である。

それでも景季は、父親ゆずりの生真面目な調子で、

「まずは、行家どののことなのですが」

と、話を切りだした。

九郎の瞳が、わずかに、とろりとした動きをみせた。

源行家――頼朝や九郎には叔父に当たる人物である。

よい言い方をすれば機を見るのに巧みで、木曾義仲が勢力を握れば義仲に、それが没落すれば後白河院に、そうかと思えば頼朝に――と、あちらこちらを渡り歩いては、すり寄って行った先に争いの種を落としてくるような男なので、頼朝は、はなからこの叔父を信用していない。

その行家が、今度は九郎のところに現れ、手を結んだらしいという噂がある。つい先日、はっきりと頼朝に対して反旗をひるがえしてみせた九郎と――。

景季は、九郎の瞳が動くのを確かめたあとで、

「行家どのには、近ごろ、御所さまに対する謀反の噂が聞こえております」

「叔父上を討て――と、兄上は、そう言っておられるのか？」

「はい」

おかしな話である。自分に敵対する意思を示したはずの異母弟に、頼朝は、以前と変わらない調子で命令を下しているのだ。

が、九郎もその矛盾には気づかない顔で、

「――ふむ、そうか」

目を伏せ、また息を吐いた。わずかな会話を交わすのにもこんなに疲れてしまうのだ——と言っているかのような、ため息だった。

やがて九郎は顔を上げ、

「すぐにも動きたい気持ちはあるんだが、なにしろ、こんな具合でなあ。とにかく、まずは病を治してから——と、兄上にはそう伝えてもらえないか？」

☆

景季は、沈思の面持ちで宿への道を行く。

供人が時折、心配げにその横顔を見上げるのにも、気づかないふうである。

が、九郎の邸から宿までは、わずかな道のり。すぐに行く先が見えてきたのでホッとしたのか、供人は明るい顔になり、

「九郎どのも、相変わらず間の抜けた人ですねえ。御所さまに反旗をひるがえしたはいいが、その途端、病で動けなくなるとは」

景季からの返事はない。

ふたたび心配げに顔色を変えた供人が、そっと見上げると、彼は渋く瞳を歪め、

「間抜けは、おまえだ」

「——はい？」

きょとんと目を見開くばかりの供人に、舌打ちをくれてやり、
「あれが本物の病などであるものか」
「――と、申しますと……」
「昨日、俺は先触れもなしに九郎どのを訪ねた」
そのとき、病と称して顔を見せようともしなかったのは、策を練るためだったのだろう――
と、景季は言う。
「あんな憔悴ぶりなど、丸一日、食べず眠らずにいれば、たやすく作れる。昨日のうちに準備したんだろう」
「何のために？」
「もちろん、行家どの追討の任務から逃れるためだ」
「では……」
「九郎どのは、行家どのに同意している。しかも、それを御所さまには悟られないよう、ひた隠しに隠しているところを見ると、裏に何か企みがあるに違いない」
「なるほど……。御所さまには、ありのままをご報告申し上げるのですか？」
「もちろん。九郎どのが動き出す前に先手を打つべきです、と申し上げるつもりだ」
と、景季は冷たく笑い、
「誰が温情などかけてやるものか。屋島での合戦のことを、俺は忘れないぞ。あいつは父上を

――いや、我ら東国武士を愚弄したくせに、その自覚などまるでない様子で正義ヅラをしていやがる。御所さまがどんな判断を下されようと、知ったことか」

憎々しげに落ちた景季の呟きは、鎌倉の武士たちが九郎へと向ける目、そのものであった。

文治元（一一八五）年、晩秋。

彼らの目の色の冷たさを、どれほどのものと受け止めているのか、九郎は――。

☆

九郎は、後白河法皇から頼朝追討の院宣を手に入れようと、画策している。

「腰越から帰るとき、いくら呼びかけても同志が集まらなかったのは、あれは皆が兄上の威光を恐れてのことに違いない」

と、九郎は自信たっぷりに言う。

「法皇さまからの正式な命令を掲げてみせれば、皆、安心して名乗りをあげてくるに決まっているさ」

にやりと笑ってみせる彼の頬には、先日、梶原景季に会ったときのような憔悴ぶりなど、跡形も残っていないのだ。

景季は、真実を見抜いていた。

今、九郎のかたわらにいるのは、頼朝から追討命令が出ているはずの源行家。この叔父と手

を結んだ九郎は、景季が語っていたとおり、病を装うことで時間をかせぎ、その間に望みの院宣を手に入れてしまおうと考えているのだった。

「だが、頼朝もあれだけの男だ。梶原景季からの報告を聞けば、こちらの計画にはすぐ気づくだろう。事は、なるべく急いだほうがいい」

冷静な判断を下すのは、九郎の郎党・伊勢三郎義盛。この伊勢三郎をはじめとして、この場には、九郎の腹心中の腹心だけが集められていた。

密議なのだ。

行家も、夜陰にまぎれるようにして九郎の屋敷を訪れている。

だから、しばらくは誰もこの部屋に近づくな、と命令を下してあったのだが、どうしたわけか、ひたひたと縁を渡ってくる足音が聞こえた。それに気づいたのは、九郎の弟分・鬼王丸だった。

「誰か来る」

ぼそりと落ちた呟きを見つめ、九郎は、

「まさか」

と笑ったのだが、すぐに、誰もに聞きわけられるほどの響きとなって、足音がひとつ近づいてきた。

「誰だ？」

九郎の声が、鋭く飛ぶ。
「御方さまがお見えでございますが、いかがいたしましょう？」
妻戸の外から呑気に聞こえたのは、九郎付きの侍女の声だ。その、あまりの緊張感のなさに、九郎は思わず舌打ちして、
「誰も近づくなと言ってあっただろうが」
「はあ……、ですが、緊急の御用とおっしゃいますので……」
九郎は、眉をひそめながら皆の顔を眺め渡した。一様に、渋いものが浮かんでいる。
が、変に強い調子で追い返すのもまずいだろう、と、とりあえず呼び入れることにした。
「わかった、通せ」
すると途端に、鬼王丸が、す……っとその身を浮かせ、次の間へ消えた。
それは、誰も気づかぬほどのひそやかさのうちに終わったことだが、ただひとり、伊勢三郎だけが彼の姿を瞳の端に映していた。
かと思うと、三郎も、鬼王を追って同じ場所に消えている。
妻戸が開き、葵が姿を見せたのは、ちょうどそのときだった。
「どうした？　何があった？」
葵に向けられた九郎の笑顔は、それまでの緊迫した気配などすっきりと隠され、いつものように、さわやかだ。

葵は、居並ぶ顔ぶれに、気圧されるものを感じたようではあるが、すぐに立ち直り、
「鎌倉の兄から、文がきたんです。それを、九郎にもちょっと見てもらいたくて……」
皆の顔を控えめに見回し、九郎とふたりだけで話したいのだという気持ちを、暗に示してみせた。
が、九郎は難しげな様子で唸り、
「どうしても今でなくちゃならないのか？」
「いえ、べつに、そういうわけではないけれど、でも、なるべくなら早いほうが……」
「困ったな、大事な話をしている最中なんだ。ほら、おまえも知っているだろう？　行家叔父の追討のこと」
「はい、知ってます」
そのことなら知っているが、行家の顔までは知らない葵である。すぐそこに座っている男が当の行家で、なに食わぬ顔で自分を見つめていることになど気づきもしない。
「そろそろ動き出さねばならんからな」
まずは、内々の軍議を開いているところだ——という嘘を、九郎はついた。
そう聞かされてしまうと、葵も、邪魔することが出来なくなった。
「わかりました。じゃあ、明日でいいです。お邪魔して、ごめんなさい」
皆に、ぺこりと頭を下げ、葵は素直に退がっていった。

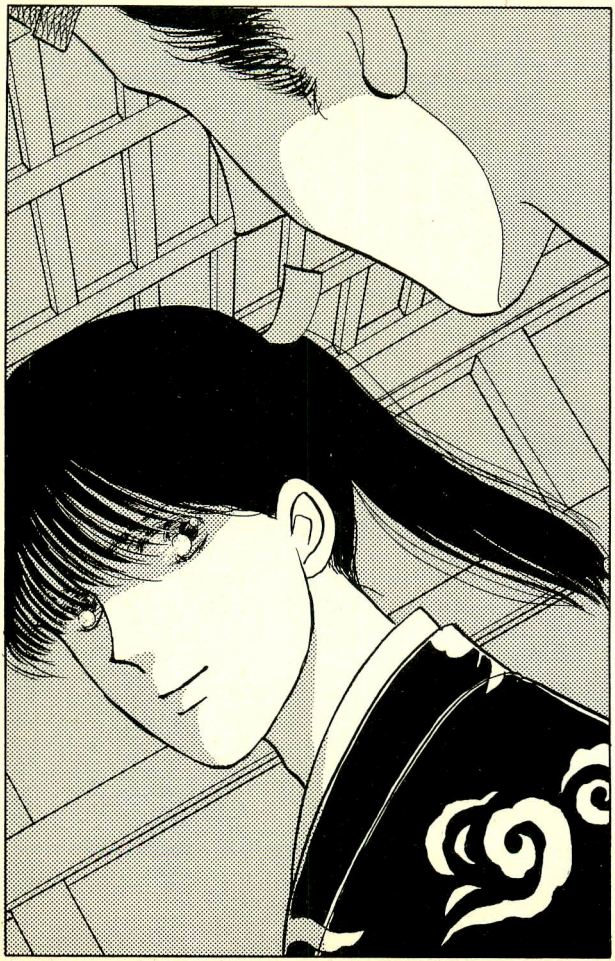
その後ろ姿を見つめつつ、九郎は、胸の内にぽつりと呟く。
（あれは、早いうちに河越庄（かわごえのしょう）へ帰してやったほうがいいのかもしれん……）

☆

「おまえ、なぜ葵の前に顔を出さん？」
灯もない闇の中で、隣室で交わされる九郎と葵のやりとりに耳を半分だけ向けながら、伊勢三郎は、かすかに笑ったようである。
「べつに、意味などない」
鬼王は、三郎の笑いから、ふいと目をそむけた。
「葵のほうは、おまえに会えるのを楽しみにしているんだろうに」
「知らない。俺には関係ない」
「九郎と葵は、俺の見たとこ、あれは夫婦じゃないな。なにもない。だから、気にすることはないんだぜ？」
三郎は、鬼王の髪を掴むようにしてこちらを向かせた。
このことを聞けば、鬼王は顔色を変えるに決まっている、いつものようにテレて取り乱すに決まっている——それを確かめるためにこちらを向かせ、三郎は、からかってやるつもりでいる。

が、鬼王は瞳の芯も動かさず、
「知ってるよ、そんなことくらい」
「……知ってる？」
「ああ、静が教えてくれた」
三郎の手を振り払った。
「まったく、あんたといい静といい、なんでみんな、そんなにおせっかいなんだよ？」
「おせっかいだと？　そんなんじゃあなくてだな――」
三郎は、訳知り顔で鬼王を諭しはじめたが、
「そんなことより」
鬼王は、その場の気配をピシリと打つように言った。
「三郎は、今度の九郎の蜂起、どう思う？　成功するか失敗するか――」
三郎は、ふと目の動きを止め、眉をひそめた。
「成功するか失敗するか――？」
「ああ。最近の九郎を見ていて、あんた、どう思う？」
「成功させるために策をめぐらせているんだろうが？」
「ふーん……？」
鬼王の唸り声には、なんとも妙な含みがある。

「おまえ、何を言いたい？」
鬼王は、にやりと笑って、
「平（たいらの）時忠（ときただ）が配流（はいる）先の能登（のと）へ下向（げこう）したのは、先月の二十三日だったか――」
「――平時忠？」
九郎の舅（しゅうと）に当たる人物だ。
時忠の娘を正室として迎えた九郎だが、もうひとりの正室・葵の気持ちを思いやり、結局、この屋敷には入れず、べつの場所に住まわせるという形をとっている。
が、鬼王が語るのは、彼女のことではなく時忠の話である。
「あれはたいした策士だったけど、しょせんは平家の人間、前時代の遺物（いぶつ）でしかなかったよなあ。九郎と頼朝との力関係を見抜けなかったんだから」
「――？」
三郎には、鬼王の話の意味が見えない。
鬼王は、浮かべた笑いを冷たく歪めて、
「つまり九郎は、時忠に利用されかけたわけだ」
平清盛（きよもり）の妻・時子（ときこ）の実弟である時忠は、壇（だん）の浦（うら）で生き残ったものの、官職（かんしょく）を解かれた上、能登への配流を言い渡された。が、そんなみじめな末路は真っ平である。このまま都（みやこ）に残るために、何かいい手だてはないか――あたりを見回した時忠の目に、九郎が映った。



「お人好しの九郎のことだ、義理の父が免罪になるよう、鎌倉にかけあってくれるに違いない——あの結婚には、そういう裏があったのさ」

事実、時忠は、九郎の舅であることを理由に、いつまでも京都にとどまっていた。

が、頼朝に信用のない九郎になど、いくら取り入っても無駄というものである。

頼朝は許さない。時忠の思惑など、はじめから見抜いているし、なにより彼は、平家の残党を罰することには、かなりの厳しさと残酷さとをもって当たっている。

結局、時忠は、せっかくの工作も虚しく、都を出ざるをえなくなってしまったのだった。

「なるほど——」

三郎は、眉間を厳しく歪めて唸ったあと、すぐにそれを解き、

「バカな男だな」

くくくっと笑った。

が、鬼王は皮肉な目で、

「バカなのは、九郎のほうだ」

「九郎がバカなのは昔からだろうが？」

三郎の笑いは楽しげにふくらむが、鬼王の目の色は変わらない。

「笑って済ませるなよ。あいつ、時忠の陰謀には未だに気づいていないんだぜ？　時忠がバカなら、九郎は大バカだ」

三郎の目に、ゆっくりと視線を合わせ、
「九郎の蜂起は成功しない。いくら院宣をもらったとしても、九郎に味方する者なんて、いやしない」
はっきりと言い切る鬼王に、三郎の笑いも、さすがに消えた。
鬼王は続けて、
「あんた、九郎が頼朝に反旗をひるがえした理由について考えてみたこと、あるか？」
「――理由？」
「首尾よく鎌倉軍に打ち勝ったとしよう。でも、そのあと九郎は、どうするつもりなんだ？　なんのために鎌倉と戦をしようというんだ？」
三郎に、答える言葉はなかった。
この反乱について深く考えた時間というのは、なかったような気がする。腰越で頼朝に冷たくされた九郎が、いきなり怒り出し、その勢いに乗せられてきただけのような――。
先のことなど、話し合ったこともない。
「九郎は、甘いんだよ。こんなことになってもたぶん、頼朝を、心底から自分の敵だとは思っていない。戦を仕掛けて、それに負ければ、自分の身も木曾義仲のように平家のように、滅ぼされることになるなんて思ってもいない。あいつは頼朝を、まだ兄としか見ていない」
そう――。

九郎は、初めて会ったときの頼朝の涙を未だ信じたまま、兄と慕ったまま、その兄に弓を引いたのだ。

「あいつ、負けたら死ぬんだよ。わかってない」

「だったら勝てばいいだろう？」

「無理だ、負ける」

「――おまえ!?」

「冷静になれよ、三郎。いいか？　鎌倉に集まった武士たちが頼朝ひとりを大将と担ぎ上げるのは、なぜだと思う？　九郎がこっちへ来いと呼びかけてもなびかないのは、なぜだと思う？」

「――？」

「あいつらには――鎌倉の武士たちには目的がある。いいかげん、都の朝廷からは手を切って、鎌倉に自分たちのための政府を作り上げるんだという野望がある。それを叶えてくれるのは頼朝だけだ――と、あの男を信頼しているからだ。九郎じゃだめだ。あいつは、何百、何千、何万もの人の上に立てる男じゃない。頼朝とは器が違う」

「だが、戦では九郎は、見事に采配を振るっていたぞ？　見事な勝ち戦をおさめていたじゃないか。人の上に立てる人間じゃないというのは、それはちょっと言い過ぎじゃないか？」

「そうかな？」

「――そうじゃないと、まだ言うのか？」
「人の上に立つというのは、つまりは、自分の感情を殺すことだ。自分のために生きるのをやめることだ。欲しいものを欲しいとも言わず、ただひたすらに、まわりの望む方向へと我が身を泳がせる――。それが、九郎に出来るか？」
「――――」
「頼朝は、出来る男だ。鎌倉のためにいらない、と判断がつけば、実の弟でも切り捨てることが出来る」
「そういう男は、俺は好かん」
「でも、そうでなければ人は集まらないよ？　集まらなければ、九郎は勝てない」
「――おまえ」
三郎は、低く唸った。
「おまえ、何を考えている？」
鬼王は、答えない。にやりと笑うばかりである。
「おまえ、よくこの屋敷から消えるよな？　あれは鎌倉へ行っているんだと聞くが――」
「それが、なに？」
鬼王の笑いは、三郎をからかうように揺れる。
「おまえ、なんのために、そんなに足繁く鎌倉へ行く？」

「さあ？」
「鎌倉の様子を探りに行っているんじゃなかったのか？」
「さあ？」
「まさか、おまえ――」
（九郎を裏切る気か？）
その言葉を、三郎はさすがに飲み込んだ。
あれだけ九郎を慕っていた鬼王が、まさか――そんな気持ちがある。
黙り込んでしまった三郎に、鬼王は言った。
「俺が何をしてるのかより、三郎も自分のことを考えたほうがいいんじゃないか？」
「自分のこと――？」
「九郎のあのバカは、たぶん、治りゃしない。九郎と一緒に朽ち果てるか、それとも――」
鬼王は、わざと言葉をぼかし、にっこりと笑った。

☆

葵の膝の上に、文がある。
兄から届けられたその文は、鎌倉での九郎の評判の悪さを、包み隠さず教えてくれている。
《とにかく、こちらに帰って来い。御所さまのお許しは出ているから》

心配げに語りかけてくる、なつかしい兄の文字。
《父上も心配している。だから早く、帰っておいで》
そう続く言葉に、大好きな父の顔を思い出し、胸をふさがれるほどの恋しさが湧く。
「私、河越庄へ帰ろうと思います」
さっきは、そう言うつもりで九郎を訪ねたのだ。
ここに、葵の居場所はない。居続ける意味もない。
（だったら、お父さまのところへ帰りたい……）
でも、言えなかった。話を聞いてももらえなかった。
その後も、何やら忙しくしているらしい彼を捕まえることが出来ないまま。
数日の、のち。

堀河夜討

「鎌倉から、刺客が送られてくる」

と、そう言ったのは鬼王だった。

九郎と、行家と、伊勢三郎ら九郎の腹心数人と——それだけが集まった、深夜であった。

鬼王はさらに、敵が襲撃してくるその日時、刻限まで、皆の前に披露してみせた。

「ついに来るか」

九郎は、興奮を宿した目をぎらりと回し、短く言った。

彼は、鬼王がもたらす情報には絶対の信用を置いている。この弟分が鎌倉へ行くのも、公家邸をうろつくのも、すべて自分のための諜報活動であると信じて疑わない。

「いいところに刺客を送ってくれたものだな」

行家が言った。

「頼朝が我らを襲ったとなれば、院宣を出させるいい理由になるわい」

葵にかまう暇もないほど忙しくしていた九郎は、何度も後白河法皇のもとへ通い、頼朝追討

の院宣を要求していたのだ。が、頼朝の力を恐れる法皇は、簡単には言うことをきかない。何かいい手だてはないものか——と、思案を始めようとしていた矢先だった。

「大騒ぎを起こすつもりはないようだから、それほど大きな軍勢じゃない」

「いかほどの？」

「六十余騎」

「たったそれだけか!?」

九郎は、いきなり笑い出した。

「たった六十余騎で、この九郎義経を討とうというのか！」

バカにした話だ——と、九郎は豪語する。

「返り討ちにしてくれるわ！」

皆、そう喚いては、ぎらぎらと闘志を燃え立たせる。

が、伊勢三郎だけが醒めていた。鬼王の様子を、じっと瞳に映し——身動きひとつ、せずにいる。

鬼王もそれに気づき、

——にやり……。

そんな嗤いを、三郎だけがわかるような秘密の仕草で送ってくる。

☆

奇襲のつもりでいたはずだ。

鬼王の言った通りの日、言った通りの時刻に、頼朝が送った刺客・土佐坊昌俊は、

（よもや漏れてはいまい）

と安心して、六条堀河の九郎邸に襲撃をかけたはず。

が、その彼を、なんと九郎が門前で迎え撃った。久しぶりの大暴れに血を騒がせた九郎は、おとなしく刺客を待つのなど苛立たしい——と、時刻になるやいなや、駆け出していたのである。

吠える声が、あたりを満たした。

白刃のきらめき。夜風に緋く染み出る血のにおい。鈍く、骨を切る音が響く。

九郎は、この襲撃にそなえて、まずは女たちを皆、べつの屋敷へ移しておいた。そして、ほとんどの家人も、理由を作って外へ出してしまっている。足手まといになるものは、いらない。

ところが、斬りむすぶ相手を求めて奥へと走り込んだときのことだ。後ろから袖口を、つ……と引かれ、九郎は振り返るより早く、ひらりと刀を回していた。

手応えは、あった。が、すかんとした感触でしかなかったところを見ると、腕あたりをかす

ったけのようである。

一瞬のうちにそれを見極め、九郎は舌打ちしつつ振り返った。正面から、とどめを刺すつもりだった。――が。

「……っ!?」

声にならない悲鳴をあげて、九郎は思わず、刀を取り落としそうになってしまった。振り向いた彼の目に映ったのは、くちびるを噛みしめつつ右肩を押さえる葵の姿だったのだ。

「……おまえっ！」

と、九郎は、まずは短く叫んだ。

「なんでこんなところにいる!?」

九郎の声が尖っている。当たり前だ、敵の動く気配を追うのに神経を追いつめていたところへ、いきなり飛び込んできた女の姿は、苛立たしいほど邪魔なものとしか思われない。

「熱があって、屋敷を出るのがつらかったものだから……」

なるほど、葵は、刀傷のせいだけではないらしいほど重い息を、ついている。

理由を伏せたまま、女たちを屋敷から出したのだ。まさか刺客の襲撃があるとは知らず、葵は、軽い気持ちで奥に隠れていたのだろう。

（責めるわけにもいくまい）

そうは思うが、それでも苛立たずにはいられない気持ちを、九郎は、ふ、と眉を寄せて隠

し、

「ずっと、ひとりでいたのか？」

「いいえ。静がついていてくれたのですけれど……」

「静が？」

「はい。でも、九郎がここへ来る少し前、三人の武者が踏み込んできて――」

静は、葵を几帳の陰に押し込むや、敵の目を引きつけるように、走り出して行ってしまったのだという。

「――ばかめっ！」

九郎は、吐き捨てるように呻いた。

「早く、追ってあげて。今ならまだ間に合うわ」

九郎は、ちらりと葵に目をくれたが、無言のまま葵の小袖に手を伸ばし、その袖をビリッと破いてしまった。何のつもりなのかと思えば、葵の傷に応急処置をしてくれる。

「片をつけたら、ちゃんと手当てしてやる。それまで、ここに――」

と言いかけ、少し考え込んだ。

「おまえをひとりにしておくのも危険だな。――よし、俺から離れるなよ？」

左手で葵の左腕を痛いくらいに握りしめ、もう一方の手で太刀を握り直している。

「私だったら大丈夫です。隠れてるわ。一緒にいたら足手まといになってしまうでしょ？」

が、九郎はニッと笑い、
「おまえひとり連れてるくらいで、この九郎義経が討たれてたまるか」
うそぶいた。

☆

わずかに時を戻して――。
鬼王丸である。
甲冑をつけず、太刀を持たず弓も持たず、そのくせ、あたりを濃く染める血の匂いから、ひらりひらりと上手に身をかわしつついる彼は、走り込んだ庭で静を拾った。
まずはビクッと足を止め、それから目を見張り、
「おまえ、こんなとこで何してるんだ!?」
その庭に震えながら身を潜め、隠れていた静である。鬼王の顔を見てホッとしたのか、涙まじりに声をあげ、
「何してるも何もないわよ！　これは何なの!?　どういうことなの!?」
「何――って、見りゃわかるだろ？　鎌倉から九郎を殺しに来た奴らだよ」
「聞いてない、聞いてないわよ、こんなの！」
「そうやって怖がるから、教えないまま屋敷を出してやったのに。おまえ、なんで残ってんだ

よ？」

「だって、葵さまがお熱を出されて、そういう時に動かすのは良くないし、だから……」

「――葵が？」

「そうよ。だから、ふたりで残ってたの。まさか、こんなことになるなんて思わなくて」

鬼王は、腰が抜けたように身体に力を入れられずにいる静に、右手を貸してやりながら、

「葵はどうした？」

静は、葵が九郎に言っていたのと同じ事情を話した。

「じゃあ、葵もひとりでいるんだな？」

「行ってあげてくれるの？」

鬼王は、無言で頷く。

「……そう」

静は、ホッとしたように笑った。

「おまえも一緒に来いよ？」

「あら、私が行ったらお邪魔じゃない？」

「ばか。おまえひとり、こんなとこに捨てておけるか」

貸してやった右手で、そのまま静を庇いながら、まだ終わりも見えないように続く凄惨の中を急いだ。

鬼王の手に導かれるまま、静は固く目を閉じている。生温(なまあたた)かい血の匂いを含んだ風が、夏のように重くよどんでいるのだ。そして、あちらこちらから、命が途切れるときの鈍い叫び声が聞こえているのだ。目を開けたら、きっと、見たくもないものばかりを見てしまうに決まっている。

ふたりは、とにかく葵のもとへ急いだ。

が、結局、それは徒労に終わってしまったようである。

鬼王が葵に声をかけようとした、まさにその瞬間。

彼女の前には、九郎が現れてしまった。彼女の手を、九郎が取っていってしまった。

鬼王の手は、むなしく宙に浮くばかりなのだった。

名残のときの……

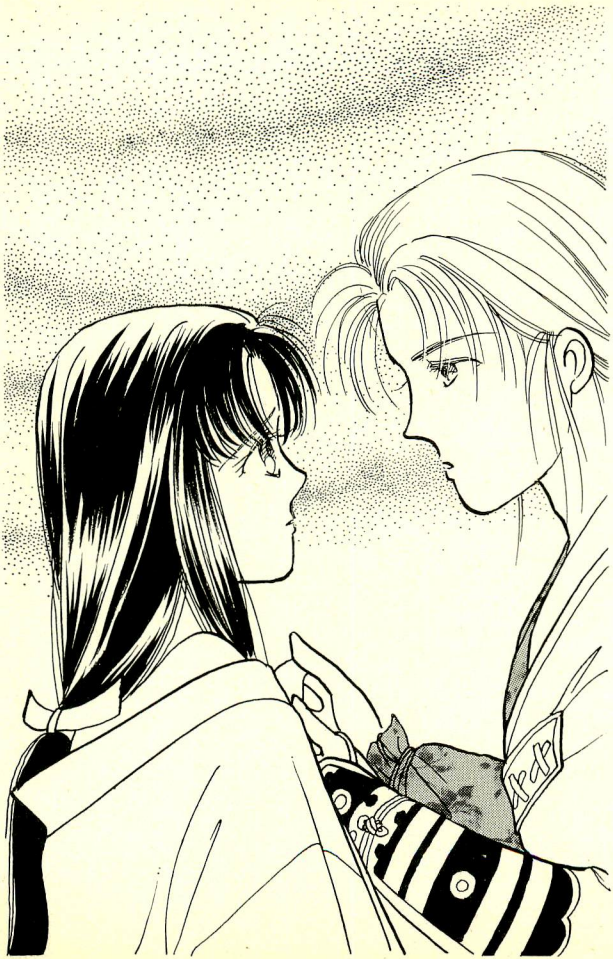
「私、河越庄へ帰ろうと思うんです」
九郎に手当てしてもらった右肩を、そっと押さえつつ、葵は言った。
早朝である。おびただしい血を呼んだ混乱も、すでに収まり、死体の後始末に駆け回る家人たちの声が、妙に陽気に聞こえている。
「……そうか、帰るか」
九郎は、ぽつりと呟く声で葵に答えた。それから笑い、
「俺も、そのほうがいいと思っていた」
やさしい微笑である。
が、葵の口許に浮かんだのは、複雑な沈黙だった。
「――どうした？」
彼女の沈黙を、九郎は、そっとのぞき込む。
「つらいのか？」

まだ下がらない熱のことを心配しているようだ。
「いいえ、そうじゃなくて――」
葵は、弱く首をふり、
「こんなに簡単に、さよなら出来ちゃっていいのかな――って思って」
寂しく笑う葵から、九郎は思わず目をそらした。
けれども葵は続ける。
「私、あなたに甘えていたの」
鬼王に会うために、初恋への後悔を清算するために、そのためだけに九郎の妻になることを承知した、葵。
じゃあ、そのあとは？　鬼王に気持ちを伝えた、そのあとは？
「鬼王を想った気持ちのまま、それでも、あなたの妻として生きていこうと思っていた」
だって九郎は、きっとそうしてくれる。葵の気持ちを思いやって。今まで、名ばかりの妻のまま置いてくれていたように。きっと、葵を正室の座に据えたまま、でも、夫としてではないやさしさを、注ぎ続けてくれるだろう。
九郎のそのやさしさを見込んで、甘えて、利用しようとして……。
「私、なんてずうずうしいんでしょう？」
かすかに歪むようなかたちに噛った葵の頬に、ぽつんと涙がひと粒、降った。

「俺は、一生、葵を甘えさせてやろうと思っていたが……」
「でもね、それってつらいわ」
九郎が平家の姫を迎えたとき、初めてわかった。不安になった。
一生を、名ばかりの妻のまま生きてゆくことの、たまらない情けなさ、口惜しさ。
だってそれは、自分という存在には、まるで意味がないということなのだ。
葵は、九郎の妻じゃない、この屋敷の女主人でもない、九郎の子の母にもなり得ない。
じゃあ、葵は誰？　何者？　いつか一生が果てるとき、いったい、この世に、どんな足跡を残してゆけるというの……？
「でも俺は、葵も鬼王も大切だから」
「鬼王のことは――」
葵は、なつかしい面影を、そっと胸に広げてみた。
でも。
それは、とても遠いのだ。そして、とてもかすかに、おぼろに、霞むだけの頼りなさ……。
「あの人のことは、忘れなくちゃいけなかったのよ。だって私、もう何年、鬼王に会っていないと思う？　十四のころに出会った、あれきりだから、もう四年――四年も顔を見ていないのよ？　終わったことは、忘れなくちゃいけなかった。そのほうが幸せになれた。……ばかみたい。むかぁしむかしの初恋を、もう干からびちゃった初恋を、それでも、ずっと抱きしめたま

までいたなんて、干からびてることにも気づかずにいたなんて」
「会っていない――か」
九郎が、ぼそりと呟いた。
「そうよ、会っていないもの」
「あいつ、今もこの屋敷にいるはずなのに」
九郎のその言葉に、葵の頬が、ぴくりと動いた。
「今も――この屋敷にいる？」
「ああ、いる」
九郎は、大きく頷いた。
「あいつは、今も俺のそばにいる」
「でも私、顔を見かけたことだって一度もないわ」
「静が、そのことを気にしていた。鬼王は、わざと葵を避けている――そう言って」
「わざと避けている――」
それは、どういう意味なのか。
葵になど興味もないから、避けているのか。昔、葵に追い回されたのが迷惑な思い出として甦り、もう会うのもごめんだ、と避けているのか。それとも彼も、すこしは葵を好いてくれていて、九郎の妻になったことを悲しく思い、避けているのか。

けれども九郎が言った。
「いや、鬼王は知ってる。葵が、本当は俺の妻じゃないこと。静が教えたと言っていた」
「……知っている」
それでも、顔を見せてくれないのか。ということは、やっぱり……。
葵の頬に、寂しい微笑が浮かんだ。
初恋が、終わった——。
これが欲しかったのだ。こんな〝終わり〟が欲しかったのだ。これを手に入れるために、葵は京都まで来たのだ。
それは、不思議な安堵感だった。悲しみの中で、それでもひとつの区切りを見つけ、なんだか、ほ……ッと肩から吐息が抜けてゆくような……。
「私、もったいないこと、しちゃったな」
「……ん？」
「だって、さっきの九郎、すごくカッコよかったもの」
混乱の中で九郎に助けられたそのあと、葵はずっと、彼の腕の中にいた。
そのまま一緒に、戦場になってしまった屋敷の中を駆けたのだ。
血を浴びた。命が切れる瞬間を見た。死体のうめき声を聞いた。でも、怖くなかった。
九郎のあたたかさが、すぐそこにあったから。この人が守ってくれる、だから安心していて



いい——理屈じゃなく、言葉じゃなく、彼の腕から葵の胸へと染みてくるやさしさが、そう信じさせてくれたから。

「私が今、頼れる人は——頼るべき人は、あなただったんだわ。……鬼王じゃなく」

それなのに、あの少年を求めて泣いた日々……。

ぽつり、頬にしずくが落ちた。

「私、ちゃんとあなたの妻になればよかった。そうしたら、こんな無駄な日々を過ごさなくて済んだのに。あなたの妻になることをちゃんと選んで、しっかり顔を上げて生きていけばよかった。そうしてね、あなたが鎌倉の御所さまに背いたからっていっても、あなたのことを選んでね、河越庄に帰るなんて言わないの。私は、お父さまよりも九郎を選ぶわ——って、笑って……そう言いたかった……」

葵は乱暴に頬の涙をぬぐった。笑おうと思った。でも出来なかった。

出来そこないの笑顔を、頬の内から噛みしめて、せめて涙だけでも止めようと思った。でも出来なかった。

喉の奥から嗚咽が洩れる。

葵は、わっと泣き伏した。

ひとしきり、泣いた。たまらない情けなさと口惜しさとを、吠える声に変えて泣いた。

やがて、髪に九郎の手のあたたかさを感じた。九郎は、ずっと葵の髪を撫でてくれていた。

葵が、泣きつかれて眠り込むまで。九郎のやさしさを、心の中にみんな吸い込んでしまうまで。ずっと――。

☆

「まだ遅くはないよなあ」
と、九郎は言う。
葵は、あのまま眠ってしまった。眠った彼女を乳姉妹たちに預け、彼は鬼王を捜したのだ。
鬼王は、旅支度を始めていたところだった。
「また行くのか？」
「行く」
「鎌倉へ？」
「いや、平泉へ」
「……平泉か。秀衡に会うのか？」
鬼王は、いまいましそうに眉を寄せ、
「会いたかねえけどな」
「向こうは楽しみにしているんだろうに」
「迷惑だ」

吐き捨てるように言い切った。
「それより葵は？　熱を出してるって静から聞いたけど」
「寝てる。――なんだ、やっぱりおまえ、葵のことが心配なんじゃないか」
九郎はにやりと笑ってやったが、鬼王は動揺の色も見せず、
「そりゃあ、熱を出したと聞けば心配するさ。知らないヤツじゃないんだから」
九郎は、ふと表情を止め、鬼王の顔を見つめた。
「――なんだよ？」
「いや……」
終わっているのだろうか？　この少年の中でも、葵への想いはもう終わってしまっているのだろうか？
そんな気がして、九郎は、さっきの葵の言葉を鬼王に話して聞かせたのだ。
そして言った。
「まだ遅くはないよなあ」
――と。
「そうだな、遅くはないよな」
鬼王も頷いた。けれど顔を伏せて笠の具合をみているから、その表情は九郎には見えない。
が、九郎は気にせず続けて、

「葵は、俺についてきてくれるかな？」
鬼王が、顔を上げた。これ以上はないというほど明るい笑いで、
「ま、せいぜい静を怒らせない程度に、仲よくやるんだな」

☆

鬼王は、九郎の屋敷をあとにした。
門を出たところで、そっと振り返る。何かを思うように瞳の色を揺らしたが、やがてそれを断ち切り、歩き出した。
ところが、それを追う人影がある。
「おい、鬼王！」
彼を呼び止めたのは、伊勢三郎。
鬼王は振り返りもせず、
「なに？」
「おまえ、どこへ行く？」
「平泉」
「里帰りか？」
「どうでもいいだろ？」

三郎は、しばらく鬼王に視線を当てたままでいたが、
「おまえ、戻ってくるのか？」
「俺が戻るまで、九郎が都にいられたらね」
鬼王は、ふふっと笑った。
それを受けて三郎は、
「もう戻ってくるな」
「なんで？」
三郎は鬼王に、たまらないほどの不信感を抱くようになっている。しかも、そうさせたのは鬼王自身だ。まるで彼を試すかのように、鬼王は三郎の前に、九郎の欠点を暴きたててみせたのだから。
そして同時に、三郎は迷っている。自分は九郎の、一の郎党だ。それを誇りにも自慢にも思っている。三郎は九郎が好きだ。あの、こどもみたいな一直線さが大好きなのだ。でも——。
このまま九郎に従っていて、いいのだろうか？
三郎の心に、いつのまにか迷いが生まれてしまっている。九郎に対して、今までとは違う頼りなさを見出すようになってしまってもいる。
が、彼はそれを見たくない。九郎を好きでいたい。そばにいてやりたい。今までのまま。
——だから。

「おまえは、もう戻ってくるな。おまえが近くにいると、俺の気持ちが狂う」
「狂ってるんじゃないさ、それで正常なんだよ。正常な目で見れば、九郎がやろうとしてることのほうが狂っている。それを見極めた上で、それでも三郎が九郎に従おうと言うのなら、俺は何も言わないさ。ただ、真実を見誤ったままでいると、みんなが不幸になる――俺は、それを言いたいだけだ」
三郎は、沈黙した。鬼王の言葉の真意を探ろうと、意識を彼に集中させた。
鬼王は、静かに三郎の視線を受け止めていたが、やがて、軽く息を吐き出した。にやりと笑い、三郎の探す〝真意〟を、瞳の色から散らしてしまった。もう見えない。
鬼王は言う。
「三郎の手下たちにも、このことを教えてやるんだな。そうしてみんな、自分の気持ちのままに動けばいい。九郎と一緒に落ちぶれるか、さっさと逃げて生き延びるか――」

星の軌跡

土佐坊昌俊らが九郎の屋敷を襲った翌日、ついに九郎に、頼朝追討の院宣が下った。

いとも簡単に刺客を蹴散らしてしまった九郎の軍事力を恐れ、

「院宣を出すことを渋ったなら、その仕返しに、都でどんな狼藉を働くかわからない。とにかく、あれの言うことをきいておこう」

後白河法皇は、そんな言葉で朝議をまとめたのだという。

同じ日、葵は九郎の妻になった。

「おまえは、まだ十八だ。河越庄に帰って、これからも、いくらでも違う幸せを探せる。それでも――いいのか？」

九郎の言葉に、葵は、ただただ頷いた。

愛なんて知らない。夫婦の意味も、男と女がふたりで暮らしてゆくことの意義も、葵はまだまだ何も知らない。だから知ろうと思う。九郎と一緒に知ってゆこうと思う。この人となら、知ってゆきたいと思う。

すべてがこの夜から始まるのだ——と、葵は思った。それは、確かに真実だった。

この日——十月十八日。

この日を境に、九郎の運命は急降下を始める。

☆

九郎と源行家に、頼朝追討の院宣が下った——その知らせを受けた頼朝は、けれど、髪ひとすじほどの動揺も見せはしなかったのだという。

都では、九郎と行家が、反頼朝勢力を集めて挙兵しようと画策している。例の院宣を掲げてみせて、

「鎌倉殿は朝敵だぞ！」

声も高らかに叫んでみせる。

が、結果は惨めなものだった。九郎のもとに馳せ参じる者は、ただのひとりもいなかったのだ。

頼朝は、その様子に一瞥を送っただけで、やはり何も言わなかった。そんなことなど初めからわかっていたさ、とでも言いたげな、冷ややかな目であった。

☆

「都を出る」

九郎が下した決断は、それだった。

鎌倉からの刺客を見事に蹴散らしてみせたのは、わずかに半月前のこと。それが、なぜ、こんなことになってしまったのか……。

さすがの呑気者も、散々にうちひしがれていた。

「都を出て、西国へ向かう」

頼朝は、確かに奥州以外の全地方を掌握してはいるが、まだまだ、東国から離れれば離れるほど、その支配の力は薄くなる。西へ向かえば我らを庇護してくれる者も見つかるはず——九郎は、皆にそう呼びかけた。

「西国へ行って、どうするのだ？」

そう言ったのは、伊勢三郎である。

「西国へ落ちて、そのあとどうしようというのだ？」

「再起をはかる」

「また頼朝を討つために起つのか？」

「ああ」

「なんのために？」

「なんのため……？」

九郎は、きょとんと三郎を見つめ返した。彼が何を訊こうとしているのか、それさえ理解できないでいるといった様子である。

三郎は苦笑し、

「いい、続けてくれ」

右手をひらひらと振る仕草で九郎を促した。

このまま九郎について行ってよいものか――三郎の迷いは、九郎が落ちぶれてしまった今、前よりも確かなものとして彼の胸にある。

（九郎と一緒に西国へ落ちるか、それとも――）

けれどまだ、三郎は決心をつけかねている。

☆

もちろん、葵も一緒に落ちるつもりでいる。

河越の父よりも九郎を選ぶ――それが、葵の決めた道である。

が、旅支度を急ぐ葵に、九郎は言った。

「おまえは連れて行かない」

葵は虚を衝かれたように手を止め、

「なぜですか？」

「なぜでも、連れて行かない」
「だって私は……」
あなたの妻です、どこまでも一緒に行くと決めたのです——そう訴える葵から目をそむけ、
「おまえの兄が、この間、鎌倉に出来た寺の落慶供養の参列者から除かれたことを知っているか？」
九郎が言ったその話を、葵は知らなかった。
「なぜ——」
葵は呟いたが、その理由は容易に想像できた。
昔、父が言っていたではないか。御所さまが九郎をそばから退けるようなことがあったとき、下手に縁を結んでしまっていた者は、どんなとばっちりを受けるかわからない——と。葵の兄・河越小太郎重房は、九郎の縁者だということで、そんな処分を受けたのに違いない。
「私のせい……」
「いや、俺のせいだ」
「でも、私が素直に帰っていれば……」
葵は、自分の考えのなさにくちびるを噛む思いである。
「だから——」
と、九郎は続けた。

「だから、おまえは連れて行けない。これ以上、河越の家に迷惑はかけられない」
九郎は、後悔しているのだ。
（やはり、あのまま河越庄へ帰すべきだった。そうしていれば、おまえを、こんなめに遇わせずにすんだのに……！）
それでも葵は頷かなかった。
「私は行きます」
「ばかを言うな！　鎌倉の父や兄弟たちが、どんな処分を受けるかわからないんだぞ!?」
「それは、わかっています。実家のみんなの立場が悪くなるだろうことは、それはちゃんとわかってる。でも九郎、忘れたの？　私の祖母も母も、源家の乳母を務めた女よ。私たちは、御所さまにとって特別な一族なの。いくらなんでも、最悪の事態にはならないはず、お仕置きにも、きっと手心が加えられるはず。お父さまには、葵という娘がいたことは忘れてもらう。いつか、必ずわかってもらう」
「そんなにしてまで――」
どうして俺について来る？
九郎は、訊ねたかった。
ほんのわずかの間に、葵は変わった。九郎を見る目が真っすぐになった。あたたかくなった。まるで花が咲くように、ふうわりと艶やかに開いた葵の色――。

それは、九郎のためなのだという。九郎と生きてゆくために、九郎と生きてゆきたいから、葵はその色を開いたのだという。

けれど、九郎には出来ない。葵を連れて行くことは、やっぱり出来ない。

九郎は、さすがに身に沁みはじめている。頼朝は、それほど甘くない。葵のようには、河越家の人々の運命を楽観的に予想できない。

「だから、おまえは連れて行けない」

最後まで、九郎は葵を突き放した。

☆

京都は混乱の中にある。

九郎義経が、いよいよ都落ちをするというのだ。

「いったい、どんな恐ろしいことになるやら……」

「今のうちに逃げ出したほうがいい」

市民の中には、そう言って、すたこら京都を出てゆく者もある。

というのも、これまでに京都を制圧し、けれども結局は落ちていった者たち——平家も、そして木曾義仲も、退却の際には必ず、京の町に火をかけていったのだ。

「我らの栄華は我らの手で焼き払う、敵の手にそのままを渡してなるものか」

それは、彼らなりの美学であった。
だから九郎も何をしでかすかわからない——京都市民も公家たちも、恐怖したものだ。
が、九郎には、そんなつもりはまるでなかった。
九郎は京都が大好きなのだ。真っすぐな気性の彼は、こんなときにも、のびやかな愛情を京の町に向けている。
ただひとつの迷惑も残さず、九郎は、さらりと京から消えた。

☆

大物の浦——現在の兵庫県尼崎市、淀川の旧河口にあった船着場である。
この浜から、九郎は西国へ向けて船出するつもりだった。が、自然の脅威に、その行く手を阻まれた。乗り込む予定だった船が、嵐のために沈んでしまったのだ。
九郎は、呆然と真っ暗な空を見上げた。
「天は俺に味方をしていないのかなあ……」
ぽつんと落ちた呟きを、聞いていたのは伊勢三郎ひとりだった。
「これからどうする？」
訊ねた三郎に、
「……どうするかなあ？」

九郎はただ、弱く笑ってみせる。
三郎は、眉根を寄せるようにして目を細め、
「鬼王が言っていた通りになったな」
「――？」
「おまえが兵を挙げても、無駄だ、負ける――って」
「……鬼王が？」
「ああ。おまえを大ばか者よばわりしてな。九郎はあれがダメだ、これがダメだ――」
鬼王の言葉を、三郎はすべて九郎に伝えた。
「――鬼王が」
九郎は、彼の名を噛みしめるようにして黙り込んだ。
「おまえを裏切るつもりかな？　今も、いないよなあ、あいつ。平泉へ行くと言っていたが、さて、本当のところはどうなんだか」
とは言いながらも、細められたままの目を、三郎は、やさしく微笑ませつつ、
「でもな、俺は思うんだが――」

☆

そして、九郎主従は離散した。

「兄上に向けて弓を引く気は、もうない。兵は挙げない」

九郎が、はっきりと宣言したからだ。

けれども正直なところ、九郎には、まだよくわからない。

（俺が悪かったのか？　ばかだったのか？）

兄の、そして鎌倉武士たちの意向は、よくわかった。鬼王が言ったのだという言葉を、噛みしめ噛みしめ考えてみれば、さすがの九郎にも、わかった。納得はいった。

でも。

九郎ひとりが悪いのか？　彼が、源家の子であることを忘れ、一介の御家人に成り下がった顔で、誰にも逆らわず、兄の顔色を読み、鎌倉武士たちの顔色を読み、卑屈に――ただひたすら卑屈に、感情を押し殺して生きていればよかったのか？　こんなことにはならなかったというのか？

わからない。

自分が悪いことは、わかる。もっと他にしようがあったことは、わかる。

でも。

本当に、九郎ひとりが悪かったのか。

考えてみようとした。

けれども考えてゆくと、どうも他人のせいにして自分の責任をごまかしてしまいそうな気が

したので、やめた。
とにかく、兵は挙げない。
先のことはまだ考えられないけれど、自分が今、すべきなのは、兄と戦うことではない。そのことだけは、わかったから。
そして、九郎主従は離散したのだ。
結局、九郎の身近に残ったのは、静をはじめとしたわずかな人数だけだった。
三郎は、いない。
「俺は、もう、おまえと一緒には行かない」
彼は、はっきりと言ったのだ。
「おまえを気に入ってることは今も変わりないが、おまえの運命にまで付き合ってゆける自信はない」
九郎は笑った。笑って頷いた。
九郎と頼朝とでは、器が違う——鬼王の言葉が、妙に身に沁みて痛かった。
「だが——」
けれども九郎は笑う。
「まあ、なんとかなるさ」
久しぶりに、その言葉が出た。

三郎も、それを聞くと、九郎に合わせた顔で笑い、少しの苦みもない別れの言葉を残して行ったのだけれど。

伊勢三郎は、翌年、鎌倉方に捕らえられ、殺されている。

慕情の雪

京都にひとり残された葵は。
旅姿に身をあらため、けれども降り出した雪の冷たさに出端をくじかれた思いでいる。
「まあ、この雪では……」
「きびしい旅になりそうですわね」
空を覆う鈍色を見上げつつ、小夏も千鳥も、瞳の色を翳らせてみせた。
旧暦の十一月——今でいうなら十二月から一月の、極寒のころである。この中を、わずかばかりの人数で遠い旅に出ようというのだ。
それは、河越へ帰るための旅ではなく、葵を置いて行った九郎を、それでも追いかけてゆくための旅であった。
が、いよいよ屋敷を出ようというそのとき、葵は、大物の浦での出来事を聞いた。
「船が沈んで、皆が散り散りに……？」
「はい。九郎の殿に従う者は、静どのをはじめとしたわずか四人」

「四人で、どちらへ……？」
「はあ？　吉野へ行かれたとも聞きますが……」
全身を雪に染め、縁の下に礼を取るこの男が誰なのか、葵は知らない。屋敷の中では、ついぞ見ることのなかった顔である。
「御方さまは、これから……？」
「殿を追ってゆくつもりでいましたが」
葵の言葉に、男は不思議な表情を見せた。くちびるの端に、微笑のような嘲笑のような——どちらと受け取るにも躊躇のいるものを滲ませたのである。
「御方さまは、ご存じないのですかな？」
「……なにを？」
「鎌倉の頼朝に、源義経・源行家追討の院宣が下ったことを」
「なんですって!?」
その頼朝を追討する命令こそが、九郎に下っていたはずである。ひと月も経たないうちに、こうも簡単に、立場が逆転してしまうとは——！
「そのご様子では、こちらの知らせも御方さまのお耳に届いてはおりますまい」
男は、ひと呼吸を置いて、
「先日、河越太郎重頼どの——御方さまのお父ぎみが、所領を召し上げられた上、ご自害なさ

れました」

葵のくちびるに、咄嗟に言葉は浮かばなかった。まずは、男の言葉の意味を呑み込めずにいる。

河越重頼が――父が、死んだ……？

頭の芯が、ぐらりと揺れた。ふと気づくと、葵は縁に崩れていた。

「九郎どのの縁者ということで――ま、当然の処置ですな」

男は、抑揚のない声で言った。

「……まさか……そんな……」

「いくら何でも殺されることはあるまい――と、御方さまは楽観しておられたようですが、頼朝は、それほど甘くはありません」

「私が……私が素直に帰っていたならば……私のせいで、お父さまは……」

縁に崩れたままの葵のからだが、小刻みにふるえた。背後で千鳥が、たまりかねたように泣き出した。

「それでも御方さまは、殿さまを追ってゆかれるのですか!?　私は、いやです！　帰りましょう！　河越に――もう私は帰りたい！」

と泣き叫ぶ妹のからだを、小夏が走り寄り支えたが、その彼女も、涙をためた目で葵を見つめてくる。

「おまえも――帰りたいの？」
訊ねた葵に、小夏は静かに頷いてみせた。
「京都へ来てから、ひとつもいいことなんてありませんでしたもの。いじめられて、のけ者にされて、あげくの果てがこれですよ？　もう充分です」
「――そう」
葵はくちびるの端で微笑み、
「でも、私は帰りません」
「……御方さま？」
「帰れないの」
葵の目に涙はなかった。――いや、潤むきらめきは見えるのだが、彼女は必死にそれをこらえている。
「私は決めたんです、お父さまより九郎を選ぶと――」
「でも、その結果、河越のお館さまは殺されたんですよ!?」
涙まじりに千鳥が叫ぶ。
「わかってるわ。私が考えなしだったから……甘かったから……」
葵は、千鳥をなだめるように、
「でもね、最初からわかっていたら、どうだったろう？　鎌倉の御所さまが、私が帰らなかっ

たことへのお仕置きにお父さまを殺してしまうかもしれないと、最初からわかっていたら——？　それでも私、同じことをしたような気がする。河越へは帰らずに、九郎を追ってゆくような気がする」

そこで一度、言葉を切り、

「子供がいるの」

と、葵は笑った。

「私の中にね、九郎の子がいるのよ」

「御方さま、それをいつ……」

自覚したのか？　と、小夏は訊ねたいらしい。が、葵は答えず、つ、と雪空を仰ぎ、

「お父さまが亡くなられたのは、私のせいかもしれない。親不孝な娘だって後ろ指を差す人がいるかもしれない。……仕方ないね、本当のことだものね。でも私、耐えてみせるわ。自分で決めたことですもの。悔やみたくはない。だって、悔やんでしまったら、引き返してしまったら、お父さまの死は本当に無駄なものでしかなくなってしまうでしょう？　私に出来るお父さまへのつぐないは、前を向いて生きてゆくこと。九郎と、この子と、仲よく生き抜いてみせること。——私、間違っているかな？」

ふたたび小夏・千鳥姉妹を振り向いた目は、やっぱり笑っている。けれど、ついにこらえきれなくなった涙が、すうっと尾を引き、頬を流れた。

小夏も千鳥も何も言えず、ただ、そっと目を伏せた。
やがて、縁に控えたままいる男が進み出て、
「では、九郎どのを追ってゆかれるのですね？」
「はい」
頷く葵に、男は満足げな微笑をみせたあと、
「それはよかった。わたしは、御方さまを平泉までお送り申し上げるよう言いつかってまいりましたので」
「……平泉へ？」
「はい。九郎どのの行く先は、平泉の他にはありません。どこを彷徨われようと、最後に辿り着くのは平泉の地」
「おまえは――」
葵は、男をじっと見つめた。
「おまえは、いったい誰なのです？　誰に頼まれて、私を連れに来たのです？」
男は、ふわりと笑い、
「わたしは平泉の商人で、弥太郎と申します。都と平泉とを、商いをしながら行き来している者で――」
「平泉の商人……？　では、私のことをおまえに頼んだのは、九郎ですか？」

「いいえ」

男は――弥太郎は、はっきりと首をふり、

「わたしに、御方さまを平泉までお送り申し上げるよう言いつけられたのは、鬼王丸さまと申されるお方です」

「鬼王――ですって!?」

驚く葵は、気づいていない。葵がこの男に会うのは、実はこれが初めてのことではないのだ。昔――まだ九郎が鎌倉にいたころ、葵はこの男と砂浜ですれ違っている。

鬼王と鎌倉で接触していた、あの男である。

うらはら

それからのち、一年あまり――。

九郎義経は、歴史の表舞台から姿を消している。

やがて奥州入りするまで京都周辺に身をひそめ、けれど時々、ひょいと顔を見せたりもするのだが、あわてて伸びる追捕の手を、もちろん、ひらりとかわしてみせる。おとながこどもをからかうような、まるで一方的な鬼ごっこである。

ところが頼朝も負けてはおらず、この義経事件を徹底的に利用して（九郎に頼朝追討の院宣を下したことなどを切り札に朝廷を脅して）、公家政権にやかましく干渉するやら、守護・地頭の設置を認めさせて地方支配を強固にするやら、鎌倉幕府の基礎固めに忙しくしている。

さて、文治二（一一八六）年が過ぎ、文治三年――。

鎌倉に、聖弘という奈良・興福寺の僧が捕らわれている。

☆

その聖弘は、九郎の祈禱師で、いっとき、九郎を匿ったことがあるというので、詮議のために連れてこられたのだ。

頼朝との対面があった。

が、頼朝は、そのあと妙な顔で黙り込み、奥の部屋にこもってしまった。誰ひとりそばには寄せず、側近・中原広元の呼び声も聞こえない顔で、ごろりと仰向けに転がり、目を閉じている。

実は先ほどの対面で、聖弘に、

（痛いところをつかれた）

のである。

「九郎どのとお話し合いをなされよ」

と、聖弘は言った。

「あなたと九郎どのとの間に足りないものは、言葉です。あなたが九郎どのになされた仕打ち——あれは確かに、九郎どのがヘソを曲げられても仕方がないほどのものでした。ですが、あなたにはあなたなりに、理由があってのことと思います。それをなぜ、九郎どのに伝えないのです？　鎌倉殿という立場から離れて、兄としての言葉で、九郎どのにあなたの真意を伝えていたならば、あるいは——」

兄弟の仲違いなど生まれなかったではないか——実に真摯なまなざしで、聖弘は言ったの

だ。

（痛いところをつかれた……）

くちびるの端に皮肉げな笑いが浮かんだそのとき、頼朝は、ふと人の気配を感じ、閉じていた目を開いた。

身じろぎはしていない。ごろりと転がった、だらしなさのままである。そのまま頼朝は首を回し、

「――おまえか」

知らぬ間に部屋の中にまで入り込んでいた影に、笑ってみせた。

その頼朝に、

「なに不貞腐れてんだよ？」

にやり、笑いを返すのは、あの鬼王丸なのである。

「不貞腐れてなどいないさ。疲れたから休んでいるだけだ」

頼朝は、転がったまま、半身を起こそうとすらしない。

「さっきの聖弘の話は、面白かったな」

鬼王も気軽に、頼朝の横に腰を落とした。頼朝とは馴染みきった様子である。

「……面白かったか？」

「あんたの顔色が変わってくのを見てるのが、すげぇ面白かった」

頼朝は、不機嫌そうに瞳を歪め、
「あの坊主、勝手なことばかり言いやがって」
「でも、図星だったもんなあ、みんな。あんたがもっと、いろんなこと、九郎に手取り足取り教えてやっていたなら……」
それは、頼朝自身、ここのところずっと後悔していたことではある。
九郎の身が、今、こうなってしまったのは、彼ひとりの責任ではない——と、頼朝個人はそう思っている。
「わたしの言葉が足りなかったのもいけなかった」
頼朝は、すべてを態度で示していたのだ。
大工の馬事件も、任官事件のときに激怒してみせたのも、九郎に、鎌倉での自分の立場をわからせるためのパフォーマンスだったのだけれど。
「あれは、言葉で言ってやらなければ、ものがわからん人種だったのだなあ」
「あんた、そういう人間がいるなんて、知らなかったんだろ？　あんた自身、頭いいし、あんたの周りにいる連中も、なんか、みんな頭のキレのいい奴らばかりだもんなあ。——だから、こんな革命を思いついて、しかも成功させちゃったんだろうけれどさ」
「……よく、わからん」
頼朝は、ぽつんと言った。

「わたしには、今でもまだ、あれのことがよくわからん」
「仕方ないじゃないの？　大人になるまで一度も会ったことなんてない異母弟だし」
「そういう意味の〝わからない〟ではなくて……。初めて会ったときは、本当に嬉しかったんだがなあ。身内が来てくれて、本当に嬉しかったんだが。どんどん、わからなくなった。何がと訊かれても困るんだが、あれがどういう人間なのか、どう扱ってやればいいものか、どんどん……」
　実際のところ、九郎を悲劇の淵へと追い込んでいったものは、なんだったのだろう？
　それは。
　九郎の中に奇妙な具合に混在する、旧さと新しさではなかったか？
　武士が朝廷から独立するなど夢にも思いつかず、ただただ朝廷を敬い続ける――政治的な目の旧さ。
　かと思えば、鎌倉の武士たちが誰もついて来れないほどの戦法を次々と生み出してゆく――軍略の新しさ。
「ばかかと思えば賢い。ところが、賢いかと思えばばかのようで……」
　頼朝たちの目には、九郎は、そんな、なんとも摑みどころのない人間に映ったことだろう。
　そして、そういった人間を相手にするときの戸惑いは、やがて、苛立ちに変わる。その苛立ちが、やがて嫌悪感を呼び――。

九郎に言葉をかけてやれた人間は、なにも頼朝ひとりではなかったはずだ。他の誰でもよかったはずだ。

けれど、それも、いなかった。

たぶん、誰にも九郎がわからなかったのだ。

誰のせいでもない。誰の悪意も、そこには存在していない。だからこその悲劇――。

「九郎は、源家の子として生まれてきたのが間違いだったのではないかな？」

頼朝は、ぽつりと言った。

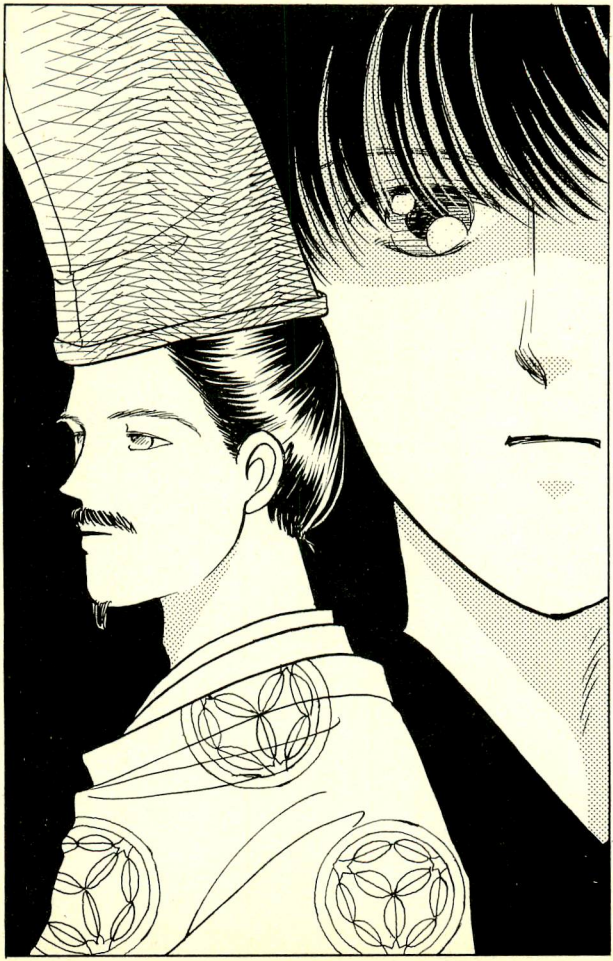
「源家の子としてではなく、地方の豪族の子としてでも生まれていたならば、政治的に重要な立場に置かれることもなく、ただ戦場においてのみ、のびのびとあの才能を伸ばし――いや、これからは、それだけでは豪族の子も困るな。これからは、戦のない世になるのだから、わたしたちが目指すものは、それだからなあ。つまりは、九郎が生きられる世ではないということか」

ふふ……っと、頼朝の肩に微笑が滲んだ。

春の陽気が、ふたりの間をとろとろと流れる。桜もそろそろ終わりかけ、奇妙なほど平和なぬくもりが、眠気に似たのどかさを連れてくるような――そんな午後である。

やがて頼朝が、あたりののどかさを引きずった呑気さで、

「おまえはなぜ、わたしのところに来る？」



問われた鬼王は、けれど、頼朝を振り向きもしない。そして答えも返らない。

「はじめ、おまえがわたしの前に姿を見せたとき、九郎を助けてわたしを討つために、そのための情報収集に、おまえは動いているのだと思った」

鬼王が頼朝の前に現れたのは、あのころ——九郎が頼朝に腰越状を送った、あのころ。

つまり、ちょうど九郎が、勝手なことを始めたころだったのだ。頼朝がそう思ったのも無理はない。

ところが、それにしては、

「おまえ、九郎の弟分だということを、最初からわたしに明かしていたよなあ？　そのくせ、涼しい顔をしてこちらの情報を持って向こうに行くし、そうかと思うと、向こうの情報をこちらに入れてもくれるし……」

鬼王は、実に奇妙な行動を取り続けていたのだった。

「だからその次には、おまえは九郎を裏切るつもりなんだろうと思った」

鬼王の顔が、ふと頼朝に向けられた。その頬は、笑っている。頼朝をからかうように、そして試すように。

「だが、おまえはやっぱり——」

「やっぱり？」

頼朝は答えず、ただ、瞳の芯を歪める。それから、思い切るように鬼王から目をそらし、

「あの聖弘という僧は、うちの寺にもらうかな」
「許すの、あれを？」
「許すも許さないも――」
頼朝は、ふっとやさしげに笑い、
「あれは、ひとつも間違ったことを言ってない。皆、真実だった。それも、誰もこのわたしには面と向かって言ってくれなかったこと――」
「ああいうこと、言って欲しかったの？」
「もっと早く、誰かがああ言ってくれていたら、もしかしたらわたしは、九郎を切り捨てようなどとは思わなかったかもしれないな」
「そうしたら、九郎は死なずにすんだ？」
「……死ぬ？」
頼朝の眉が、ぴくりと動いた。
「あんたは九郎を殺そうとしているんでしょう？」
「申し訳ないが」
頼朝の瞳から、やさしげな色が、はらりと落ちて、
「わたしはもう、九郎の生き死にのことになど、こだわってはいないよ。わたしが九郎の後ろに見ているものは――」

「奥州？」
「そうだ」
「奥州を手に入れるために、九郎はもう、あんたにとって、そのために利用価値のある存在でしかないの？」
「ない」
頼朝は、はっきりと言い切った。
「……ふうん」
鬼王は、ふたたび唸り、視線を落とした。けれどもすぐにそれを上げ、
「じゃあ俺、そろそろ行くわ」
「どこへ？」
「平泉へ帰る」
「……平泉か。わたしは、おまえの素性になど、べつに興味もないが――」
頼朝は、わざとらしく重々しい間を取って、
「おまえが誰なのかは知っているよ」
立ち上がりかけていた鬼王の動きが止まった。が、だからといって彼の目に動揺はない。
「それで？」
頼朝を向いた鬼王の目は、いやらしいほどの余裕を含んだ笑いを宿している。

「べつに？」

頼朝のほうも、よく似た笑いでそれに応える。

「おまえが平泉に帰るというのは、つまり九郎が無事、平泉入りしたということだろうから、おまえに会うことは、きっと二度とあるまいな？」

「わかってるね、あんた」

そう言ったころにはもう、鬼王は遣戸に手をかけていたのだが、その背中をまぶしいものに見つめながら、頼朝が呟いた。

「わたしは、おまえがうらやましいよ。なにものに縛られることもなく、なにを犠牲にすることもなく、ただ自分の心のままに生きてゆけるおまえが」

鬼王は、振り向かないまま頼朝の言葉を受け取った。

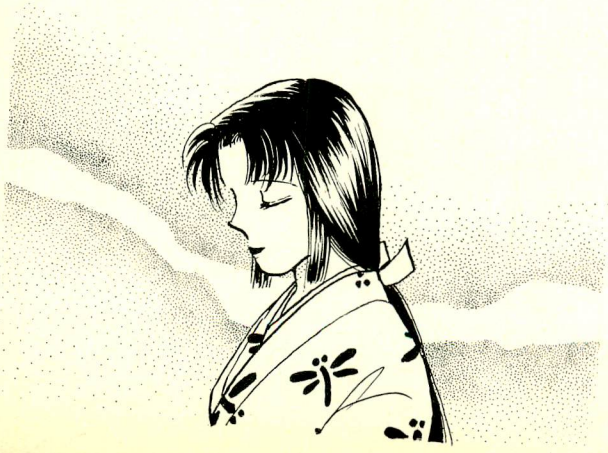
「おまえのような立場にあったなら、わたしだって――」

そのあと、頼朝は声を濁してしまったが、続けられるはずだった言葉の中で彼は、武家政権の首長として生きることを選んでしまった公の身の自分と、生まれたときから変わらず生き続ける私の身の自分と、その間に生まれる様々な葛藤を、嘆いてみせたかったのかもしれない。

第四章

文治五（一一八九）年・平泉

《時のきざはし》



北天

「おかえりなさい」
と、葵が笑った。
文治三（一一八七）年、春、平泉。
源九郎義経は、旅姿をゆるめる間もなく、瞳をぽかりと驚きに染め、
「おまえ……なぜ、ここにいる？」
京都に置いてきたはずの妻・葵と、彼女が抱いた見知らぬ童女と――七年ぶりにこの地に戻ってきた九郎を出迎えてくれたのは、懐かしい藤原一族の誰でもなく、そのふたりだったのだ。
「なぜって――」
葵が言いかけたとき、彼女の腕の中の童女が身じろぎをした。かと思うと、そのちいさな手を、九郎に向けて懸命に伸ばしてくる。
九郎は、思わず童女を抱き取っていた。

「これは、おまえの子か？」
「そうよ」
「おまえと――誰の子だ？」
「あなた以外の人の子を、私が産むわけはないでしょう？」
葵は、やわらかく微笑する。
「……そうか。俺の子か」
「まだ名前は付けていないの。あなたに付けてもらおうと思って」
「……そうか」
抱きしめた童女の髪から、ほんのりと甘い匂いがのぼる。
「……俺の子か」
呟きつつ、九郎は、平泉へ辿りつく前、京都周辺で耳にした噂話を思い出していた。静も、鎌倉で九郎の子を産んだ――という話を。
それは男の子で、けれども生まれてすぐに殺され、由比ヶ浜に棄てられたのだという。

☆

童女は、愛寿と名付けられた。
愛寿は、ふたつ。歩き始めたばかりで、まだおしゃべりも覚えていない赤児だが、とにかく

元気がいい。ちょっとでも目を離すと、ひとりでどこへでも出かけてしまう。

ある日のこと、葵が厨（台所）の様子を見に行っているうちに、また、彼女の姿が見えなくなった。九郎と一緒なのだろうと思っていたが、やがて、九郎はひとりで帰ってきた。

「愛寿は？」

「知らないぞ？」

「あなた、どこに行っていたの？」

「衣川に、釣り」

九郎は、呑気に釣り竿をかざしてみせる。

「じゃあ愛寿は？」

「だから、知らん」

「……まただわ」

葵は、肩にどっと重いものを感じてため息をついた。

愛寿は、ひとりのお散歩が大好きらしい。が、誰もが彼女を〝衣河館〟（九郎たちの住む館）の姫さま〟だと知っているので、どこへ行っても誰彼が面倒を見てくれ、危ないことには一応、ならずにすむ。

「ま、そのうち誰かに連れられて帰ってくるだろうよ」

九郎は、どうも大漁だったらしく、ご機嫌で行ってしまったが、

「ああいういいかげんで済んじゃうから、いいわよねえ、父親は」

葵は、後ろ姿の九郎を軽く睨みつけてやったあと、愛寿を探しに、ひとりで館を出た。

昔ならば、こんな時には乳姉妹の小夏や千鳥を迎えに行かせるところだったろう。けれども彼女たちは、平泉に向かう葵とは別れ、河越庄に帰っていった。

（小夏たち、どうしているかな？）

ふと、懐かしい顔が胸に滲んだ。

その懐かしさは、一瞬のうちに心細い涙に変わり――けれども葵は、雫が降るよりも先にそれを散らし、愛寿の行きそうな所はどこだったかと、考えをめぐらせた。

（この間、九郎と見に行った桔梗の花が、たいそう、お気に入りだったそうだから――）

館から下っていった山の中にでもいるのだろう。

見当をつけて、九郎から聞いていたあたりに分け入ってみると、いた。思った通り、桔梗の花に見とれた顔でご満悦の愛寿がいた。

ところが、

「姫――」

と、声をかけようとしたとき、葵は、愛寿がひとりでないことに気がついた。

彼女の横に、彼女を守るようにして立つ青年がいる。きっと、愛寿がひとりで歩いているのを見つけて、相手をしてくれている誰かなのだろう。そう思い、葵は彼に近づいた。お礼を言

い、愛寿を引き取るつもりだった。

が――。

葵の足が、ふと止まった。

それは、懐かしい人だった。

おぼろげな記憶、おぼろげな面影、おぼろげな想い――。

葵は、その人の名を、そっと呼んでみた。

「……鬼王？」

彼は、ゆっくりと顔を上げた。

☆

特別、何も話さなかった。

彼は、特に驚いたような素ぶりを見せはしなかったし、葵のほうは、驚きが大きすぎて声を出すことも出来ずにいたから。

ただ、愛寿が妙に彼になついていた。もともと、人なつこい子ではあるが、それにしては異常なくらい、彼のことを気に入ったようだ。

彼は、館まで愛寿を抱いてついてきてくれた。別れるとき、愛寿が泣いて駄々をこね、そのとき、

「また、遊んでやるよ」
せつないほどにやさしい目をしてそう言ったのが、ただひとつの言葉だった。
さよならも言わずに見送った。
すると、その様子を聞きつけて顔を見せた侍女のひとりが、
「まあ、あれは、御所の幸衡さまじゃありませんか」
大きく伸びをしながら、遠ざかってゆく彼の背中をうかがっている。
「御所の幸衡さま――？」
「ええ。お館さま（藤原秀衡）のご長男、国衡さまのお子さまで――」
と、侍女は言いかけたが、急に何か不都合を思い出したようで、わざとらしく口を閉ざし、行ってしまった。
不都合――というのは、昔、鬼王が葵に話していた。複雑な生い立ちのことなのだろう。
「藤原幸衡……」
葵がその名前を呟いた瞬間、もう鬼王丸ではなくなってしまったらしい彼の背中は、枯れた秋景色の中にまぎれて消えた。

おぼろの夢

この地、奥州平泉は、約百年の昔から、藤原一族によって治められてきた。

一族の祖・藤原清衡から数えて、今は三代目の当主・秀衡の時代である。

が、現在、平泉の政情は、綱渡りの状態に差しかかりつつあった。

「藤原秀衡は、九郎義経を匿って、謀反を企んでいるに違いない」

九郎が平泉に逃げ込んだことを知った鎌倉の頼朝が、待ってましたとばかりに疑いの目を向けてきたのである。

とはいえ、老練な秀衡の政治力と、その存在の重さには、さすがの頼朝もまだかなわず、いいようにあしらわれる日々が続いていたのだけれど。

ある日、秀衡が病に倒れた。

こんな時に——と、皆もさすがに、広がる不安を隠せずにいる、その中。

鬼王——幸衡は、祖父である秀衡を見舞うため、秀衡の住む伽羅御所を訪ねた。

実のところ、秀衡の病状は、かなり危ない。跡継ぎの泰衡さえ近づくことを許されずにいる

ほどなのだ。
ところが、ある日、幸衡ひとりが呼ばれた。
それが気に入らないらしい泰衡は、わざわざ病室の前で幸衡を待ち伏せ、
「のこのこと、何をしに来た？」
「ジジイに呼ばれて来ただけだ」
「――ふん」
ひと睨みを、くれる。
幸衡としては迷惑な話である。べつに、会いたくて来たわけではないのだから。
とりあえず、病室へ招き入れられた。
が、秀衡は口も動かせないような状態だし、幸衡は幸衡で、ぶすりと押し黙ったまま、不思議に重い沈黙が続いた。
やがて、秀衡の妻・香子が、控えめにくちびるを開き、
「幸衡どの、祖父上さまに何かお言葉を」
幸衡は、香子の声に応えるように目を上げたが、それだけだった。何も言わない。
この香子というのは、秀衡の、歳の離れた後妻である。幸衡の父・国衡は先妻の子なので、幸衡にとっては、血のつながらない祖母になる。
「幸衡どの――」

香子は、ふたたび幸衡の名を呼んだ。
が、名ばかりの祖母に気など許していない彼は、それには答えず、
「おまえ、死ぬのか？」
秀衡の瞳を真っすぐに見つめ、
「まだ早すぎる。ここへ帰ってくれば、しばらくは安心だと思っていたのに。……早すぎる」
と、呟いた。
そのとき。
秀衡の目が、ゆらりと動いたのだ。幸衡の視線を、はっきりと捕らえたのだ。
幸衡が子供だったころから、いつもいつも、彼に向けられ続けてきた、あの目である。乾いた、感情の見えない、けれど、はりつくようなしつこさで幸衡を追いかけてくる目……。
何を言いたいのかは、見えない。何を言うつもりもないのかもしれない。
幸衡は、しばらくその視線につきあっていたが、やがて振り切り、立ち上がる。
そのまま、さっさと病室から出ていこうとする彼を、それでも香子が追いかけてきた。
「幸衡どの、これを――」
と、香子が差し出したのは、なにやら文のようである。
幸衡は受け取ろうとしなかったが、
「祖父上さまのお言葉です。そなたを思われるがゆえのお言葉です。今日は、これを渡すた

め、祖父上さまはそなたをお呼びになったのです。よく読んで、祖父上さまのご意志に従われますように――」

香子は妙に熱心な目でそう言い、幸衡の手の中にその文を押しつけていってしまった。

（なんなんだよ、これは）

そのあたりに捨ててしまおうかと思った。

なにしろ、あの祖母も他の皆と同じに、鬼王丸だった昔の彼には少しの関心も示さなかった女なのだ。それが、あんな目をして、

（そなたを思われるがゆえのお言葉――だって？）

いったい、なんだというのだろう？

（ばかばかしい。ジジイの言葉なんか知るものか）

とは思ったが、それでもなんとなくためらわれ、幸衡は、その文を懐にしまった。

と、そのとき。

足首に、何か、やわらかく生あたたかいものが、ぺたりと触れた。

驚いて飛びすさりながら見ると、それは童女の手。愛寿である。

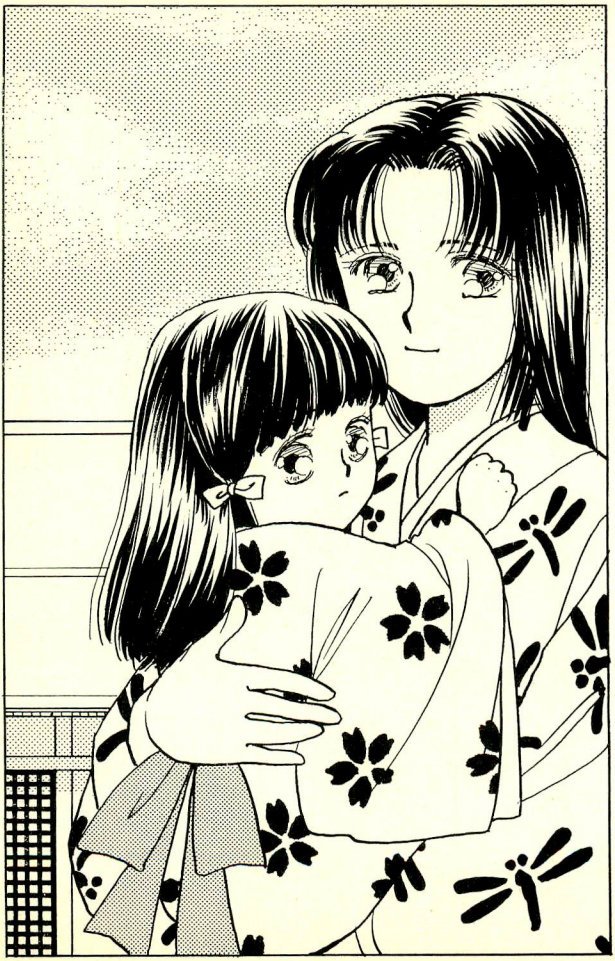
縁を這い伝って遊んでいたのが、見知った幸衡の顔を見つけ、嬉しくなっているところらしい。ちいさな両手を叩くようにして合わせ、からだ中を揺らしながら喜んでいる。

（これがいるということは――）

葵が来ているに違いない。
幸衡は、あたりへ視線をめぐらせた。
ほどなく、縁の向こうから葵が現れた。
葵は、まずは愛寿を抱き上げ、
「あなたに会いに来たのよ」
笑った頬のあたりが、少女のころよりもふっくらとして——。
会わずにいた六年の歳月を、幸衡は、そこに見たような気がした。

☆

幸衡は、葵を、伽羅御所のほど近くにある庭園へと誘った。
ふたりは、すぐには言葉を見つけられず、愛寿がころころと自然にまみれるのを見つめていたが、やがて葵が、
「あの弥太郎という人に、私を平泉まで送るよう頼んでくれたのは、あなたなんですってね？」
「……ああ」
「どうもありがとう。——って、お礼を言いたくて、今日は来たの。この間は、言いそびれてしまったから」



けれども幸衡は、面倒くさそうに眉を歪めただけで、特に答えを返したりはしなかった。
葵は気にせず、
「御所の幸衡さま――」
彼の現在の名前を、そっと呟いてみせた。それから、くすくすっと笑い、
「なんだか、あなたの名前じゃないみたい。立派になったのね」
「べつに。ジジイに無理やり元服させられただけだから」
「ジジイ？」
「藤原秀衡」
「お祖父さまのことね？」
「ただのジジイだよ」
「嫌いなの？」
「当たり前だろ？」
「こどものころ、やさしくしてくれなかったから？」
「今も変わらないよ」
「でも、元服するよう勧めてくれたんでしょ？」
「無理やりさせられただけだ。俺だって一応は藤原一族の人間だもの、それが二十歳にもなって元服もせず、ふらふらしてるようでは、カッコがつかないからだろ？　元服したからって一

人前に扱われているわけでもなし。昔と同じさ。はずれもんだよ、俺は」
吐き捨てるように言う幸衡の横顔を、葵はしばらく黙ったまま見つめていたが、やがて、ふ……っと頬に微笑を滲ませた。
「変わらないね、あなた、昔のままだわ。実は藤原一族の人だったなんて、びっくりしちゃったけど。あなた、私の知ってるあなたのままだわ。――ね、鬼王？」
と、懐かしい名前で彼を呼び、
「鎌倉で、よく遊んだわね。九郎の館で、それから由比ヶ浜でも。あのころ――」
葵は、水の色を淡く映した瞳を、そっと細めて、
「あのころ、私はあなたのことを好きだったのよ。気づいてた？」
幸衡は、答えない。
「気づいてなかったんでしょう、どうせ。あなた、素っ気なかったから。だから私、悲しくなって、河越庄に逃げ帰ったのよ」
葵は笑ってみせながら、足元に絡みついてきた愛寿を抱き上げた。
「不思議ね。あのころ、鎌倉で、私はあなたのことが大好きで、あなたに会うためだけに九郎の館に通っていて――。でも今、こうして九郎の子を抱いているの。あのひとを追いかけて、奥州にまで来てしまったの。……ほんとに不思議ね」
幸衡は、やはり何も言わなかった。

愛寿が、葵の胸に頬をこすりつけるようにして甘えながら、とろりとまぶたを閉じている。どうやら、はしゃぎすぎて眠くなったらしい。

「あらやだ。寝られちゃうと重いのよねえ」

よいしょ、と愛寿を抱え直し、

「また、この子と遊んでやってね。この子、あなたのことが大好きみたい」

その言葉には、幸衡も笑って頷き、

「送ろうか？」

「いい。ひとりで帰れるわ」

葵は愛寿の手を取ってさよならをさせ、けれど、そのあとでふと足を止める。

「あのね」

「――なに？」

「昔、京都で、九郎が平家の姫さまを正室に迎えるって言い出したとき、私、ひと晩中、眠れなかったことがあったの。朝になって外に出てみると、紫陽花のひと枝が縁にそっと置かれていて――。あれ、もしかしたら、あなただった？」

幸衡は、沈黙した。肯定も否定もせず、ただ、深い目で葵を見つめ返した。

葵は、そのまなざしに微笑を返し、

「あなた、京都で、ずっと私から逃げていたね？　どうして？」

と、訊ねはしたけれど。
別に、どうしても答えが欲しいわけではないのだ。もう、いい。すべて過去のことだから。
（ばかなことを聞いちゃったな）
と、葵は思った。
思いもかけず彼に再会できて、ちょっと懐かしい気持ちを思い出しただけのこと。
だから、微笑のまま、踵を返した。

兆し

秀衡が死んだのは、九郎が平泉に逃げ込んだ年の十一月末のことだ。

秀衡は、死にのぞみ、息子たちと九郎とを病床に揃えている。

話すことの出来ない秀衡は、かねてより用意していた遺書を、皆の前に披露させた。読み上げるのは、代理の側近である。

《長男・国衡に、我が妻（香子）を娶わせて泰衡に異心なしと起請文を書かせ、御曹司・九郎どのにも同じ起請文をしたためていただき、泰衡・国衡は、九郎どのを主君として仕え、三人、心を合わせて鎌倉の頼朝に立ち向かうように》

ざわめきが、湧いた。

息子に、自分の妻を娶らせる――。

が、ありえない結婚ではない。国衡（幸衡の父）は、秀衡の先妻の子。香子は後妻。ふたりの間に血のつながりはなく、年まわりも、香子が五歳年上なだけなのだ。

その香子は、元は奥州の国司だった貴族の娘。母の身分の上下がものをいうこの時代、だか

ら秀衡は、自分の跡継ぎに、長男である国衡を押し退け、次男の泰衡を据えた。
そんな事情である。
異母兄弟同士の家督争いが、まだまだ絶えないころだ。ほかの時ならまだしも、頼朝が平泉を狙っているこの非常時に、内輪の争いなど起こしていられる余裕はない。そんなことにならないように――と、秀衡は、泰衡と国衡とのつながりを強固にするための配慮をしたのだろう。
しかし、その遺言状が公開されるやいなや、
「なぜわざわざ、母上を異母兄上に、などと――!?」
叫び声をあげたのは、泰衡だった。
けれども秀衡がそれに答えられるわけはなく、香子も国衡も、ただ俯くばかりで泰衡の視線を避ける。
「……そうですか。では、あの噂は――」
泰衡は呟き、やがて黙った。そして二度と口を開きはしなかった。
そんな中で、秀衡は死んだのだ。
この先の一族の運命を暗示するかのように、平泉はその日、雪景色に埋もれた。

☆

九郎と泰衡とは、もともと、それほど気の合う同士ではない。

九郎が平泉に逃げ込んできた当時は、源氏の家柄など地に落ちていたころ。泰衡のほうに、九郎を蔑む気持ちがあったからしい。

ところが最近、その泰衡が、九郎の館に親しげに通ってくる。父・秀衡の遺言を尊重するがゆえのことだろう。

九郎のほうは、ああいう性格の男だから、喜んで泰衡を迎え入れ、夜更けまで杯を合わせ、おおいに盛り上がる。

その夜も、泰衡がやって来た。

彼はひとりではなく、弟たちを、そして幸衡をも連れて現れたのだ。

皆の後ろから、さも面白くなさそうな顔で現れた幸衡をつかまえ、九郎は、

「どうした？　めずらしい顔ぶれだな？」

「なんだか知らんが、来いって言うから」

「ふーん？」

とりあえず、酒が運ばれた。

が、どうにも奇妙な宴であった。

泰衡は、幸衡を、なんとその傍らに置き、終始、上機嫌なのである。

「いやいや、九郎どのがいてくだされば、この平泉は安泰」

幸衡へと視線を流し、
「おまえは子供のころから九郎どのには可愛がっていただいていたからなあ。これからは、そのご恩に報いるように働けよ？」
「働く――？」
（事実上、一族の仲間に加えられていないも同じの俺に、何を働けっていうんだよ？）
実に迷惑な話だ、と、眉を歪めてみた、そのとき。
背中に、ちいさな手を感じた。
「お？」
と振り向くと、また愛寿である。母の手をすり抜けて来たのだろう。
「これはこれは、姫ぎみさま」
泰衡が愛寿の頬に手を触れようとした。が、愛寿は不機嫌そうにそれをはねのけてしまう。
「――おやおや」
泰衡は、ふと酒から醒めた顔になり、しらけた呟きをこぼした。
九郎がその様子を見て取り、
「ほら愛寿、おいで」
愛寿に向かって手を広げてみせる。
それでも愛寿は幸衡から離れようとはせず、彼の膝に、ちょこんと収まってしまった。この

姫は、よほど幸衡がお気に入りらしい。
やがて、愛寿を追いかけ、葵が姿を見せた。
「いつも迷惑かけて、ごめんなさいね」
すまなそうに笑う葵に、幸衡は、
「いや――」
と、濁った言葉のまま、愛寿を抱き上げ、渡そうとした。
そのとき、幸衡の手が、葵の手に、ふと触れた。
それだけのことだ。
ところが、幸衡はいつになく狼狽し、急に愛寿のからだから手を引いてしまったのだ。
危うく葵が腕に力を込めたから、愛寿に大事はなかった。
「ごめん……」
幸衡はくちびるから押し出すように呟き、杯に手を伸ばした。
「あ――、いいえ、大丈夫よ」
葵は咄嗟に笑い、立ち上がった。
ほんの小さなことだ。
だから、酒に酔った皆は、めずらしく崩れた幸衡の様子になど、気づきもしなかった。
葵はそのまま、愛寿を抱いて出ていってしまったし、幸衡も何もなかったように杯をくちび

るに付けている。
が、胸の中では彼は、かなり動揺していた。
先日、葵がくれたひと言が、どうしても頭を離れてくれないのだ。
〈あのころ、私はあなたのことを好きだったのよ〉
葵の気持ちを、彼女自身の言葉で聞いたのは、初めてだった。
昔のことだけれど。何もかも、終わってしまった、もう取り戻せない、ことだけれど。
（マズイな、何か変だ、これはいかん……）
胸の中で慌てつつ、けれども顔には出さずにいたのだ。
ところが、そうしているうちに、聞き捨てならない呟きを聞いた。
「おまえは、そうか、葵どのを――」
幸衡は、は……っと耳を澄ませた。
「そうか、父親と同じだな」
そう続いた声は、泰衡のものである。
が、幸衡が杯から顔を上げてみると、泰衡は、にこやかに九郎と話している。今の呟きなど、まるで幻だったかのような様子なのだ。
（親父と同じ……？　どういう意味だ？）
幸衡は、ただ首をかしげるばかりである。

☆

以来、泰衡は、気持ちが悪いくらい幸衡を重用するようになった。

たとえば、鎌倉との付き合い方を今後、どう改めてゆくか——と話し合ったときなども、泰衡は幸衡にも意見を求め、それを積極的に取り入れるという姿勢をみせた。

「……なんなんだよ、あれは」

幸衡は縁に座り込み、ひとり言のように呟いたが、その下には弥太郎が——葵を平泉に連れてきてくれた例の商人・弥太郎がひっそりと控えている。

「つまり、あれか？　俺を抱き込んで、九郎との仲が円滑にいくように利用しよう——ってハラか？」

泰衡は、九郎を見下げた目で見てきた男なのだ。今さらへこへこと頭を下げるのは、さすがに気まずいくらいに。

だから、幸衡なのだろう。

考えてみれば、秀衡亡き今、藤原一族の中で九郎と一番、親しい仲にあるのは、幸衡なのである。

なるほど——と、幸衡は頷きつつ、

「姑息な手を使いやがって」

憎々しげに呟きもする。
「泰衡は、あれは信用ならないな」
もう一度、頷いてみたあと、
「弥太郎――」
と、幸衡は縁の下の男を呼んだ。
「もっと北――北だな。行く先は、北だ」
短く言っただけで、弥太郎は、幸衡の意を汲み取ったようである。

☆

幸衡は子供のころから、ひとつ、屋敷を与えられ、そこに寝起きをしている。
というと、なんとも贅沢な話に聞こえるが、つまりは、父・国衡の家族から隔離されていただけの話である。
今も、同じ屋敷に暮らしている。
時折、父の屋敷に出向くこともあり、その日も、ご機嫌伺いと泰衡から頼まれた物を届ける用事とのために、父を訪ねた幸衡である。
が、先客がいた。香子だった。
「おまえの継母にもなるのだから――」

父から挨拶をうながされ、申し訳程度に頭を下げる。
幸衡の用事は、まばたきをするほどの時間で終わってしまった。そうなると、ここにはあまり長居をしたくない。
幸衡は、早々に腰を上げた。
「もう帰るのか？」
珍しく、父が名残惜しそうな気配を見せた。
「せっかく親子が顔を合わせたのだから、もう少し――」
「親子――？　このひとのことなら、俺はジジイの奥さんだとしか思えやしないよ。当たり前だろ？」
しらけた口調で幸衡は言い、さっさとその場を立ち去った。
ところが、少し言い過ぎたか――と、ちらり、視線を振り返らせたそのとき。
幸衡は、不思議な違和感を感じた。
奇妙なまでに、和んでいるのだ。父・国衡と香子と、ふたりがひっそりと向かい合っているその気配が、奇妙なまでに和んでいる。その和み方は、まるで夫婦のそれなのだ。
（なんだ、これは？）
おかしい。つい先日まで継母と継子であったはずのふたりが――。
泰衡の、例の声を思い出した。

〈おまえは、そうか、葵どののことを――。そうか、父親と同じだな〉

嫌な予感が、した。

☆

「なんだ、鬼王、愛寿ならいないぞ？　葵と一緒に出かけている」

九郎は、相変わらず幸衡のことを〝鬼王〟と呼ぶ。

「姫に会いに来たんじゃない」

「なんだ、そうか？」

「当たり前だろ？」

「そうか？　俺は、おまえになら、あれをやってもいいと思っているんだがなぁ」

「……ばか。いくつ違うと思ってんだよ」

「たった十九だろ？　秀衡じいさんと香子どのも、それくらい違っていただろう？」

「そりゃそうだが」

九郎は、気に入りの馬を出して北上川まで降りてゆこうというところだった。幸衡も、それについて行くことにした。

幸衡だけを供に、とりあえず川まで降りてはいったが、九郎は馬を下り、川原に座り込み、幸衡の話を聞いてくれようという態勢である。

「どうした？　話があって来たんだろう？」
「ああ――」
幸衡は、唸りつつ言葉を探し、
「親父のことなんだ」
「国衡どのの？」
「ああ。親父は、ほんとにジジイが言い遺したとおり、ばあさんを嫁にするつもりなんだろうか？」
「――うーむ」
九郎は、まずは唸ってみせたあと、
「秀衡じいさんの遺言だしなあ」
「でも、泰衡もいい顔はしていないって話じゃないか」
「うん……、まあな」
九郎は、例の遺言公開の場のことを思い出していた。
幸衡はあの場には呼ばれていなかったから、知らないことだ。
〈では、あの噂は――〉
と、泰衡が洩らしたひと言の、その〝噂〟を、実は九郎も聞いたことがある。
幸衡の実母は、香子である――つまり、幸衡は、国衡と香子との間に生まれた不義の子だ、

というのだ。

もともと、そういった噂話にはあまり興味を抱かない質の男なのだが、可愛がっている幸衡に関する噂である。これぱかりは慎重に耳に留め、けれどもはっきりしないことは放っておくに限る――と、今まで知らんぷりを決め込んできたのだった。

九郎は、川原の石を拾い上げては無心の顔で水面に飛ばしている幸衡の横顔を、ちらりと見た。

元服もすませ、大人びたとはいえ、九郎にとっては、まだまだ子供の鬼王丸である。

（言えないよなあ、俺には）

胸に抱えた秘密の重さに、九郎はそっとため息をつく。

☆

その重さに耐えかねた九郎が、ついつい頼ってしまったのは、葵である。

平泉に来て日の浅い葵は、もちろん、まだその噂を耳にしてはいなかった。

葵が愛寿を寝かしつけている隣で、その話をしたのだが、まずはぽかんと白く抜けた瞳で九郎を見つめ返した彼女は、その次に、

「――なんですって!?」

ついつい愛寿の存在を忘れ、叫んでしまったものである。

慌てて愛寿の寝顔をのぞき込んだ。けれども、さすが呑気者の九郎の子、愛寿は、身じろぎひとつせずに眠っている。

葵はほっとしながらくちびるを押さえ、声を低めて、

「その話、本当なの？」

「本当も何も、ただの噂でしかないんだが……」

九郎も、もちろん確かめてみたわけではないから、なんとも言えない。

「お母さまのことを知らない——って、どうも何か事情があるらしい——って、そのことは私、昔、幸衡どのから聞いたけれど……」

噂という形で広まっているところを見ると、皆、知っていて知らん顔をしていたのだろう。幸衡が——鬼王丸が皆から疎まれていたのは、だからだったのか……。

皆が知っている。けれども彼だけが知らない。そして彼は〝自分だけが知らない〟ということさえ、知らないのだ。彼だけが、本当に何も知らずにいるのだ。

「……それでいいのかしら？」

ぽつりと葵が呟いた。

「でもおまえ、言えるか？」

「そうね、難しいけど——でも、誰かが言ってあげなければ——」

幸衡の孤独は、一生、消えないままなのではないかという気がする。

それは、寂しい。彼の寂しい行く末を思うと、やっぱり葵も寂しくなる。

「一番いいのは、お母さまが勇気を出して告白することじゃないかと思うけどなあ、私」

「だが、時期的にも難しいな。鎌倉の兄上が、奥州を狙っている今だ。噂にとどまっているうちは泰衡もおとなしくしているだろうが、香子どのがそれを認めたら――泰衡が何を思うか。何を考えるか。それが藤原一族内部の争いを呼ぶようなことになっては――」

九郎は、難しい顔で言ったあと、

「真実を知って思う気持ちは、もしかしたら鬼王よりも泰衡のほうが複雑かもしれないしな」

確かに、そうかもしれない。

もしも噂が真実ならば、泰衡にとって幸衡は、甥であると同時に異父弟でもある――実に複雑な存在ということになる。それだけでなく、母と異母兄の不倫を知るときの思いは、いったい、どれほど複雑なものであるのだろう？

「その事実を正常な心で受け入れられるような、泰衡はそれほどの男かどうか――」

九郎は、懸念している。

泰衡が館に通ってくるのを、ただ呑気に迎えていたわけではない。百戦錬磨の九郎である。泰衡が、秀衡ほどに自分を思ってくれる人物かどうか、実は慎重に観察をしてもいるのだ。

狂宴

そののち約一年が、おだやかに過ぎた。

頼朝は、仕掛けてこない。特に不審な動きが見られるわけでもない。秀衡が生きていた当時の関係が、まだそのまま続いている。

これはどうも、父が遺したあれほどの心配は、まったくの杞憂だったのではないか——泰衡は、そう思い始めている。

鎌倉は——頼朝は、九郎義経が天才的な戦上手であることを、充分、承知しているのだ。だから、その九郎がこちらの手の中にあるとわかっている以上は、容易に仕掛けてこれずにいるに違いない。九郎を擁している限り、この平泉は安泰なのだ。

泰衡は最近、そんな安心の中にゆったりと身をゆだねてしまい、

（なあんだ、チョロイもんじゃないか）

得意の絶頂にいる。

ところが、文治五（一一八九）年、閏四月。

とんでもない噂が平泉にまで流れてきた。

後白河法皇が、奥州追討の院宣を下すことを決定した――というのだ。

「奥州追討……？　我らが朝敵になったというのか？」

泰衡は、その報告を受けはしたが、まずは誤報だろうと笑い飛ばした。

寝耳に水の話である。

ところが、亡き秀衡が京都を探る目的で使っていた商人――あの弥太郎が、泰衡の前に上がり、

「ただの噂ではありません。奥州が、九郎どのを謀反人と知りながら匿っていることは明白、それは朝廷に対する反逆である――と、法皇さまは、真実、その決定を下されております。頼朝も、近いうちに奥州へ出発するつもりだから、それまでには院宣を下してほしい――と、都へ言い送っているとか」

そう申し述べるに至り、さすがに動揺した。

落ち着かない顔で何度か考えを巡らせていたようだが、やがて、すっくと立ち上がり、

「九郎どのの館に行く！」

ついに時が来た――と思ったのだ。父の遺言のとおり、九郎を大将に立てて鎌倉と事をかまえる時が、ついに来た――と。

ところが、当の九郎が渋った。

「今、事を起こすのは、あるいは危険かもしれない」
「なぜ――!?」
「鎌倉の兄上の、挑発ではないだろうか？　一年近くもこちらを泳がせ安心させ、油断させ――そうしたところに例の院宣の噂を流す。そうすると、こちらは必要以上に慌てて、充分な戦準備もないままに兵を挙げようとする――。それを誘ったんじゃないだろうか？」
「だが実際、鎌倉方が明日にも攻めてくるというのですよ!?」
「まだ、ただの噂に過ぎないだろう？」
「確かな噂です！」
泰衡は、譲らない。彼は彼なりに、平泉を守るために必死なのである。
が、泰衡が鎌倉や朝廷へ向ける目は、本人は必死のつもりでも、九郎から見れば穴だらけであった。あまりにも甘すぎた。
九郎には、わかる。今、頼朝が鎌倉で、にやりと笑いながら、泰衡が踊り出すのを待ちかまえているだろう姿が。
思えば自分も、ずいぶんと頼朝に挑発され、それを見抜けず、踊らされてきたものだ。
たとえばあの、土佐坊昌俊らに京都の屋敷を襲撃された事件。
わざとあんな事件を起こし、九郎に、頼朝追討の院宣を手に入れさせ、頼朝に敵対する存在としての彼を、はっきりと世に示してみせた……。

今ならば、わかる。すべてがわかる。

だから、そのあたりのことを教えようとするのだが、

「おまえ、なんでこんな簡単なことがわからないんだよ!?」

「わたしがわからないのではありません、九郎どのが心配しすぎなのです！　ここでためらうのは、自ら破滅を招くようなものではありませんか！」

とまあこんなかんじに、どういうわけだかケンカ腰な話し合いになってしまうのである。

（兄上は、さすがだよなあ）

自分と頼朝の器の違いというのは、つまり、このあたりのことなのだろうなあ――と、妙に実感してしまいつつ、九郎は、とうとう匙を投げた。

「とにかく、待て！　大将はわたしだ。このわたしが許すまでは、とにかく待て！」

とだけ言い置いて、その場から逃げ出してしまった。

それでも泰衡は、そののち数刻、待ち続けていたようだが、やがて、なにごとか思いついたという顔で帰っていった。

「もう大丈夫みたいよ？」

葵からそう聞き、九郎は苦い顔で姿を現す。

「戦になるの？」

葵が、心配げに九郎を見上げた。

「いや――、今は、まだ」
とだけ、九郎は答えた。戦など起こらない――とは、言い切れなかった。
戦は、起こる。必ず近いうちに。
九郎の胸の中で、緊張が高まりつつある。

☆

次に泰衡が現れたのは、幸衡の屋敷である。
「おまえ、九郎どのに進言してくれないか？　今すぐ起つべきだ――と」
けれども幸衡も首をふる。
「急いてはいけない」
幸衡の見解も、九郎とまったく同じだった。今、動くのは、頼朝の思うツボだ――と。
泰衡は、一瞬、くちびるを噛みしめるようにして黙り込んだ。
ところがそののち。
「まったく九郎どのも、肝心なときに役に立たないとは、なんのために匿ってやってると思ってるんだよ」
泰衡は、忌ま忌ましげに呟いたのだ。
そのあと幸衡にも蔑むような流し目をくれ、

「はずれ者だったおまえを、俺はわざわざ重用してやっているんだぞ？　その恩に報いようという気はないのか？　今すぐ九郎どのの館へ行き、説得に当たろうという気は――」
「ない」
幸衡は、きっぱりと言った。
泰衡は、幸衡を見つめる目に鋭さを込めたあと、
「――ふん、役立たずめ」
「間違えるなよ？　俺は、奥州を思うからこそ、今は起つべきではないと言っている」
とは言いつつ、幸衡は、心中ではまったく別のことを考えている。
（そろそろ、ここを捨てるには、いい頃合いのようだな）
平泉も、もう長くはあるまい。

☆

泰衡がこのまま引き下がるわけはないだろう――と、幸衡は覚悟していた。
が、その彼にも予想のつかなかった行動に、泰衡は出たのだ。
その夜、伽羅御所に、幸衡、その父の国衡、香子、そして九郎と葵までもが集められた。
「なんで私まで……？」
いぶかりつつ、いつもは片時も手放さずに自分で面倒をみている愛寿を、今日は館の者に預

けてきた葵である。

幸衡も、先日の報復のためにここへ呼ばれたのだろう——と見当を付けつつも、なぜ、父や香子、葵までもが必要なのか、わからずにいる。

九郎は九郎で、泰衡の真意を推し量りつつ、嫌な予感に眉のあたりを苦々しく染め——。

けれども泰衡は、妙に陽気な様子だった。酒を運ばせ、ひとり上機嫌に、しゃべり続けている。

ところがやがて、

「そういえば昔——」

と、香子のほうへと視線を流した。

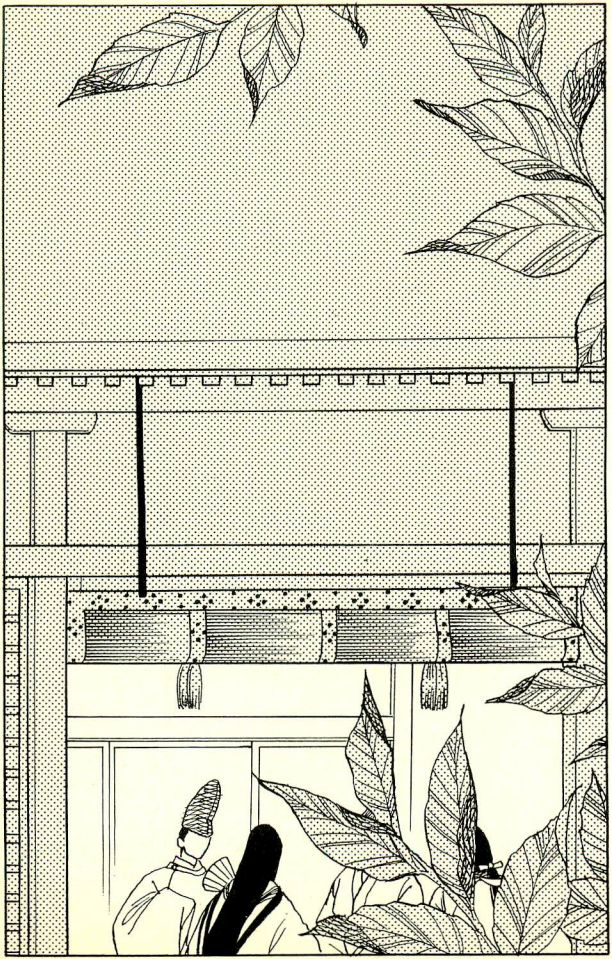
「昔——わたしがまだ元服をすませる前のことでしたか、確か父上がお留守をなされていた夜だったと思うのですが、母上（香子）のご寝所近くで、異母兄上（国衡）のお姿をお見かけしたことがありまして——」

杯を持つ国衡の手が、ぴくりと動いた。

初めから俯きがちだった香子の表情は、わからない。が、決して顔を上げようとはしない。

泰衡は続ける。

「そのすぐ後、母上がご懐妊なされたと聞き、これは新しい弟妹が生まれるかと楽しみにしていたのですが、その赤児は、生まれてすぐに死んでしまったとか」



「ええ、死にました」
細いが、しっかりとした声で、香子が頷いた。
「――ふうん？」
泰衡は含みのある唸りをくちびるに滲ませ、今度は国衡に、
「確か、そのころでしたね？　兄上のところに幸衡が生まれたのも」
「そうだったな」
国衡は重く頷き、くちびるに杯を付けた。
「正直――、幸衡の母親というのは誰なのですか？　わたしは未だに知らないのですよ」
と、泰衡が言い出す前、実は九郎は、彼に飛びかかってでもこの話をやめさせようと思ったのだ。
が、それをしなかったのは、幸衡の目を見たからだった。幸衡は、ひどく落ち着いた視線を、得意気に話を続ける泰衡に注ぎ続けていた。
それを見たとき、前に葵が言っていた言葉を、ふと思い出した。
〈それでいいのかしら？　難しいけど――でも、誰かが言ってあげなければ――〉
黙っていようと九郎が決めたのは、だからである。
「これは戯れ言なのですがね」
口許に下卑た笑いを含ませつつ、泰衡が、さらに続ける。

「生まれてすぐに死んだ、わたしの弟か妹と。同じころに生まれた幸衡と。ふたりの赤児は同一人物ではないのか――そんな噂があるのを、母上も異母兄上も、ご存じですか？」

問われて、香子が、つ、と顔を上げた。

「幸衡どのが、わたくしと国衡どのの間に生まれた子だと――そうおっしゃりたいの？」

真っすぐな視線だった。真っすぐに、少しの濁りもない瞳で、香子は泰衡を見つめた。

泰衡は、わずかにたじろぎ、

「噂ですよ、ただの」

「そうね、わたくしも、そういった噂の流れていることは存じておりました」

「ほう、ご存じでしたか」

「けれど、知らぬふりをしてまいったのです。亡きお館さまが――秀衡さまが――」

香子は、頬をちらりと自嘲に歪め、

「誰にも真実を語ってはならない、黙り続けたまま噂に揉まれることが、噂に傷つけられることが、わたくしたちに天から下された罰だ――と、そう申されましたから」

香子のその言葉に一番の反応を見せたのは、国衡だった。

彼は、杯を取り落とし、言葉もないままに、迷いなく顔を上げる香子の頬を見つめた。

「――母上」

呟いたのは、泰衡である。

「それでは、母上――」
「そうです。幸衡どのは、真実、わたしの産んだ子です」
はっきりと、香子は認めた。
次の瞬間、その場を覆ったのは、白々しいまでに乾いた沈黙だった。
が、高く響いた泰衡の笑い声が、すぐにそれを破った。
「ついに言ったな!? ついに認めたな!?」
別室に詰めていた者までもが驚いて駆けつけたというほどの、笑い声なのだ。正気を忘れた声で、顔で、泰衡は笑い続け、
「おい幸衡、聞いたか!? 継母と継子との間に生まれた不義の子――それがおまえだとよ! 生意気にも、俺に意見など出来るような身の上じゃないんだぜ、おまえは!」
ところが幸衡は、さきほどから変わらない様子のままである。目の前にある泰衡の狂態を、気味が悪いほど冷静に見つめ続ける。
それが気に入らないのだろう、泰衡の笑い声はさらに高まり、
「だが、事実を知らなかったとはいえ、おまえもさすがに異母兄上の子だ。おんなじことをしていやがる。――あの女!」
と、葵を指さし、
「他人の奥方に――それも世話になった九郎どのの奥方に、懸想などして! 父親の妻に手を

出した異母兄上には負けるが、おまえも相当なもんじゃないか！　九郎どの、うかうかしてはいられませんよ!?」

その言葉には、さすがの九郎も怒った。

す、と腕を上げて泰衡の視線から葵を隠し、庇いつつ、

「泰衡どの――！」

と、声を荒げようとした。

が、それよりも早く幸衡が、

「叔父上――いや、異母兄上とお呼びすべきか」

おだやかに、言ったのである。

泰衡は、ぎらりとそちらへ視線を回した。

「なんだ？」

「だから、なんなのですか？」

「――？」

「わたしが祖母上と父上との間に生まれた不義の子だ――と、それをここでこのような形で祖母上に告白させたのは、いったい、なんのためなのですか？」

泰衡の顔から、狂気じみた笑いが消えた。

幸衡は続けて、

「わたしを辱めるためですか？　九郎どのを愚弄するためですか？　だからといって――それが何かになりますか？　たとえば、今のこの、平泉の苦境を救う手だてにでもなるのですか？」

泰衡から返る言葉はなかった。ふたたび訪れた沈黙の中で、泰衡は、ぽかりとくちびるを開き、恐ろしいほどに見開いた目で、ただ、幸衡を凝視した。

どれほどの時間が流れたあとか――。

泰衡が、突然、動いた。

彼の拳が、空気を斬る音と共に舞い上がったかと思うと、激しく床を打ったのだ。

骨がぐしゃりとつぶれるときのような、鈍い音が響いた。九郎の陰で、葵がびくっと身を縮めた。

その響きが、夜風の中に消えるころ。

泰衡はふらりと立ち上がった。

今夜のこの狂宴は、いったい、なんのためだったのか――？

それは泰衡にもわからないのだ。

幸衡や九郎からバカにされたようで腹がたったのか？　長年、悩んできた、母と異母兄の不倫に対する疑惑に決着をつけたかったのか？　それとも、頼朝の陰謀を見抜けもせずに、この平和は我が手腕によるものなのだと自惚れていた自分に、腹がたったのか？

思い当たることがあまりにも多すぎて、泰衡にもわからないのだ。

☆

「あのひとが俺の母親だった――ってわかったからといって、正直、特別な感慨はないんだ」

と、幸衡は九郎に言った。

「どうせ、ろくな生まれじゃあないだろうと思っていたし」

驚くとか打ちのめされるとか、はたまた、嬉しいとか母親というものへの懐かしさを感じるだとか――そんな感情は、まったく湧いてこないのだ。

実際、ぽかんとした顔の幸衡に、九郎は笑いを流し、

「驚きすぎてんじゃないのか？」

「驚きすぎ――？」

「そう。驚きすぎて、まずは真っ白になってるってかんじだな、おまえのそれは」

「そうかな？」

「時間が経てば、なにか思うようになるさ。それはまでは、ぽかんとしていればいい」

「――そうかな？」

「そうさ。なんとかなるさ」

「そうか――」

幸衡も、九郎に合わせて顔に笑いを滲ませつつ、
「まあ、ほんとにどうでもいいことではあるんだが」
どうせ近々、この平泉を出ていくつもりなのだから。
「そんなことより――」
幸衡にとっては、
「つまりは、泰衡はあんな様子だということだ」
そのほうが大事だった。
「そろそろ覚悟を決めておいたほうがいい」
幸衡は、きりりと頬を引き締めている。

旅支度

泰衡が、九郎を討とうと考えるようになったのは、もちろん、この夜の出来事が原因なわけではない。

けれどもあれ以来、泰衡の気持ちは乱れた。乱れたままで、この危機をいかにして乗り越えるか——その考えをめぐらせている。

「九郎どのを、討つ」

決心するなり、泰衡は、信頼のおける側近にのみ、その胸の内を明かした。

「鎌倉の狙いは、九郎どのだ。九郎どのさえいなければ、我らが朝敵になることもなかったのだ。ならば、九郎どのを殺してその首を鎌倉に送りつけてやればいい。そうすれば、奥州は安泰だ」

どろり、と、瞳が鈍く動いた。

☆

いち早く、その情報を手に入れた幸衡は、
「今だ！」
と、九郎のもとへ走った。
「北へ逃げよう！　ここより、もっと北へ！　弥太郎に命じて、その支度も、落ちのびる先も、すべて手筈は整っている！」
ところが、いつになく興奮した様子の幸衡とは裏腹に、九郎は、妙にのんびりとした笑いを口許に揺らし、
「おまえ、暗躍するの、やめたの？」
「――え？」
「いや、今まで、そうやっておまえが表立って俺を助けてくれたことって、なかったからさ」
「――？」
幸衡は、勢いをそがれたように、ぱちくりと瞬きした。
「でもなあ、そうかもな。俺のまわりには、もう誰もいなくなってしまったものなあ。残っているのは、おまえと葵と愛寿と、あとは少しっきり。暗躍しようにも、動かせる奴らが、いなくなっちゃったもんな」
「……どういう意味だ？」
ふ、と眉を陰らせた幸衡に、九郎は、それとは正反対の、眩すぎるほどの微笑を見せ、

「三郎が言っていた」
大物の浦で、伊勢三郎と別れた時のことだ。
「おまえ、三郎に、俺についてずいぶんなことを吹き込んでくれたそうだな？　俺が兵を挙げても絶対に負ける、とか、俺は兄上とは違って器の小さい男だ、とか、人に利用されても気づけないバカだ、とか……」
「そこまで言っちゃいないぞ!?」
「ははは――！」
九郎は、上を向いて笑ったあと、
「でも、それはおまえが精いっぱいに俺を守ろうとするがゆえの言葉だったんじゃないか――と、三郎は言っていた」
幸衡を、やわらかく見つめる。
「おまえ、あのころから、誰が本当に俺のためになる人間なのか、誰が本当は時の勢いにぶら下がって俺の家来になっているだけの人間なのか、皆の器量を試そうとしていたんじゃないか？　その結果を見て、俺のためにならない奴らは切り捨てておこう――って。三郎のことも、そうやって試したんだろう？」
「――――」
幸衡は、黙っている。

でも、九郎は知っている。幸衛は、鬼王丸の昔から、言葉で肯定を告げることが苦手なのだ。だから、彼が黙っているというのは、つまり〝そうだ〟と認めていることになる。

「でも、三郎はそれを見抜けなかった。おまえを疑った末に、俺のことも信じられなくなってしまったと言っていた。そんな自分ではだめだから、だから、もう俺にはついて来ない――と」

あの嵐の中の伊勢三郎を思い出し、そのときだけ、九郎の瞳に影が走る……。

けれど、すぐにそれを消し、

「俺、最近は、いろんなことがわかるようになってきたんだよなあ、うん。――あ、北へ行くんだったよな？」

もう、笑っている。

「ここよりも、もっと北かあ。寒いだろうなあ。どうせ寒いんなら、蝦夷地（北海道）にまで渡ってみるのもいいな」

そんな呑気なことを言いながら、しばらくは、旅立ちのための支度をしていたようだが、やがて、ふと思い出したように、

「そういえば、おまえ、なんで都で、葵に顔を見せてやらなかった？」

「――えっ!?」

幸衛の頬が、面白いほど動揺し、跳ね上がる。

九郎はそれを感じていたが、素知らぬふりで続けて、
「おまえ、葵のことが好きだったくせに」
そう言ったあと、ゆっくりと幸衡を振り向いた。
「俺のためか？」
「ちが……！」
「違わないよなあ？　俺のために――俺の生きる道が良いほうへ回るように、そのためにあちらへこちらへと走り回って。いろんな顔をして、悪い奴の顔も可愛い奴の顔も、いろんな顔をいろんな奴に見せて。そうやって俺のために生きるには、恋などしているヒマはない――とでも思ったんだろう？　おまえ、不器用だからなあ。あっちもこっちも両方とも上手に――ってのは、苦手だもんな？」
「――――」
幸衡は黙っている。
「でもおまえ、それ、バカだぞ？　おまえはそれでいいかもしらんが、葵はどうなる？　しなくてもいい悲しい思いをして、それでもおまえに気持ちを伝えたい――と、俺の妻になる決心までして、その結果、こんなことに巻き込まれて、こんなところにまで来てしまって。全部、お前のせいだぞ？」
「……」

幸衡の今度の沈黙は、後悔のせいであるらしい。

彼がやがて、

「でも、今は葵は、九郎のことを愛しているから」

と、その沈黙の奥から押し出した呟きを、九郎は、微妙に傾いた角度から数秒、見つめていたあと、

「でもな？」

と、笑う。

「おまえのそういうとこ、兄上にちょっと似てるな？　そうやって自分の気持ちを押し殺して、何かの目的のために、そのためだけに頑張ってしまえるとこ」

「でも頼朝は、俺をうらやましいと言っていたぞ？」

「うーん、そうだなあ？　おまえは、俺という個人のために、それも、俺のことを大切に思ってくれているがために、そうしてくれたわけだろう？　でも、兄上の肩にかかっているものは、そんな気楽なものではないからな。もっと大きなもの――そうだな、〝時代〟とでもいうものか」

九郎は、兄、頼朝の姿を思い浮かべた。

眉ひとつ動かさず、肩をわずかにも落とさず、冷静に、ただ冷静に、鎌倉武士たちの上に座し続ける兄。けれどもその心の裏にあるものを、九郎は思い浮かべてみる。

そののち、また笑い、
「でもなあ、おまえのそれは、つまりは秀衡じいさんに似ているということだったのかもしれないな」
「――えっ!?」
「……そんな嫌そうな声を出すなよ」
「嫌なものは嫌なんだから、しょうがないだろっ？」
「でも実際、おまえは似てるよ。頑固なとこも、ハッタリが得意なとこも。だからかな？　秀衡じいさんが、妙におまえを可愛がっていたのは」
「可愛がってた!?」
「気がつかなかったのか、おまえ？」
「そんなの……！　バカ言うなよ！　あれのどこが可愛がってたんだよ!?」
「だって、弥太郎を付けてくれているじゃないか」
「……は？」
「弥太郎だよ。あれは、じいさんが、おまえのために付けてくれていた男だろう？」
「嘘だよ。弥太郎は、都の様子を探るための……」
「そのついでに、おまえのお目付け役も仰せつかっていたんじゃないか？　――いや、ついでだったのは、都の様子を探ることのほうかもしれない。そうでなきゃ、弥太郎が、こんなに

も、おまえの手足になって動いてくれるわけはないだろう？　泰衡の――藤原家の意向にそむいて俺を逃がすためになど、動いてくれるわけはないだろう？」

そこまで言われてしまうと、幸衡に返す言葉はなかった。

確かに、そうだ。そうかもしれない……。

「つまり――」

と、九郎は、黙り込んでしまった幸衡をやさしく見つめて、

「つまり、おまえはやっぱり、秀衡じいさんに可愛がられていたってことだよ」

「……迷惑だ」

「素直じゃないなあ、おまえは」

まあ、それはともかく――と、九郎はまた幸衡に背を向けて旅支度に戻りながら、

「葵には、おまえ、ほんとに悪いことをしたんだからな？　ちゃんと償えよ？」

九郎には見えないところで、幸衡は、それに答えて小さく頷いた。

確かに、葵の運命がこんなところにまで流れてくるようになってしまった原因の一端は、自分にある。

（でも）

と、鬼王は思う。

（葵はそれを、後悔しているだろうか？）

焔（えん）

（こんなことが、前にもあった）

と、葵（あおい）は思っていた。

血のにおいがする。人の死ぬにおいがする。白刃（はくじん）が頭上をひらりと過ぎてゆくこともある。時折、足元に、ころりと死骸（しがい）が転がってくる。

葵は、九郎（くろう）の手に守られながら、しっかりと愛寿（あいじゅ）を胸に抱きしめながら、戦場と化した我が館（やかた）を駆けている。

泰衡（やすひら）が、ついに九郎の館に襲撃（しゅうげき）をかけてきたのだ。

（こんなことが、前にもあった）

そう、京都（きょうと）の屋敷が、頼朝（よりとも）の手の者に襲われたあのとき。

（あのときも、この人の手の中で、私は安心していたんだわ）

怖くない。何も怖くない。たとえ死ぬようなことがあったとしても、この人と一緒なのだから。愛寿と一緒なのだから。怖いことなどあるものか。

それに、葵たちが今、こうして走っているのは、戦にまぎれ、こっそりと落ちのびるためなのだ。

幸衡との待ち合わせは、衣川のほとり。彼は先に行き、弥太郎と待ってくれているはず。

「ほら、あそこだ」

九郎が指さしてみせたあたりに、何か、動くものが見えた。

葵は、ほっとして愛寿を抱き直し、

「まずは、ひと安心ね」

九郎を振り返った——つもりだった。

が、そこに、彼の姿はなかった。

☆

「九郎は!?」

葵と愛寿の姿を確認した幸衡は、そこに九郎の姿のないのを素早く見て取り、訊ねたが、葵はそれには答えず、

「ちょっと姫をみていて！」

愛寿を腕から下ろし、幸衡のほうへ、投げるように押しやってきた。

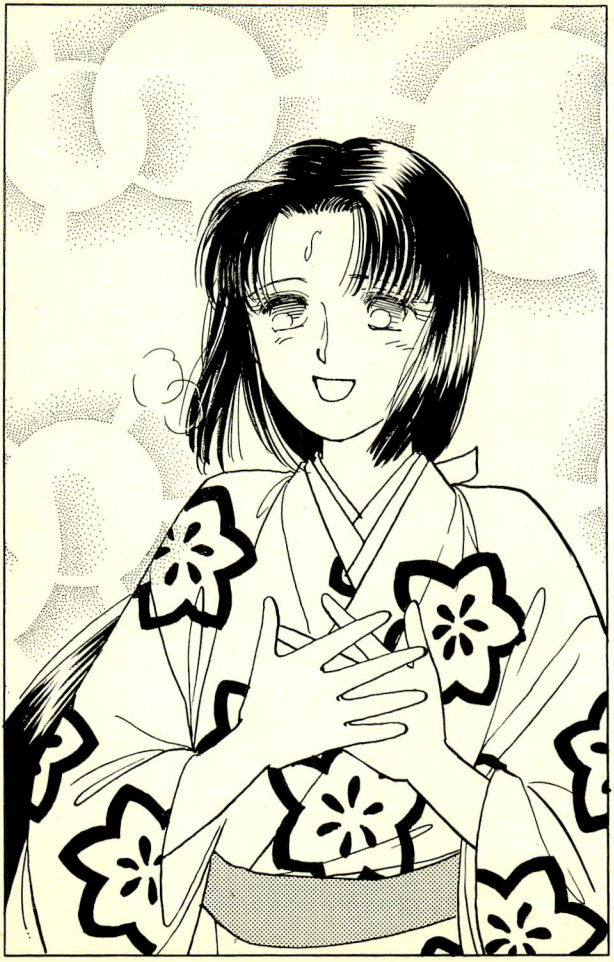
「——どこへ行くんだ!?」

「戻る！」
「戻るって――おい、なんなんだ!?　九郎はどうしたんだ!?」
「なんだか知らないけど、行っちゃったの！　私、連れ戻してくるから！」
走り出そうとする葵を、幸衡は、さすがに止めた。
「おまえが行ってどうする!?　危険なだけだ。俺が行く！」
けれど葵には、聞こえていない様子なのだ。
もちろん幸衡は、彼女を追おうと思った。が、愛寿の手にしがみつかれ、ほどけない。やっとのことでその手を離し、弥太郎に預けようとしたときには、もう。
葵の姿は、どこにも見えなくなっていた。

☆

まだ、矢唸りが聞こえる。
最後まで九郎を守ってくれていた者たちと、泰衡勢との戦が、まだ続いている。
けれども九郎は、その混乱から背を向けたほうへと駆けていた。
「どこへ行くの!?」
行く先は、伽羅御所である。
「何をしに!?」

泰衡はたぶん、伽羅御所にいて、九郎がいつ討たれるか、その知らせが入るのを待っている。
その首を、
「俺のほうが取ってやる！」
呟きを落とし、けれども九郎は、ふと足を止めた。
（なんだ、今の声は……）
来た道を、振り返った。
すると、
「……おまえ！」
葵なのだ。
葵は、はあはあと荒く息をはずませながら、
「よかった、追いつけた！」
腹立たしいほど無邪気に、笑うのだ。
「なんで来た!?　せっかく安全なところまで送ってやったのに！」
「あなたこそ、私をだましてまで、なんでこんなとこに来てるのよ？」
「泰衡を討つためだ。あいつ、許しておくものか」
「だったら、そのように言い置いて行ってくれなくちゃ困る。どうして黙って行くの？」
「それは……」



「私たちのところに、ちゃんと戻ってきてくれるつもりだったの？」
「それは……」
九郎は言葉を濁し、くるりと葵に背を向けた。
そのまま、すたすたと歩き出しつつ、
「おまえ、帰れ」
「いやよ。あなたと一緒でなきゃ帰らない」
「そうじゃなくて……」
「なに？」
「おまえ、鬼王のところへ帰れ」
「――どうして？」
「もういい。意地を張るのは、もうやめろ。おまえは、どんな理由からであれ俺のところへ来た、自分のその行動を後悔しないために、そのためだけに、俺の本当の妻になることを選んだんだろう？　こんなところまで、ついて来たりもしたんだろう？　でも、それはただの意地だ。そんなもののために、いつまでもついて来られては、迷惑だ。帰れ」
「帰ったら……私が帰ったら、あなたはどうするの？」
「さあなあ？　とにかく、あの泰衡の奴をなんとかして、そのあとは――」
「そのあとは？」

「まあ、なんとかなるさ」
いつもの、あの言葉である。
それを聞き、葵は、くすくすっと笑いをもらした。
「――なんだ？」
「あのね？　あなたのその〝なんとかなるさ〟っていうのは、つまり、〝なんとでもしてみせるさ〟って、そういう気持ちのことなんでしょう？」
九郎は、ふたたび足を止めた。
「そういうことよね？　どんな状況になっても、あなた、へこたれないの。元気なの。しっかり前だけ向いてるの。そうして本当に、なんとかしてみせてしまうんだわ」
「……わかったような口をきくな！」
「いいじゃないの、私はあなたの妻なんだもの」
「だから、それは――！」
と、こちらを向いた九郎を、葵はすかさず微笑で受け止めて、
「あのね？　香子さまのことなんだけれどね？」
「香子どの……？」
幸衡の実母のことまでいきなり飛んだ話について行けず、九郎は、ふっと眉をひそめた。
「そう。香子さまのことなんだけど、あの方ね、秀衡さまのご遺言だったから一応、国衡さま

のお屋敷へ移りはしたけれど、でも、ご夫婦としての生活はしていらっしゃらないんですってよ？」

「――なんだ、それは？　だってあのふたりは、もともとの恋人同士で……」

やっと世間にも許されたのだから、今ごろは、幸せに、仲むつまじく、暮らしているのだろうと見ていたのに。

「でもね、今は、亡くなられた秀衡さまが一番、大切なんですって」

「なぜ？」

「わからない？」

わからない――と、九郎は、ゆっくり首を横に振ってみせている。

「私には、わかるな。香子さまにとっての国衡さまが、私にとっての鬼王だったもの」

「……？」

「昔の恋なの。少女のころの、きれいなきれいな――きれいなだけの思い出なの。そんなものにいつまでも縛られているわけはないでしょう？　鬼王と会わなかった間、いろんなことがあったわ。つらいことも、すごくすごく嬉しかったことも、たくさんあったわ。それを、私たちは一緒に感じてきたでしょう？　私、あなたの妻になってから、何もかもあなたと一緒に……」

ぽろり、葵の瞳から涙が落ちた。

それは悲しい色でなく、やさしく、おだやかに、ゆったりと頬を流れて……。

「私、そんなにバカじゃない。意地だけで、こんなところにまであなたを追いかけて来たりしないわ」

葵の言葉を、九郎は、ゆるやかに首を傾けて、たまらなく愛しいものを抱きしめる思いで聞いていた。

「私、あなたが大切だから。あなたと一緒に生きたいから。もっともっといろんなこと、あなたと一緒に——あなたと、愛寿と、三人で——！」

その言葉が終わらないうちに、九郎の手が、す……っと伸びて葵を包んだ。

手放すつもりだったのだ。やさしい初恋の中に帰してやるつもりだったのだ。

幸い、愛寿は幸衡になついている。幸衡と葵と愛寿と——三人、きっと親子になれる。自分さえ消えれば、平泉からも鎌倉からも追われる理由はなくなり、幸せになれるはず。

そう思った。そのつもりだった。

でも。

「ひとりで行っちゃだめよ？　絶対に、だめよ？」

腕の中へこぼれ落ちてきた葵の呟きに、気がつけば九郎は、そっと合わせた頬のあたたかさで応えている。いつからだったのか——このぬくもりは、もう、九郎の肌に、しっとりと馴染んでしまっている。

（……手放せない）

そして流れた時間は、ひとつ息をするより短いものだったかもしれないし、甘い想いを分け合うには充分すぎるほどの長さだったかもしれない。

けれどもまだ、矢唸りと怒号が続いている。

やがて、

（早く、ここを離れたほうがいい）

と、九郎の頭が冷静に働きはじめた、ちょうどそのとき。

来た道のほうから、ぶわ……っ！　と、炎が上がった。館に火がかけられたのだ。

九郎はそのまま葵を抱き上げ、走り出そうとした。

ところがすぐそばの茂みから、顔がひとつ、ひょいと現れたかと思うと、

「九郎どのがいたぞ――！」

始末する間もなく、叫び声をあげられた。

藤原家の郎党だ。顔に見覚えがある。

「……見つかったか！」

「九郎!?」

「黙ってろ！」

叫ぶなり、九郎は駆け出す。

けれど、すぐに囲まれた。
それも実に巧妙に、逃げるには館のほうへ——つまり炎のほうへ走るしかないように、じりじりと間合いを詰めてくる。
仕方なく、九郎は走った。
次第に迫り来る炎の色を、やけに華やかなものに感じながら。その色に魅(ひ)かれるように高揚(こうよう)してゆく、不思議な気持ちを感じながら。
それでも、しっかりと葵を抱きしめて。この先に待つものは明日なのだ、自分がこんなところで死ぬはずはないのだ——と、奇妙なまでの確信を胸に抱いて。
九郎は、走り続ける。

夢跡

平泉が鎌倉軍の手に落ちたのは、それから四カ月のち——文治五年、九月のことである。

藤原泰衡は、

「仰せのとおりに九郎どのを討ちました」

と、九郎義経の首なるものを鎌倉に送ってきたのだが、頼朝がそれで許すはずはない。彼の目的は、あくまでも奥州を手に入れることなのだ。

奥州を、討った。

館に火をかけ、逃げ出した泰衡は、けれども頼った家臣に殺された。その家臣も「主人への恩を忘れてのふるまい、何事か」と、頼朝に殺された。

平泉は、終わった。

☆

九郎と葵は、ついに戻らなかった。

幸衡は、愛寿を抱いて平泉の町にひそみ、彼らを待ったが現れない。

ふたりは、死んだのか――？

が、鎌倉に送られた〝九郎の首〟が偽物だということは、実は、平泉の者なら誰もが知っている事実だった。

泰衡勢は、確かに九郎を追い詰めた。が、炎の勢いに邪魔されて、あっという間に見失ってしまったらしいのだ。泰衡は、とにかく九郎の姿に似た死骸を――と、わざわざ選び、首を掻き取り、鎌倉に送ったのだという。

死んだとは、言いきれない。

幸衡は、弥太郎を放ち、探らせた。自らも、歩き回って捜した。それでも、ふたりの姿は消えたままである。

が、平泉が落ちたあとは、どうにも動きにくくなった。幸衡も藤原一族のひとりなのだ、見つかれば捕らえられてしまう。

「そろそろ――」

と、弥太郎が幸衡をうながしたのは、平泉に入っていた頼朝が、藤原氏の残した寺のひとつを見学に行くという日の、前夜であった。

頼朝が外出するとなれば、その道々には見物の者があふれかえるはずだ。それに紛れてしまえば平泉からの脱出は、たやすい。

でも。

幸衡の胸の中に、ぽかりと空いた穴がある。

九郎がいない——そう思うだけで、胸のその穴から、すかすかと心が抜けてゆく。そうすると、身体が軽くて、軽すぎて、力が出ない、立ち上がれない、どこへも行けない……。

（俺はこの先、どうしたらいいんだろう？）

幸衡の毎日は、九郎なしには回らない日々だった。いつも、彼の行動の真ん中には九郎がいた。彼の世界の基準は、九郎だった。

でも、今は九郎がいない。

すると途端に、未来が消えるのだ。ぽかりとした空間が、白く続いて見えるだけなのだ。

ひとりでは、生きてゆけない——？

幸衡は、膝の上の愛寿の重みを、ぎゅっと抱きしめてみた。

この子がいる。早くどこかに落ちついてやらなければ——と思う。

「幸衡さま——？」

弥太郎の目が、心配げに幸衡をのぞき込む。

「……大丈夫」

と、幸衡は言う。

大丈夫、大丈夫だ、生きてゆける……。

呪文のように呟きながら、けれど、抜けてゆく心の行方を、頼りない思いで見つめ続ける。

「……幸衡さま」

ふたたび彼の名を呼んだ弥太郎に、そして、膝の上で眠る愛寿の重みに、幸衡は応えるように笑い、

「それにしてもおまえ、なんで俺について来るの？」

「……は？」

「藤原家は滅びたのに、秀衡じいさんも泰衡も、みんなみんな、もういないのに、どうして俺について来る？」

「それは――」

弥太郎は、眉ひとつ動かしもせず、

「幸衡さまが、秀衡さまに生き写しでいらっしゃるからです」

と、九郎と同じことを言った。

「幸衡さまが生きておられる限り、藤原家は滅びない」

「それは――」

幸衡は、そっと弥太郎から視線をはずし、

「それは、藤原家を再興しろ――と、平泉を取り戻せ――と、そういう意味か？」

けれど、弥太郎から返る答えはなかった。

沈黙の中、それでも幸衡は、弥太郎の反応を確かめようとはせず、秀衡が死ぬ前に押しつけてきた文のことを思い出している。

そこに書かれていたのは、

〈おまえは、おまえの生きたいように生きるがいい〉

と、ただひと言……。

（俺の生きたいように、生きる――？）

自分は何をしたいのだろう？　何を欲しているのだろう？

長い間、九郎を思うことだけに縛られ続けていたせいで、自分の意思が、いったいどちらを向くものであったのか、それすらわからなくなっている――。

☆

それでも幸衡は、翌日、愛寿の手を引いて人込みに溶けた。

わからないまま、見えないまま、それでも一度、この平泉から離れてみようと思った。

ところが、背中に名前を呼ばれた。

しかも、昔の名前。

「鬼王――！」

と。

女の声だ。葵だろうか？　――いや、葵は彼を幸衡と呼ぶようになっていた。でも――。
速くなった鼓動をなだめつつ、振り返る。
懐かしい顔が、そこにあった。
静である。

☆

「こんなところまで、来るつもりなんてなかったんだけど。九郎が死んだって聞いて、ついつい来ちゃった」
静は、昔と少しの変わりもない華やかな色で、笑った。
けれども幸衡は、ゆっくりと首をふり、
「死んだかどうか、わからない」
「……なんですって？」
事情を話して聞かせた。
静は神妙な顔でそれを聞いていたが、どれほど捜してもやはりふたりは見つからない――と聞くと、何かを考え込んだ様子になった。
幸衡に手をつながれた愛寿が、ものめずらしそうに静を見上げている。
それに気づいた静が、物思いを止め、愛寿に視線を合わせて座り込み、

「いくつ？」
「よっつ」
愛寿は、不器用に折った指で、四の数を示してみせた。
「この子、あんたの子？」
「ばか。九郎の子だよ」
静は、思わず目を上げ、
「九郎と――葵さまの？」
「ああ」
「――そう。そうなの？」
幸衡の手から愛寿を受け、抱き上げた。抱きしめた。
「そう――、九郎の子なの……」
呟く姿を、幸衡はただ見つめた。
愛寿を抱きしめる静の胸に滲むのは、いったい、どんなかたちの想いなのか。九郎を想う愛しさか、死んだ我が子を想うせつなさか――。
言葉にはならない思いやりを込め、幸衡は、ただ静を見つめた。
それから、わざと話をそらし、
「俺、これからどうしようかな？」

静も、胸に滲んだものなどもうすでに忘れたふりで振り向き、
「――なんですって？」
「だから、これからどうしようかな――って」
「そうねえ。とりあえず、どこへ行くつもりなの？　なんなら私のところへ来る？　私、都に戻っているのよ」
「そうじゃなくて」
「あ、そうか、あの人が連れなの？」
静は、離れたところにひっそりと立つ弥太郎を指さし、
「見たとこ、商人のようだものね。あの人についていれば食いっぱぐれることは――」
「だから、そうじゃなくて」
「――ん？」
「そうじゃなくて、俺は――」
説明しようと思ったが、やめた。あんな泣きごとを言ったら、静には叱り飛ばされそうな気がする。
そのとき、静に抱かれた愛寿の手が、幸衛の髪にふれた。
「――なに？」
「むこうから、おうまがくるよ。ひともいっぱいくるよ。おうま、おうま！」

頼朝一行が現れたようだ。

「あら私、隠れたほうがいいかしら？　一応、許されてはいるけど、鎌倉にいたころ、頼朝にはひどいことばかりしちゃってるし」

あたふたと、隠れるところを探しているらしい静の様子を見つめながら。

幸衡の脳裏に、ふと、いつかの頼朝の言葉が浮かんだ。

〈わたしは、おまえの素性を知っている〉

頼朝は、そう言っていたのだ。

それはつまり、幸衡が藤原一族の人間であることを、藤原秀衡の孫であることを、知っている——と、そういうことだ。

だったら、わざと顔を見せてやろうか？　この顔をここに見つけたら、あの男は、どんな反応を示すだろう？　もしも、その頬に脅威の色を滲ませたなら——？

（藤原家を再興する、平泉を取り戻す——）

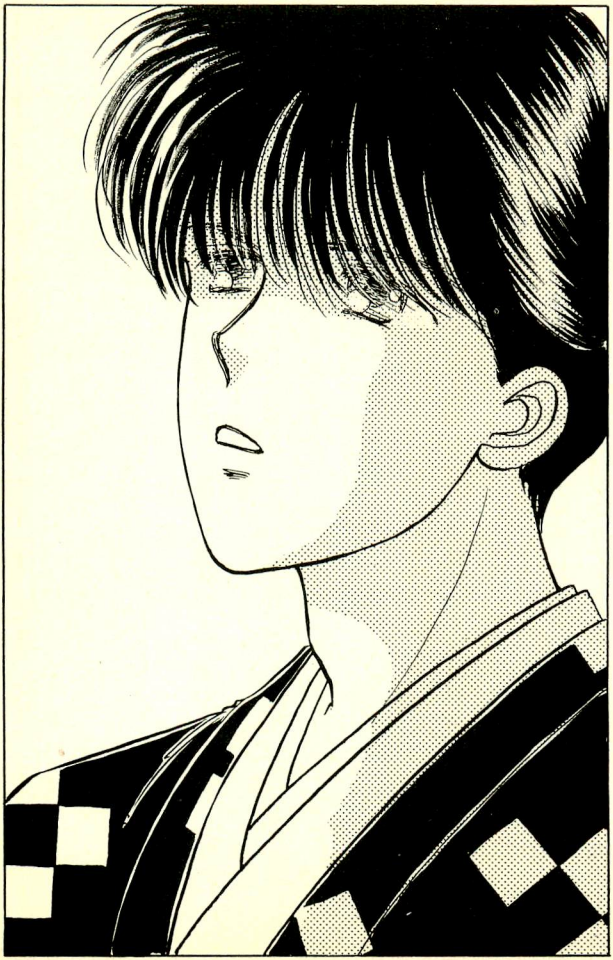
そのために生きてみるのも、面白いかもしれない。

幸衡は、近づいてくる馬上の頼朝を、しっかりと見据えた。

頼朝が、過ぎた。

幸衡の顔を見た。確かに見た。

けれどもその頬には、何の色も浮かばなかった。知らぬ男を見る顔だった。



過ぎてゆく。そのまま、頼朝は過ぎてゆく……。

やがて、

「は――っ、ははは っ！」

と、幸衡のくちびるから中途半端な笑いが落ちた。

「どうしたの？　どうかしたの？」

愛寿を抱いたまま人陰に隠れて避難していた静が、飛んできて訊ねた。

「いや――、なんだか、ばかばかしくて」

今の頼朝の態度は、なんだったのだろう？　幸衡の顔を見忘れたのか、それとも取るに足らない男と知らぬふりをしたのか。

わからないけれども幸衡は、

〈もう忘れろ。かかわるな〉

そんな声を聞いた気がしていた。

誰の声かはわからない。頼朝の声かもしれない。秀衡の声かもしれない。いや、九郎の声かもしれない。とにかく、聞いたのだ。

もう、かかわるな――。

何ごとにもかかわらない。鎌倉にも、鎌倉の手に落ちた平泉にも、それを取り巻く人間にも。

そう決めたその瞬間、藤原幸衡の名を、彼はひらりと脱ぎ捨てた。ただの、鬼王丸――その

名のまま、これからを生きてゆこう。
「ねえ、どうしたの？　何がばかばかしいの？」
心配げに訊ねる静に、
「いや、ばかばかしいことをちょっと思いついちゃったんだけど、あんまりばかばかしいから、やっぱりやめようと思っただけさ」
「……ふうん？」
静は、幸衡を――鬼王を見上げるようにして唸ったが、
「ねえ？」
「なんだ？」
「とりあえず、この子のために生きてみたら？」
「……？」
「さっき、これからどうしようか――みたいなこと、言ってたでしょ？」
「――ああ」
静は、まだそのことを考え続けていたようである。そして、
「この子のために生きてみるの。そうしているうちに、九郎と葵さまも帰ってくるかもしれないし」
などと、実にのんびりとした顔で言ってのけるのだ。

「帰ってくる――？」

「そうよ。まだまだ死んだと決まったわけじゃないんだもの。あのふたりよ？　案外、しぶとく生き残ってるんじゃないかと私は思うわ。すぐに帰れなかったのは、きっと何か事情があるのよ。だからよ。そう思わない？」

静は笑った。

晴れた日だった。静の笑顔が、陽ざしに乱反射して跳ねた。

そのあまりの眩しさに、鬼王は思わず目を細め、

「おまえが言うと、ほんとにそうじゃないかって気がしてくるな」

「気がしてくるだけじゃだめよ。そう信じていましょう。いつか必ず、九郎と葵さまに会える――って。それまでは、この子と一緒に生きてみるの。それでね、その先のことは、またそのときに考えるの。――ね？」

「……そうだな」

幸衡は頷きつつ、そっと目を閉じてみた。

風の中に、九郎を感じる。葵を感じる。同じ風が続くどこかで、ふたりは今も呼吸をしている――。

だから、終わらない。

まだ、何も終わらないのだ。

――おわり――

あとがき

この『華焔』は、雑誌「コバルト」に掲載されたものに、大幅な加筆をしたものです。文庫にするに当たって、かなり手を入れたので、雑誌を四回分、すべて持っているという人は、比べてみると面白いかも……？

☆

私、義経ものは、痛快なのが好きです。だから、少年隊の東山くんが、何年か前、テレビドラマでやっていた義経が、すごく好きだった。

なんか、いいのよ。腕白だけどキリッとしてて、だけどやっぱり腕白で、最期までこどもこどもしてて、でもやっぱりキリッとしてて、なんて言っていいのかわからないんだけど、私が義経に持っているイメージそのものだったの。あれは、義経の悲劇を描こうというより、源平合戦の時代を痛快に描こうとしていた感じで、好き。

でも、その一、二年後くらいにやっていた義経は、あんまり好きじゃなかったな。弁慶役も

義経役も私の好きな役者さんだったんで、期待してビデオに録ったんだけど、ありきたりな話で、つまんなくて、結局、見なかった。

とか言いつつ、先日、偶然、その番組のラストだけがまだビデオテープに残っているのを発見して、ついつい見てしまったら、ついつい泣いてしまったという……。

そういうの、見れば泣いちゃうけど、でも、やっぱり好きなのは、痛快な義経ものだなあ。

☆

吾妻鏡に〝義経の婿〟という人が出てきます。

それは、源平合戦の火蓋を切った源頼政（この人が以仁王という皇子と一緒に挙兵したのが、すべての始まりになる）の孫に当たる、源有綱という人なんだけど。

つまり、義経には、静が産んだ子と河越重頼の娘が産んだ子の他にも、娘がいたということらしい。その娘が源有綱に嫁いでいた——と。

有綱は、義経の都落ちに同行したけれど、大物の浦以降は別行動を取っていて、その翌年、鎌倉方に攻められて自殺。

そのとき、義経の娘という女の子がいくつだったのかは、わからないんだけど、義経が十代だったころに生まれた子としても、十歳そこそこ（実際、誰かが〝十代のころ平泉で娶った妻が産んだ子〟と書いているのを読んだことがある）。

有綱のほうも、いくつで亡くなったのか不明なんだけれど、こちらは、お祖父ちゃんの頼政のほうから推してみると、少なくとも二十歳は過ぎていたんじゃないかなー、と、そのほうが自然だよなー、と、そういう年齢が浮かび上がってくる。

大人のダンナに、十歳そこそこの妻――今、思うと、なんだか変な夫婦だけど、昔は、よくある話だったんだものねえ。

この『華焔』では、その子を登場させると話がややこしくなるので、無視した形になってしまいましたが、私は、とっても興味がある。彼女、義経が死んだあとの時代を、どんな気持ちで生き抜いていったんでしょうね。

☆

『夢鏡』の中で、私は、この話の主人公と同じ女の子を〝若菜〟という別の名前で登場させているので、「どっちが本当の名前なの!?」という手紙が届いたことがあった。

実は、この〝河越重頼の娘〟という人は、名前が伝わっていないんです。だからまず『夢鏡』で〝若菜〟と名付けて書き、それが気に入っていたので、今回も同じ名前にしようかなー、なんてチラリと思ったりもしたんだけど、『夢鏡』と『華焔』とでは、話が違いすぎるところがたくさんあるので、同じにしたらかえって混乱する人が出るかも……、ということで、新しく〝葵〟という名前を考えたのでした。

だから、この〝河越重頼の娘〟は、いろんな作家のいろんな小説に、いろんな名前で登場しています。こういう、名前のわからない女性に名前を考えて付ける、というのは、書き手としては、すごくすごく面白い作業のひとつです。

でも私、なぜか大姫には、そういう名前を付けようと思わないのよねえ。

なんでかというと、彼女の実名は、なんとなく予想がついてしまうから。

ほら、兄弟の名前がみんなわかっているでしょ？　上の弟が万寿（頼家）、妹が三幡、下の弟が千幡（実朝）――。そのへんから考えると、彼女も多分、似たような名前が付けられていたんだろうと思われる。三幡が三人めの子で三幡だから、一番最初の子ということで〝一幡〟とか。これは実際、頼家の長男に付けられている名前だしね（当時は、これは男の子の名前、これは女の子の名前、と、特別、分けられてはいなかったようなので）。

でも、どうせ付けるなら、可愛くてキレイな名前を付けたくなるものでしょ？　でも、兄弟の中で彼女の名前だけ浮いてる――っていうのも笑っちゃうからさ。

それで、大姫は〝大姫〟なのでした。

それから。

話は変わるけど、私、前にも『千の夢を見る』という、義経が十六歳だったころの話を書いています。それは転生もので、義経の時代と現代と両方、出てくる話なんだけど。

あの話の義経と、この『華焔』の義経は、同一人物だと解釈してもらっていいです。あの話

が、あのままこちらに続いてくる——みたいな感じに。

特別、そういうつもりはなかったんだけど、書き終わってみたら、なんか、ほとんど同じ人間だったから。——あ、でも、あの話には鬼王丸が出てなかったっけ。ま、いいか。あの後でふたりは仲よくなったんだ——ということにすれば、この矛盾も解決ついてしまうのだった。

☆

ところで。

九郎と葵は、あれからどうなったと思いますか？

私は、どう思っているかというと——。

その辺のところは、また機会があったときに聞いてね、ということにしておきましょうか。

一九九三年十一月

倉本由布

●この作品は雑誌「COBALT」'93年2月号から8月号まで4回にわたって連載されたものに、加筆したものです。

この作品のご感想をお寄せください。

倉本由布先生へのお手紙のあて先
〒101—50　東京都千代田区一ツ橋2—5—10
集英社コバルト編集部　気付
倉本由布先生

くらもと・ゆう

1967年6月14日、静岡県浜松生まれ。双子座、O型。浜松市立高校をへて、共立女子大文芸学部卒業。1984年春、高二のとき、第3回コバルト・ノベル大賞に『サマー・グリーン／夏の終わりに…』が佳作入選、高校生作家としてデビュー。コバルト文庫に『恋は風いろ不思議いろ』『シナモンハウスの午後』『ガラスの靴に約束』『夜あけの海の物語』『秘密の夏を花束にして』『ポケットにハート時計』『プリティ・プリティ』『星姫紀行』『さよならから始まる物語』『イブたちへの伝言1～2』『さよなら、夏のシルエット』『雪あかり幻想』『天使のカノン』『眠り姫たちの序曲』『HEARTS』『あの夏に逢おうね』『ガラスの楽園』『初恋草紙』『夢鏡』『片想園』『雪の系譜』『あの海へかえりたい』『海に眠る』『空耳の恋唄』『八月に夢を見よう』などがある。趣味・旅行と衝動買い。



華　焔　—義経の妻—

COBALT-SERIES

1993年12月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著　者　倉本由布
発行者　若菜正
発行所　株式会社集英社

〒101－50
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
(3230) 6268（編集）
電話　東京 (3230) 6393（販売）
(3230) 6080（制作）

印刷所　図書印刷株式会社

©YÛ　KURAMOTO　1993
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611798-3 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

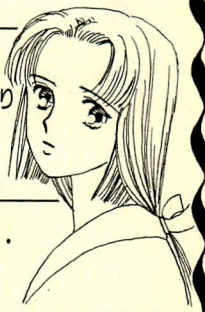
歴史の中に咲いた小さなロマンス！

倉本由布

イラスト／湯口聖子

夢鏡（ゆめのすがたみ）

義高と大姫のものがたり



14歳の大姫はひとつ年上の義高と結婚するが、悲しい結末を…。

雪の系譜

竹御所・鞠子

鞠子は鎌倉二代目将軍・源頼家の娘。ある日、北条館を訪ねたとき、三浦泰村さまに出会って恋したけれど。

千の夢を見る

義経転生幻想記

男女のミイラを見に、平泉にやってきた双子の兄妹・陸とあづさ。その夜、ふたりは前世の夢をみて…。

〈好評発売中〉 コバルト文庫

涙と感動の歴史悲恋ものがたり。

倉本由布 〈鎌倉盛衰記〉シリーズ
イラスト／湯口聖子

海に眠る

義高と大姫

源 頼朝の長女・大姫の婿としてやってきた義高。だが、その実態は人質で―。



鎌倉へやってきた文珠は、はかなげな少年と出会う。彼こそが、源 頼家だった…。

空耳の恋唄

頼家私伝

〈好評発売中〉 コバルト文庫

少女の恋をみつめた人気ラブ・ロマン。

倉本由布 〈天使のカノン〉シリーズ

イラスト／槇 夢民

天使のカノン
眠り姫たちの序曲
HEARTS(ハーツ)
あの夏に逢おうね
ガラスの楽園
初恋草紙
片想園(かたおもいえん)
あの海へかえりたい
メロディ～もう夢は終わらない～

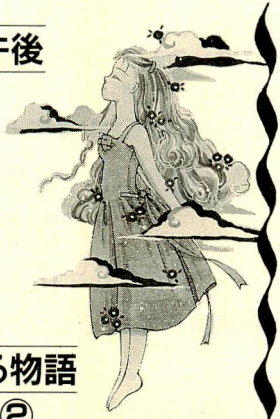


〈好評発売中〉 コバルト文庫

女の子の心をやさしく描く夢色ロマン。

倉本由布

イラスト／槇 夢民



シナモンハウスの午後
ガラスの靴に約束
夜あけの海の物語
秘密の夏を花束にして
ポケットにハート時計
プリティ・プリティ
星姫紀行
さよならから始まる物語
イヴたちへの伝言①②
さよなら、夏のシルエット
雪あかり幻想
八月に夢を見よう

コバルト ノベル大賞 募集中!

『COBALT』編集部では、「コバルト・ノベル大賞」を募集しています。この賞は、才能ある作家志望のかたを、新人作家として世に送り出すためばかりではなく、小説を書くことの楽しさ、創作することの喜びを広く若いかたたちにも味わっていただきたい、という願いもこめて設置されたものです。

ロマンの新しい時代を切りひらく、あなたのフレッシュな力作100枚前後(400字詰原稿用紙95枚以上105枚以下)を、お待ちしております。

〈入　選　作〉 **正賞の盾と副賞100万円**

〈佳　　作〉 **正賞の盾と副賞 50万円**

〈コバルト読者大賞〉 **正賞の盾と副賞 50万円**

応募要項は隔月刊「Cobalt」に毎号掲載されています。

人気作家の最新作が一気に読める夢♡小説誌!

コバルト **Cobalt**

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売!

隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

●「コバルト短編小説新人賞」「ショート ショート」を毎号募集しています。